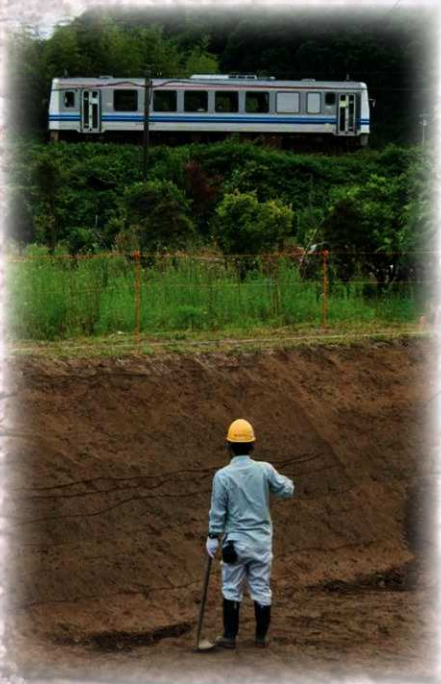
一級河川江の川直轄河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1

田渕遺跡



2018年6月

国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所
島根県教育委員会

田渕遺跡

2018 年 6 月
国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所
島根県教育委員会

序

江の川は、広島県の阿佐山に源を発し、日本海に注ぐ中国地方最大の一級河川です。江の川は昭和47年7月の梅雨前線による洪水など歴史上度々水害を引き起こし、日常生活はもとより地域の経済活動に少なからず支障をきたしてきました。国土交通省では、緊急時の安全の確保、地域経済の振興、及び生活圏域の連携を促進することを目的として、江の川水系河川整備計画を策定し、これにもとづいて、江の川下流土地利用一体型水防災事業(川平地区)を進めています。

河川改修にあたっては、埋蔵文化財の保護に十分留意しつつ関係機関と協議を行っていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、河川改修事業者の負担により必要な調査を実施し、記録保存を行っています。本事業においても、事業地内にある遺跡について島根県教育委員会の協力のもとに発掘調査を実施しました。

本報告書は、平成29年度に実施した江津市川平町地内に所在する田渕遺跡の調査成果をとりまとめたものです。今回の調査では、12世紀から14世紀にかけての施設の一端が見つかり、当時の人々の生活を考える上で貴重な成果となりました。

本報告書がふるさと島根の歴史を伝える貴重な資料として、学術並びに歴史教育のために広く活用されることを期待します。

最後に、当所の河川整備事業にご理解、ご支援をいただき、本埋蔵文化財発掘調査及び調査報告書の編纂にご協力いただきました地元の方々や関係諸機関の皆様に対し、深く感謝いたします。

平成30年6月

国土交通省浜田河川国道事務所

国道事務所長　安野　聡

序

本書は島根県教育委員会が国土交通省浜田河川国道事務所から委託を受けて、平成 29(2017) 年度に実施した一級河川江の川直轄河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果をとりまとめたものです。

本報告書で報告する田渕遺跡では、中世の柱穴列や土師器を一括廃棄したと考えられる土器溜まりが発見され、主に 12 世紀から 14 世紀にかけての遺物が出土しました。

石見部には古くより人々の生活や生業と深く関わる江の川が流れており、流域からは貴重な遺跡が多数発見されています。今回調査にあたった田渕遺跡は、これまで比較的調査例の少なかった中世の遺跡であり、当時の集落の様子や、江の川流域の歴史を考える上で貴重な発見となりました。本報告書が、この地域の歴史を解明していくための基礎資料として広く活用されることを願っております。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の作成にあたりご協力いただきました国土交通省浜田河川国道事務所をはじめ、江津市、川平地区の方々並びに関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成 30 年 6 月

島根県教育委員会

教育長　鴨 木　朗

例言

1. 本書は、国土交通省中国地方整備局浜田河川国道事務所から委託を受けて、島根県教育委員会が平成 29 年度に実施した一級河川江の川直轄河川改修事業（川平地区及び森原地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、江津市川平町南川上に所在する田渕遺跡の発掘調査成果をまとめたものである。
2. 本報告書の発掘調査対象遺跡及び事業年度は下記のとおりである。

   平成 29 年度　　田渕遺跡（江津市川平町南川上 153-1 外）
   　　整理等作業・報告書作成
3. 調査組織

   調査主体　島根県教育委員会

   平成 29 年度

   事務局　萩　雅人（埋蔵文化財調査センター所長）、石橋　聡（総務課長）、池淵俊一（管理課長）

   調査担当者　増田浩太（調査第二課企画員）、阿部賢治（同嘱託員）、岩田　剛（同臨時職員）、佐伯俊幸（同）
4. 発掘調査作業（安全管理、発掘作業員の雇用、機械による掘削、測量等）については次の業者に委託した。

   平成 29 年度：大畑建設株式会社
5. 発掘調査にあたっては、以下の方々から御協力、御助言をいただいた。（五十音順）

   NPO 法人アジア水中考古学研究所 理事 田中克子、島根県立三瓶自然館 主幹 中村唯史、大田市教育委員会職員 西尾克己
6. 挿図中の北は測量法に基づく平面直角第Ⅲ系Ｘ軸方向を示し、座標系ＸＹ座標は世界測地系による。レベルは海抜高を示す。
7. 本書第３図は、国土地理院発行 1/25,000 電子地図を使用して作成したものである。
8. 本書に掲載する色調は『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修 第 37 版 2014 に従って表記した。
9. 本書に掲載した遺構・遺物の写真は増田が撮影した。また、掲載した遺構図・遺物実測図の作成・浄書は、調査員・臨時職員・整理作業員が行ったほか、埋蔵文化財調査センター職員の協力を得た。
10. 本書の執筆は、第１～３章、第５章を増田が、第２章第２節を幸村康子（埋蔵文化財調査センター）、第３章のうち陶磁器類は阿部が執筆した。第４章は上山晶子（埋蔵文化財調査センター）、渡辺正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）が行った。
11. 本書の編集は増田が行った。
12. 註と引用・参考文献等は各章末にまとめて示した。
13. 本書に掲載した遺物及び実測図・写真等の資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター（松江市打出町 33 番地）にて保管している。
14. 表紙写真：田渕遺跡の調査と三江線、川平駅ホームの桜並木

本文目次

第１章　調査の経過 …… 1
第１節　調査にいたる経緯と経過 …… 1
1. 事業計画の概要…… 1
2. 埋蔵文化財保護部局への照会と調整…… 2
3. 法的手続き…… 3
第２節　発掘調査と整理作業の経過 …… 3
1. 発掘作業の概要…… 3
2. 整理作業の概要…… 4
第２章　遺跡の位置と環境 …… 5
第１節　地理的環境 …… 5
第２節　歴史的環境 …… 6
第３章　田渕遺跡の調査成果 …… 11
第１節　田渕遺跡の概要 …… 11
1. 発掘調査区の設定…… 11
2. 調査グリッドの設定…… 11
第２節　田渕遺跡の調査 …… 13
1. 調査方法…… 13
2. 基本層序…… 13
3. 第７層及び第１遺構面の調査 …… 17
4. 第8･9層および第２遺構面の調査 …… 21
5. 第10層（上層）および第３遺構面の調査 …… 24
6. 第10層および第４遺構面の調査…… 28
7. 層位不明遺物…… 35
8. 陶磁器類…… 35
9. 鉄器、その他の出土遺物…… 43
第４章　自然科学分析 …… 47
第１節　田渕遺跡出土遺物の蛍光Ｘ線分析について …… 47
第２節　田渕遺跡周辺地域における
古植生などの古環境変遷について …… 48
第５章　総括 …… 57
第１節　中世の遺構と遺物 …… 57
第２節　鍛冶・製鉄関連遺構と遺物 …… 61
第３節　まとめ …… 62

本文写真目次

写真１　逆流、増水する奥谷川 (平成 29 年７月) …… 2
写真２　現場公開風景 …… 3
写真３　土壌サンプル採取風景 …… 3

本文中の表・グラフ目次

表Ⅰ　坏・皿類 (土師質土器) 数量一覧表 …… 57
表Ⅱ　陶磁器類数量一覧 …… 58
グラフⅠ　陶磁器類の割合 …… 58
表Ⅲ　出土輸入陶磁器類編年表 …… 60
表Ⅳ　放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}C$ 補正値) …… 61
表Ⅴ　放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}C$ 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代) …… 61

挿図目次

第１図　田渕遺跡の位置 …… 1
第２図　江の川流域図 (国土交通省 2016 を一部改変) …… 5
第３図　田渕遺跡と周辺の遺跡 (S=1:2,500) …… 7
第４図　田渕遺跡 グリッド配置図 (S=1:500) …… 11
第５図　田渕遺跡調査区位置図 (S=1:1000) …… 12
第６図　北壁土層図 1(S=1:60) …… 14
第７図　北壁土層図 2(S=1:60) …… 15
第８図　第１遺構面遺構配置図 (S=1:300) …… 17
第９図　SK01 実測図 (S=1:20) …… 18
第 10 図　焼土 01・02 実測図 (S=1:20) …… 18
第 11 図　7-1 層出土遺物 (S=1:3,1:2) …… 19
第 12 図　7-3 層出土遺物 (S=1:3,1:2) …… 19
第 13 図　第２遺構面遺構配置図 (S=1:300) …… 20
第 14 図　SX02・SX03 実測図 (S=1:30) …… 21
第 15 図　ピット群出土状況図 (S=1:200,1:100) …… 22
第 16 図　第９層出土遺物 (S=1:3,1:2) …… 23
第 17 図　第３遺構面遺構配置図 (S=1:300) …… 25
第 18 図　SK02,SK04(焼土 03),SK03 実測図 (全体図 S=1:80，各遺構図 S=1:20) …… 26
第 19 図　SK02 層出土遺物 (S=1:3) …… 27
第 20 図　第４遺構面遺構配置図 (S=1:300) …… 28

第 21 図　土器溜まり 1 出土遺物 (S=1:3,1:2)…… 29
第 22 図　土器溜まり 1 出土状況図 (S=1:20)…… 29
第 23 図　土器溜まり 2 出土状況図 (S=1:20)…… 31
第 24 図　土器溜まり 2 出土遺物 (S=1:3) …… 32
第 25 図　第 10 層出土遺物 (S=1:3,1:2) …… 33
第 26 図　層位不明出土遺物 (S=1:3,1:2)…… 34
第 27 図　陶磁器類 1(S=1:3,1:2) …… 38
第 28 図　陶磁器類 2(S=1:3,1:2) …… 40
第 29 図　鉄製品 (S=1:3,1:2)…… 43
第 30 図　鍛冶・製鉄関連遺物 (S=1:3) …… 44

表目次

第 1 表　田渕遺跡出土遺物観察表 (土器) …… 64
第 2 表　田渕遺跡出土遺物観察表 (土錘) …… 66
第 3 表　田渕遺跡出土遺物観察表 (陶磁器) …… 66
第 4 表　田渕遺跡出土遺物観察表 (石器) …… 68
第 5 表　田渕遺跡出土遺物観察表 (鉄製品) …… 68
第 6 表　田渕遺跡出土遺物観察表 (鍛冶・製鉄関連) …… 68

写真目次

図版 1 上空から見た田渕遺跡東区（西から）
上空から見た田渕遺跡東区（真上から）
図版 2 上空から見た田渕遺跡西区（西から）
上空から見た田渕遺跡西区（真上から）
図版 3 調査前の状況（西から）
調査前の状況（北東から）
図版 4 SK01 出土状況（南から）
焼土 01 出土状況（北から）
図版 5 SX02 出土状況（北東から）
SX03 出土状況（南から）
図版 6 第 2 遺構面柱穴列・東区（西から）
第 2 遺構面柱穴列・西区（東から）
図版 7 SK04（焼土 03）出土状況（東から）
SK04（焼土 03）半裁状況（南から）
図版 8 SK02 半裁状況（北西から）
SK02 半裁状況（南東から）
図版 9 SK02 完掘状況（西から）
SK03 半裁状況（南東から）
図版 10 土器溜まり 1 出土状況（北東から）
土器溜まり 1 出土状況（南西から）
図版 11 土器溜まり 2 出土状況（北東から）
土器溜まり 2 出土状況（南から）
図版 12 土器溜まり 2 出土状況（北東から）
土器溜まり 2 出土状況（南東から）
図版 13 7-1 層、7-3 層出土遺物
第 9 層出土遺物
図版 14 土器溜まり 1 出土遺物
図版 15 土器溜まり 2 出土遺物 (1)
図版 16 土器溜まり 2 出土遺物 (2)
図版 17 土器溜まり 2 出土遺物 (3)
図版 18 第 10 層出土遺物 (1)
図版 19 第 10 層出土遺物 (2)
図版 20 第 10 層出土遺物 (3)
層位不明遺物 (1)
図版 21 第 10 層出土遺物 (4)
層位不明遺物 (2)
出土陶磁器類 (1)
図版 22 出土陶磁器類 (2)
図版 23 出土陶磁器類 (3)
図版 24 出土鉄製品、流動滓
第 10 層出土碗型鍛冶滓
SK02 内出土羽口
SK02 埋土内出土鍛造剥片
SK02 埋土内出土粒状滓

第 1 章　調査の経過

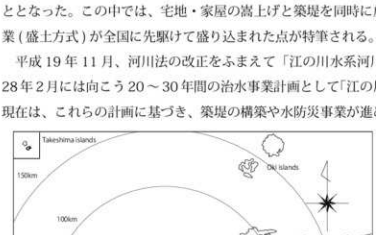
第 1 節　調査にいたる経緯と経過

1. 事業計画の概要

江の川は、阿佐山 (広島県北広島町) に端を発し、島根県江津市で日本海に注ぐ一級河川である。流域面積は約 3,900㎢、幹川流路延長 194.0km を誇る中国地方最大の河川であり、「中国太郎」の別名を持つ。江の川は 3 支流が合流して広大な盆地を形成する上流域と、山間の狭隘部を流れる中・下流域で構成されており、その構造から口 (河口) が狭く、底 (盆地) が広い「ひょうたん形河川」とも呼ばれている。こうした特性から、上流部の盆地では流れ込んだ雨水が下流に抜けにくく、中・下流域では増水時に水位が一気に跳ね上がるなど、常に洪水の危険をはらんでいる。記録によれば、1620 ～ 1945 年の 325 年間で 133 回の洪水が知られており、近年では平成 22 年 7 月の豪雨で浸水家屋 57 軒の被害が生じている。

太平洋戦争終結後間もない昭和 20 年 9 月、日本列島を襲った枕崎台風は各地に甚大な被害をもたらし、江の川流域においても死者・行方不明者 2,091 人、家屋全・半壊及び流失 8,183 戸、床上・床下浸水 68,536 戸の大災害となった。これを受けて、昭和 28 年から上流部を中心に直轄河川改修事業が着手され、昭和 41 年には「江の川水系工事実施基本計画」が策定された。この計画によって、流域の護岸整備や堤防の拡築が進められ、昭和 49 年には土師ダムが完成した。この間、昭和 47 年 7 月には、梅雨前線に伴う集中豪雨により各所で堤防の決壊や越水が発生した。三次盆地中心部の大半が水没し、流域の死者・行方不明者 28 人、家屋全半壊・一部破損 3,960 戸、床上・床下浸水 14,063 戸、三江線粕淵第一橋梁流失など、未曾有の被害を出した。この洪水を契機として、昭和 48(1973) 年には基本計画が改定され、新たな基本高水流量に基づく治水対策が進められることとなった。この中では、宅地・家屋の嵩上げと築堤を同時に施工する、土地利用一体型水防災事業 (盛土方式) が全国に先駆けて盛り込まれた点が特筆される。

平成 19 年 11 月、河川法の改正をふまえて「江の川水系河川整備基本計画」が策定され、平成 28 年 2 月には向こう 20 ～ 30 年間の治水事業計画として「江の川水系河川整備計画」が整備された。現在は、これらの計画に基づき、築堤の構築や水防災事業が進められている。



第 1 図　田渕遺跡の位置

江津市川平地区は、江の川下流 (8K900 ～ 9K700 左岸) にあたり、昭和 47 年 7 月豪雨では地区全体の家屋 58 戸が浸水し、総浸水面積は 29.0ha に達した。この地区は集落の地盤高が HWL(計画高水位) よりも低く、下流では支流奥谷川の合流があるため、常に浸水の危険がある。実際、昭和 58 年 7 月、平成 11 年 6 月、平成 18 年 7 月、平成 22 年 7

月にも家屋浸水を伴う洪水に見舞われている。

こうした状況を改善し、治水安全度を高めるため、築堤の構築とともに宅地等の嵩上げを一貫して行う、土地利用一体型水防災事業が平成 13 年から進められている。同方式は、旧来の築堤方式・輪中堤方式に比べ費用対効果が高く、江の川における治水対策事業では積極的に採用されている。本事業により、100 年一度というような洪水が発生した場合にも、浸水面積の減少、人的被害の防止が図られることになっている。

写真 1　逆流、増水する奥谷川 (平成 29 年 7 月)

2. 埋蔵文化財保護部局への照会と調整

平成 26 年 7 月、国土交通省浜田河川国道事務所から江津市教育委員会に対し、江の川直轄河川改修事業予定地内 (八神地区) の埋蔵文化財等の有無について照会があった。この際、島根県教育委員会文化財課を経由しなかったため、浜田河川国道事務所と市教育委員会の間で対応が協議され、市教育委員会が平成 27 年度中に試掘確認調査を実施することとなった。

平成 27 年 7 月、「江の川水系河川整備計画」策定にかかる第 1 回連絡調整会議が開催され、国土交通省より県関係部局へ事業内容の説明があった。これを受けて同年 9 月、関係する浜田河川国道事務所、県教育委員会 (文化財課・埋蔵文化財調査センター)、市教育委員会の三者で協議が行われ、国事業である河川整備事業に関する調査は県教育委員会が対応することを確認した。またこれまでの経緯を考慮し、市教育委員会が試掘確認調査を実施した一部の遺跡については、市教育委員会がそのまま発掘調査を実施することなど、当面の調整が図られた。同年 11 月、県土木部河川課を通じて県教育委員会に対し「江の川水系河川整備計画 (案)」についての意見照会があり、埋蔵文化財についての事前協議が必要な旨回答した。

平成 27 年 11 月、浜田河川国道事務所から県教育委員会に事業予定地内 (江津市松川町太田～邑智郡美郷町竹) の埋蔵文化財の有無について照会 (平成 27 年 11 月 26 日付け国中整浜河管第 72 号) があった。県教育委員会は、市教育委員会に照会の上、状況の明らかな江津市八神地区内の 4 遺跡について回答するとともに、他の地区については分布調査及び試掘確認調査が必要な旨を付した (平成 28 年 1 月 26 日付け島教文財第 818 号)。これを受けて、平成 28 年 2 月には関係三者による協議がもたれ、今後各地区の事業進捗にあわせて分布調査と試掘確認調査を進めていくこととなった。同年 3 月には、県教育委員会と市教育委員会が共同で江津市川平地区の分布調査を実施し、試掘確認調査が必要な旨回答した (平成 28 年 3 月 23 日付け島教埋第 538 号)。試掘確認調査は、同年 5 月～ 6 月にかけて県教育委員会と市教育委員会が分担して実施し、1,530㎡ (田渕遺跡) について発掘調査が必要な旨通知した (平成 28 年 7 月 29 日付け島教文財第 432 号)。以後、関係三者で協議しながら、順次分布調査・試掘確認調査を続けている。

各遺跡の発掘調査は平成 28 年度から開始され、市教育委員会により八神上ノ原Ⅱ遺跡 (八神地区) が発掘された。平成 29 年度には、県教育委員会により森原神田川遺跡 (八神地区)、田渕遺跡

(川平地区) の発掘調査を実施した。

3. 法的手続き

田渕遺跡は、平成 29 年 3 月 10 日付け国中整浜河管第 65 号で文化財保護法第 94 条第 1 項の規定による通知が、国土交通省浜田河川国道事務所長から島根県教育委員会教育長あて提出された。これに対して県教育委員会は、試掘確認調査の結果を踏まえ、平成 29 年 3 月 10 日付け島教文財第 120 号の 103 で記録保存のための発掘調査実施を勧告している。田渕遺跡は、前記三者協議に基づき県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施することとなり、文化財保護法第 99 条第 1 項の規定による通知を、埋蔵文化財調査センター所長から島根県教育委員会教育長あて提出した (平成 29 年 5 月 1 日付け島教埋第 84 号)。

現地調査終了後、遺跡は記録保存とすることとなり、島根県教育委員会教育長から浜田河川国道事務所長あて終了報告を提出した (平成 29 年 10 月 31 日付け島教文財第 192 の 7 号)。

第 2 節　発掘調査と整理作業の経過

1. 発掘作業の概要

田渕遺跡の発掘作業は、平成 29 年 5 月 23 日～ 10 月 31 日にかけて実施した。調査は、作業工程の都合から東区と西区に分けて個別に実施した。東区は、重機掘削により表土及び近世以降の耕作土を取り除き、5 月 29 日から包含層の掘削に入った。東区では中世の包含層及び、3 枚の遺構面を検出し、6 月 30 日には土器溜まりや中世の出土遺物について西尾克己氏の指導を得た。7 月 27 日には東区の調査をほぼ完了し、ラジコンヘリによる航空写真撮影を実施した。

写真 2　現場公開風景

調査後の東区は、ただちに埋め戻しに入り、西区の重機掘削を開始した。8 月 24 日からは西区の包含層掘削を開始し、東区の層位や遺構面のレベルを参考に調査を進めた。西区では第 2 遺構面と第 4 遺構面の間に小鍛冶炉 2 基とピット群からなる遺構面 (第 3 遺構面) が部分的に確認でき、遺構面は計 4 面となった。10 月 1 日には、地元住民を対象に現場公開を実施し、約 20 名の参加者があった。川平地区での本格的な発掘調査は初めてということもあり、関心の高さがうかがわれた。10 月 5 日には、ドローンによる航空写真撮影を実施し、発掘調査を終了した。西区はただちに埋め戻しを開始し、10 月 31 日の埋め

写真 3　土壌サンプル採取風景

戻し完了検査をもって全ての現地作業を完了した。

調査中の 9 月 28 日には堆積土の性格と古環境調査のため、文化財コンサルタント株式会社に委託し、西区北壁面から土壌サンプルの採取を行った。その成果は第 4 章第 2 節で報告する。また、第 3 遺構面で検出した小鍛冶炉からは、これに伴う木炭をサンプルとして回収し、株式会社加速器分析研究所に AMS 年代分析を委託した。その分析結果は、第 5 章で報告する。

2. 整理作業の概要

出土遺物の水洗・注記・接合作業は現地調査に並行して実施し、発掘調査終了後は埋蔵文化財調査センターにおいて復元・実測等の整理作業を行った。出土遺物は通覧したうえで、報告書掲載品を抽出したが、非掲載品についても分類・カウントし、遺跡の全体像が把握できるよう留意した。平成 30 年 1 月 11 日、12 日には、輸入・国産陶磁器の分類・同定について、田中克子氏の指導を受けた。遺物整理の際、土師質土器類の一部に彩色のある個体が見つかったため、蛍光 X 線分析による顔料同定を行った。分析結果は第 4 章第 1 節で報告する。

遺物写真は、報告書掲載品を中心にデジタル一眼レフカメラ (Nikon D800) で撮影を行い、現像・加工を行った。発掘調査時に作成した図面等の記録は、出土品と併せて総合的に整理検討を行い、適宜修正、追記など必要な作業を行った。これらの画像処理・図版作成・編集等には Adobe 社の各ソフトを使用した。

鍛冶・製鉄関連遺物のメタル度測定には、ムラテック KDS 株式会社製 METALCHECKER MR-50B を使用した。また、金属製品等の内部構造を把握するため、県立古代出雲歴史博物館の協力を得て X 線撮影を行った。

参考文献

国土交通省中国地方整備局 2007『江の川水系河川整備基本計画』

国土交通省中国地方整備局 2016『江の川水系河川整備計画　国管理区間』

国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所ホームページ

島根県 2014『江の川水系下流支流域河川整備計画』

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

江の川と流域の成り立ち

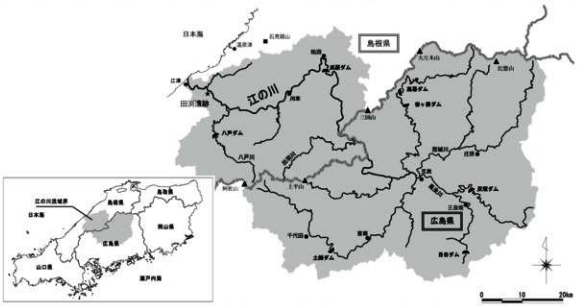
江の川は広島県北広島町の阿佐山に源を発し、三次市、邑南町、江津市など８市７町を経て日本海に注ぐ一級河川である。流域面積は約 3,900㎢、幹川流路延長 194.0km と中国地方最大の河川であり、「中国太郎」の別名を持つ。「江の川」の名称は、昭和 41 年 (1965 年) の一級河川指定に際し定められたものであり、旧河川法時代には「江川」(島根県：昭和５年告示)、「郷川」(広島県：大正８年告示) とされていた。また、『日本書紀』(720 年成立) に「素戔嗚尊下到於安藝国可愛之川上也」とあり、広島県域では江の川本流上流を「可愛川 (えのかわ)」と呼称することから、これに比定する説もある。

江の川は全国的にも珍しい、山地を横断する「先行河川」である。新生代第三紀末葉に起こった地盤隆起にもかかわらず、江の川の流れはそれ以上のスピードで下刻浸食を続け、結果として中国山地を断ち切って日本海へと流れ下る、長大な水系が形成された。上流域には中生代白亜紀の溶結性凝灰岩質岩石帯が広がる。流域の大部分が山間の狭隘部にあたり、西城川や馬洗川などが合流する三次盆地付近を除き、規模の大きな平坦地は存在しない。

こうした地勢的条件のもと、人々は急峻な山と川に挟まれた狭小地に居を構え、古くから生活を営んできた。流域の土地利用状況を見ると、山林が約 92%、水田や畑地等が約 7%、宅地等の市街地は僅か 1%である。(国土交通省　平成 28 年) 平坦な土地が限られるため、流域には比較的小規模な集落が数多く分散、点在している。流域内人口は約 18.4 万人で、近年は全国平均を上回る人口減少率を示しており、少子高齢化が進んでいる。

江の川と水運

江の川では水運が古くから盛んであった。これまで発掘調査例はほとんどないが、江の川を横断



第２図　江の川流域図 (国土交通省 2016 を一部改変)

する横舟（渡し船）だけでなく、上り下る荷舟が立ち寄る船津が各地に存在したことは間違いない。古記録によれば、少なくとも中世後半には上流域から河口までを走破する物資輸送も行われていたようである。江の川沿岸には中世の山城が点在しており、江の川が戦略上の理由だけでなく物流の動脈としても意識されていたことがうかがわれる。

一般に荷舟による物資輸送は、河川整備が進められた近世から発達するが、江の川においては少し事情が異なっていた。上流域では、広島藩による津留統制（藩外交易の禁止措置）によって越境輸送が制限されたため、舟運は短距離を主体とするものが中心であったらしい。一方、中・下流域では東岸に石見銀山を中心とする天領が置かれると、流域には荷抜けや抜け売りを防ぐため川舟番所（口番所）が各地に設置された。積み荷のある舟は、番所で荷の内容に応じた運上金を支払い、通行する必要があった。記録によれば、江の川流域の口番所の運上金額は日本海沿岸のそれを大きく上回っており、江の川舟運の繁栄がうかがわれる。近世後半の江の川流域では鉧製鉄が盛んに行われており、操業に必要な砂鉄や木炭をはじめ、生産された鉄などの輸送はもっぱら舟運が担っていた。木炭は灰吹き法を用いる銀精錬においても必要不可欠であり、各地におかれた御立山由来の木炭の輸送も江の川に支えられていた。江の川河口に位置する郷津（江津）は、北前船の寄港地として栄え、同時に江の川を介した山間部への中継地でもあった。そのため郷田村（現江津町付近）は江の川西岸に位置しながら、永らく天領とされていた。中・上流域からは鉄や木炭のほか木材や和紙などの特産物が、沿岸部からは塩や米などが運ばれた。

明治時代の幕開けとともに津留統制が解かれると、舟運はさらに発展した。明治 20 年代には 800 隻を超える荷舟が稼働し、流域の船着き場は 50 ヶ所を数えたという。江津－三次間約 120km を「下り２日、上り５日」で結び、便数は月平均 50 ～ 70 往復に達した。大正時代にはプロペラ船も投入され、江津－粕淵間を１日２往復した。しかし大正 10 年代に入り、発電を目的とする鳴滝堰堤の建設によって航路が分断されたことで、舟運は急速に衰退をはじめる。この頃には沿線の道路網も徐々に整備され、物流の中心は陸上輸送へと転換していった。大正 15(1926) 年から始まった三江線（後に三江北線、現三江線）の建設工事は、昭和 5(1930) 年の石見江津－川戸間開業を皮切りに順次延伸し、昭和 12(1937) 年には当初計画の浜原までが全通した。こうして流域の物流を担ってきた江の川の舟運は、終焉を迎えることになった。

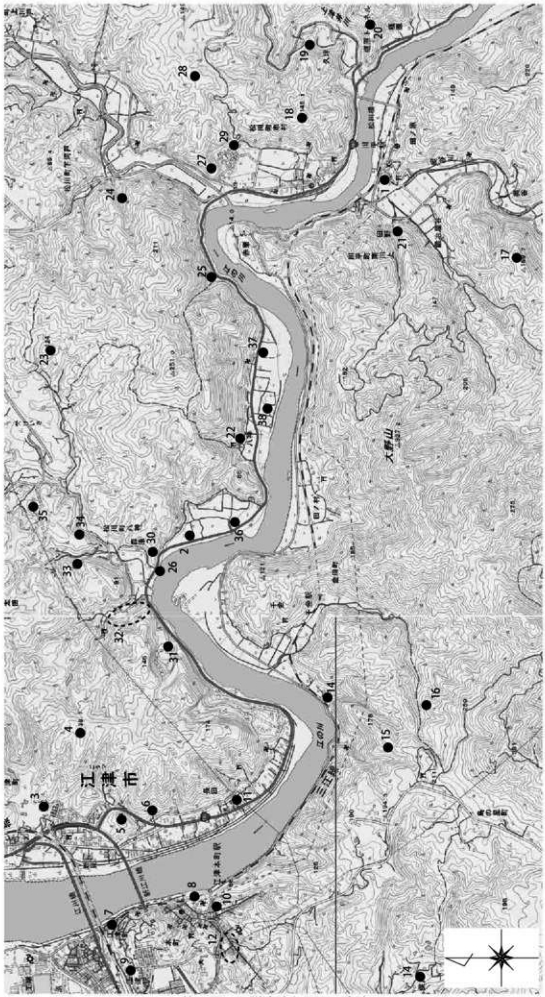
第２節　歴史的環境

旧石器・縄文時代

江の川下流域においては、旧石器時代の遺跡は現在のところ確認されていない。縄文時代の遺跡は海浜部に多く、後期に入ってから内陸部にもみられるようになる。主な縄文遺跡としては、尾浜遺跡、埋築遺跡が知られており、尾浜遺跡では縄文後期のクロスナ層からまとまった遺物が出土した。また埋築遺跡では、縄文晩期の突帯文土器が確認されている。

弥生時代

弥生時代の遺跡は、江の川以東では埋築遺跡と波来浜遺跡、江の川以西では古八幡付近遺跡などがあり、時期が下るにつれて遺跡数が増加し、一円に広がっていく。



第 3 図　田渕遺跡と周辺の遺跡 (S=1:2,500)

集落遺跡としては、埋築遺跡、高津遺跡が知られている。埋築遺跡では、前期の土器を伴う溝状遺構が調査された。また、包含層からは中期の土器も出土している。高津遺跡では、後期の住居跡が確認されている。

波来浜遺跡では、中期から後期にかけての貼り石をもつ墳丘墓が確認されている。特に中期の墳丘墓は、特徴的な貼り石の様子から四隅突出型墳丘墓の祖型ではないかという指摘もある。また後期の墳丘墓の中には、副葬品や規模などに差異が見られ、階層社会発生の様相を表しているという指摘されている。

古墳時代

古墳時代の集落遺跡としては、高津遺跡で古墳時代初頭から中期の住居跡が確認されている。また、後期の粘土採取坑と思われる土坑群が発見されており、人々が古墳時代を通じてこの周辺で生活していたことがうかがわれる。尾浜遺跡では、前期の土師器が数点表採されており、波来浜遺跡では、集落の全容は把握できないものの、土師器、須恵器、鉄斧などが出土している。

この地域では大型の古墳は知られていないが、古墳時代後期になると、高野山古墳群や佐古ヶ丘横穴墓群などが築かれる。これらの古墳群は、横穴式石室を持つ前者と、横穴墓からなる後者で異なった様相を見せており、江の川を挟んで西部は山陽地域、東部は出雲地域の影響を強く受けていたと考えられている。

古代

律令時代には、中央政府が地方支配を円滑に進めるための道路網の整備が求められ、全国で地方主要道が設定されていく。山陰地方にも山陰道が設けられ、さらに一定の距離ごとに駅馬を備えた駅家が置かれた。石見地方では波祢・託農・樟道・江東・江西・伊甘の６駅が設置されたという。

江津の古代山陰道の経路は、歴史地理学の推定作業によると、江の川以東は幅６～14mの道路痕跡が畿内の方向へは室神山（浅利富士）を正面に、石見国府方面へは大崎鼻を目がけてほぼ一直線につながるという。また、駅は６駅の内、江東・江西が設置されていたとされる。駅といえる遺跡は現状確認されていないが、江の川沿いの長田遺跡、東部の高津遺跡、波来浜遺跡は、推定されている古代山陰道の経路付近に位置しており、関係性が考えられている。長田遺跡では、奈良から平安時代にかけての土師器片・須恵器片が採集されている。また、高津遺跡では、「郡」へら描き須恵器坏が出土している。波来浜遺跡では、同時期の須恵器片が数百点出土しており、その他にも製塩土器、土錘や須恵器・石帯一組を伴った火葬墓が調査されている。

中世

中世前期の江の川流域の様相は、資料が乏しく不明な点が多い。しかし、江の川は、古くから水運が盛んであり、この頃には遠く三次界隈まで往来していたという。詳細は不明ながら、江の川下流域にも多くの船着き場が存在していたことは確実であり、山陰道、温泉津道や有福道などの街道とともに地域内交通の要として機能していたと考えられる。田淵遺跡は、松川を経て跡市へと続く街道筋に位置し、12～13世紀を中心とする柱穴列や小鍛冶炉が確認された。江の川対岸にあたる八神上ノ原遺跡でも、ほぼ同時期の建物跡や遺物が見つかっており、当時交通の要衝として栄

えていた一端がうかがえる。

中世後半、南北朝時代の動乱の際には、当時の地頭であった中原氏をはじめ石見の諸将の多くは南朝方に与しており、度々北朝方と争っていた。田渕遺跡周辺には、江の川対岸に松山城がある。松山城は、南北朝期に地頭として近江国から入部した中原氏（河上氏）により築城されたと伝えられており、建武３(1336) 年に北朝方の攻撃を受け、翌年４年にも城付近で戦闘が行われたとの記録が残る。また、江の川支流の上津井川を隔てて対岸に櫛城が位置している。櫛城は、中原氏ののちに地頭となった佐々木祐直の築城とされているが、那賀郡（江津西部）の領主である福屋氏とする説もある。

16 世紀半ばから 17 世紀には、金や銀が国内外の貿易において重要な位置を占めるようになる。日本列島各地では、鉱物資源の開発が競って進められ、数多くの鉱山や鉱山町が出現した。

石見においても、博多の豪商神屋寿貞が大永 6(1526) 年に石見銀山を再発見した。早期の灰吹法の導入などにより銀産出が本格的になると、人々の来往や物資の搬入が進み、鉱山一帯は都市的様相を示すようになる。その影響は鉱山近隣だけでなく、日本全体、はては世界中に石見銀山の銀が輸出されていった。松山城下の市村では、「石州中郡川上市」などの市場が存在したという。そのため、銀山は中国地方支配のための焦点となり、大内氏、毛利氏、尼子氏ら戦国大名に加え、石見地方の各領主たちの領地争いも交えた争奪戦となる。

永禄 4(1561) 年、福屋氏が同じく地方領主であった小笠原氏と所領に関する諍いから、毛利方を離反した。松山城は櫛城を支城とし、福屋氏の拠点として機能していたため、毛利氏と福屋氏の対立の激戦地となる。永禄 5(1562) 年、毛利氏の軍勢により櫛城とともに落城し、福屋氏は滅亡。のちに松山城は小笠原氏や、毛利氏の一族である吉川氏の領有となったという。

近世

慶長 5(1600) 年、徳川家康が石見国の７ヶ村に禁令を発布し、江戸時代に石見銀山を中心とした地域は、幕府直轄の領地となる。江の川西岸の村は、海陸交通の要衝であった郷田村以外は元和 5(1619) 年以降は浜田藩に属し、東岸は一部が西左岸と同じく浜田藩の領地になるが、替地により幕府領に復し石見銀山領として幕末まで継続した。

古くから江の川流域は中国山地での鉄の採集・水運による流通が盛んであったが、江戸前期から中期にかけて、鉄穴流しによる砂鉄採集が盛んになる。しかし、一方でその際に流出する大量の土砂は、しばしば流域の耕地を損なった。そこで、人工の水路を作って海岸まで流し、海岸の砂丘地帯を耕地化する動きがみられるようになる。また、全国各地の幕府領では、奉行や代官により盛んに新田開発が行われていた。森原神田川遺跡では、大規模な近世水田跡と畠跡が確認されている。時期的に各地の新田開発や、海岸部の耕地化に関連する可能性がある。

江戸時代後期になると、鉄穴流しによる砂鉄採集に合わせ、江の川流域やその支流近くの村で、桜谷鉧、価谷鉧等鉧製鉄の経営が盛んになる。製鉄業は地域に溶け込み、農閑期の副業として村の生活を支え、人口の増加につながった。恵口鉧は、浜田藩の御手鉧であった高丸鉧が、安永元 (1772) 年、「恵口御手鑪所」として移築されたものである。原料となる砂鉄は水運により運ばれ、また周辺の森林資源により薪炭の供給も豊富にあった。江戸後期に最盛期を迎え、明治まで経営が継続された。また窯業も盛んに行われるようになり、瓦窯と丸物窯を主体とする窯跡が各地に点在している。

引用・参考文献

梅木茂雄編 2002『埋築遺跡　都治地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書Ⅰ』江津市教育委員会

梅木茂雄編 2005『高津遺跡　都治地区県営ほ場整備事業に伴う発掘調査報告書Ⅱ』江津市教育委員会

梅木茂雄編 2012『波来浜遺跡　-保存・活用のための確認調査報告書-』江津市教育委員会

角田徳幸編 2008『中祖遺跡・ナメラ迫遺跡』島根県教育委員会

角田徳幸ほか 2005『価谷鉢跡発掘調査報告書』島根県古代文化センター調査研究報告書 26

角田徳幸 2011「たたら吹き製鉄の地域的展開」『山陰におけるたたら製鉄の比較研究』島根県古代文化センター

黒田明憲「江の川の舟運と川舟」広島県立歴史民俗資料館研究紀要第２集

江津市 1982『江津市誌　上巻』

国土交通省中国地方整備局 2016『江の川水系河川整備計画　国管理区間』

島根県 2014『江の川水系下流支川域河川整備計画』

島根県教育委員会 2002『増補改訂島根県遺跡地図Ⅱ（石見編）』

島根県教委育委員会 1997『石見の城館跡』

高屋茂雄編 2017『石見の山城　山城 50 選と明らかにされた城館の実像』ハーベスト出版

広島県立歴史民俗資料館編 1984・1985・1991『江の川の漁労』広島県立歴史民俗資料館

広島県立歴史民俗資料館・江の川水系漁労文化研究会編 1993・1997・2000『川に生きる』広島県立歴史民俗資料館

平凡社地方資料センター編 1995『日本歴史地名大系第 33 巻　島根県の地名』平凡社

三浦史峰ほか 2003「江津の鐘跡」『石見潟』第 22 号

宮本徳昭 1982『平成３年度埋蔵文化財調査報告書』江津市教育委員会

『江の川ものがたり』各号　山陰中央新報社

第３章　田渕遺跡の調査成果

第１節　田渕遺跡の概要

1. 発掘調査区の設定

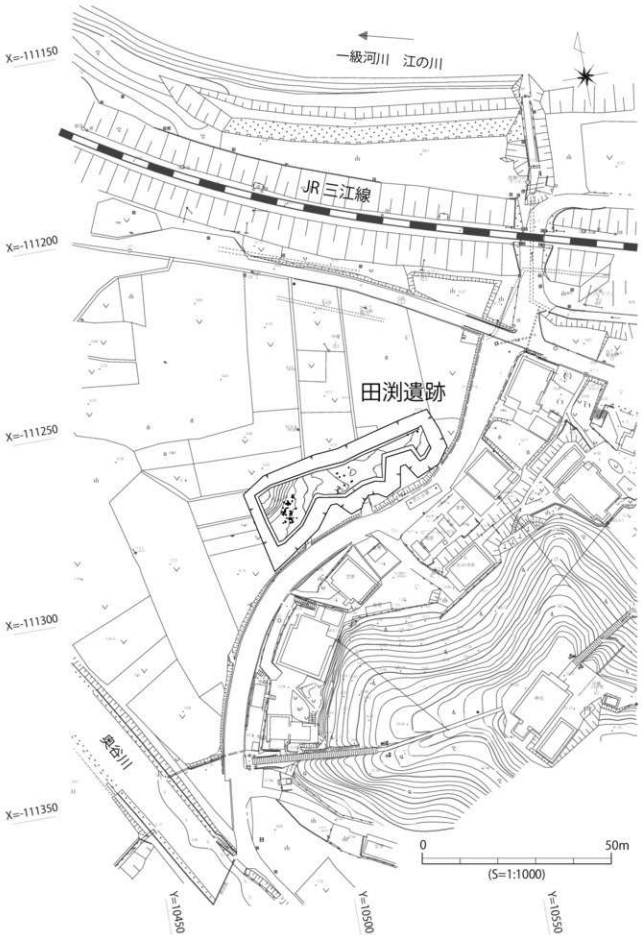
田渕遺跡は江津市川平町南川上に所在し、江の川本流とその支流である奥谷川に挟まれた丘陵上端部に位置する。東側には江の川に沿って JR 三江線の築堤が、緩くカーブしながら伸びている。標高は９～ 10m あるが、増水時の状況によっては冠水する場所である。発掘調査区は、平成 28 年度に実施した試掘調査結果をもとに、両河川へと続く段丘上の緩斜面に設定した。段丘上は畑地・果樹園として利用されており、近年設置された鳥獣害を防止するための電気柵が張り巡らされている。また調査区南側には丘陵が迫っており、丘陵裾は市道を挟んで一段高く造成され、宅地となっている。

2. 調査グリッドの設定

田渕遺跡の調査は、作業工程の都合から東区と西区に分けて個別に実施した。各調査区は南北幅が狭いわりに 3m を超える深さがあり、南側に隣接する市道や電柱等の機能を維持しながら調査を行う必要があったため、実際の調査面積はかなり小さくなることが想定された。そこで調査区北辺を基準とし、調査区北東端の任意の座標から 10m 間隔で東西に区画を設定し、南北方向は区分けを設定せずに調査を進めた。これらの区画には、東から順に 1,2,3…の地区名を割り振った。ところが、これらの区画は南北幅の広い西区の調査においては不便であったので、西区調査開始時にあわせ、急遽南北を区画する分割線を追加した。分割線は調査区北辺から南に 8m の位置に設定し、これを境に北側を A 区、南側を B 区と呼称した。

それぞれの区画は各交点の北東端をもってグリッド名称とし、遺構等に伴わない遺物は基本的にグリッド別に取り上げを行った。

第４図　田渕遺跡 グリッド配置図 (S=1:500)



第 5 図　田渕遺跡調査区位置図 (S=1:1,000)

第２節　田渕遺跡の調査

1. 調査方法

調査開始前、遺跡周辺は丘陵緩斜面を利用した畑地および果樹園であった。事前に果樹の一部を移植する作業が行われたため、調査開始時には地表面に数カ所の抜き取り穴が残された状態であった。発掘調査では、試掘確認調査の結果に基づき、まず重機を用いて表土及び耕作土を取り除いた。重機はバケットに平爪を装着し、表土面から少しずつ漉き取るようにして面的な掘り下げを行った。掘削中は、適宜土層観察を行いながら進め、遺物包含層まで若干余裕を持たせたところで重機掘削を停止した。

遺物包含層は、基本的にスコップや鍬、ツルハシ、ジョレンなどを用いて人力で掘り下げたが、遺物が集中する箇所については移植ゴテ・ガリ（草削り）により、注意を払いながら少しずつ掘削した。遺構検出は、ジョレン・大ガリなどによりある程度精査した後、ガリを用いて丁寧に削りながら実施した。遺構の埋土掘削には、移植ゴテ・ガリ、オタマ等を使用した。掘削の際には、層位確認用のベルトやサブトレンチを設定し、土層断面の観察を行いつつ掘り下げた。土層断面は写真撮影を行い、必要に応じて断面図を作成した。

出土遺物のうち出土状況の有意性が低いものは、グリッド名と層位の記録のみを行って取り上げた。遺構からの出土遺物は、出土状況を記録した後、必要に応じて取り上げ№を振って取り上げた。

遺構の平面図は、手測りと遺跡調査システムの測量を併用した。遺跡調査システムは、株式会社CUBIC 製の遺跡調査システム「遺構くん」を使用し、出力後適宜補正を行った。断面実測図は、オートレベルを用いて測量を行いながら手書きで作成した。高低差のある壁面については、平面図と同様に調査システムを補助的に用いて記録・図化を行った。

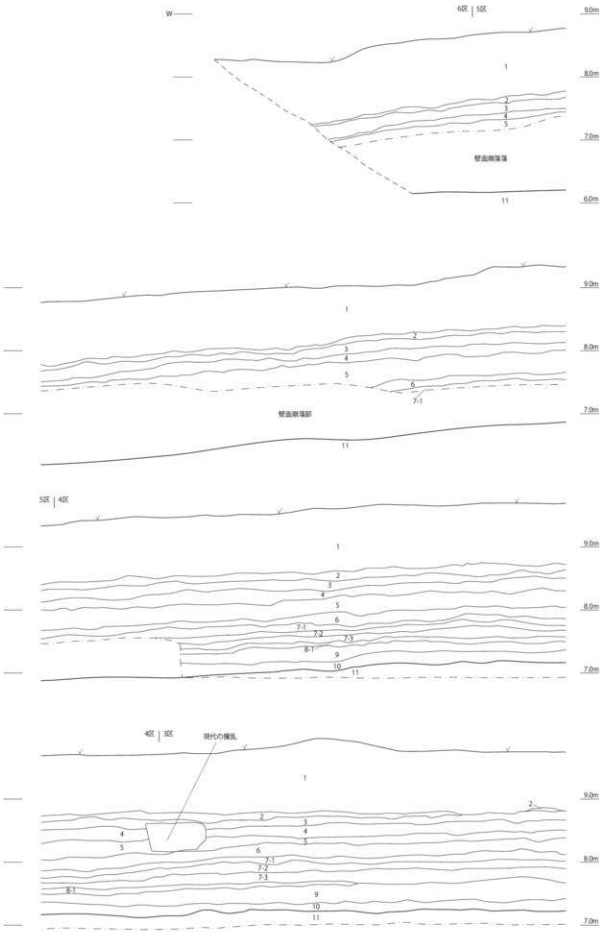
遺構等の写真は、原則として報告書に掲載が見込まれるものを６×７判フィルム（富士フイルム社製 PROVIA Ⅲ 100〈カラーポジ〉・ACROS100〈モノクロネガ〉）による撮影を行い、それ以外はデジタル一眼レフカメラ (Nikon　D800) を用いて RAW 及び jpeg データ（圧縮率低）を合わせて撮影した。これらの記録は、島根県埋蔵文化財調査センターで保管している。

2. 基本層序

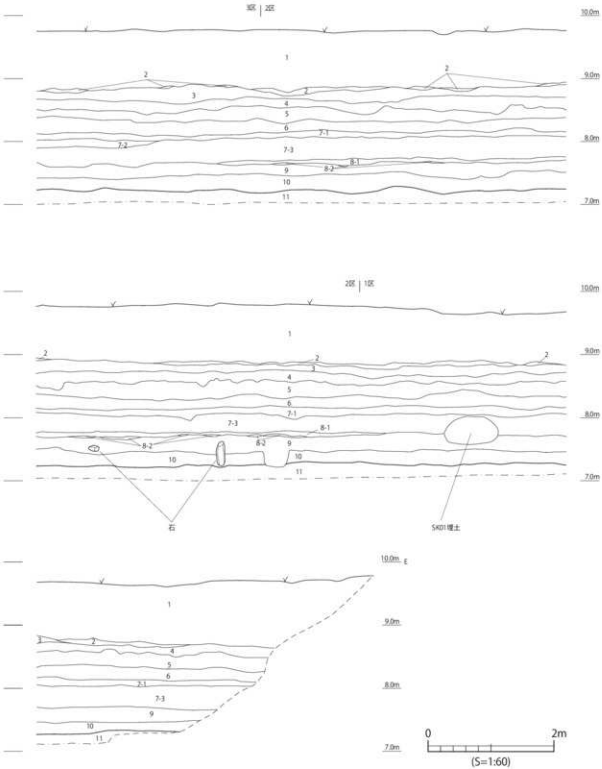
第 6･7 図は、調査区北壁のセクション図である。調査区は西向きの緩傾斜地となっており、調査区西端でやや角度を増しながら落ち込む。地表下の土層も基本的に同様の傾向を示している。

地表（標高約 8.5 ～ 9.7m）の下には、ごく薄い表土を挟んで耕作土（1 ～ 5 層）が厚く堆積している。これらは一度に堆積したものではなく、耕作と洪水堆積を繰り返す中で形成されたものと考えられる。（第 4 章第 2 節参照）調査区内には、厚さがごく薄い淡黄色の砂層を挟む場所があり、江の川や奥谷川の増水に伴って度々冠水していたことが推測される。これらの土には近世から現代にかけての陶磁器片や金属製品等を僅かに含んでいた。

第 7 ～ 10 層が中世遺物を主体とする包含層である。第 7-3 層直下には第 1 遺構面、第 8･9 層直下に第 2 遺構面、第 10 層の中程に第 3 遺構面を挟み、第 10 層直下に第 4 遺構面が存在する。計 4 面の遺構面を含んでおり、出土遺物から見て 12 ～ 13 世紀初頭ころを中心とする中世後半の所産と考えられる。ただし、時期的に最も下る第 7 層と第 1 遺構面については、少ないとはいえ



第 6 図　北壁土層図 1(S=1:60)



1　表土・耕作土（度重なる洪水・耕作の繰り返しにより分層できない）
2　黄色砂質土（1・3層間に部分的に挟まる砂層で、調査区南はほとんど見られない）
3　暗灰色土（やや黒い小遺物を何も含まない砂質土）
4　暗灰色土2（最も黒い小遺物を何も含まない砂質土）
5　褐色土（5mm～2cm程度の赤褐色小礫、砂粒を多く含む）
6　黒褐色粘質土（近世の遺物をわずかに含む）
7-1　淡褐色砂質土1（洪水由来の締まりのない砂層）
-2　淡褐色砂質土2（中世包含層で直上層と大きな違いはない）
-3　淡褐色粘質土（中世包含層で洪水由来の砂粒を多く含む）
8-1　淡黄色砂質土1（洪水由来の砂層）
8-2　淡黄色砂質土2（比較的粒子の粗い、洪水由来の砂層）
9　淡黒褐色土（炭粒を少し含む）
10　黒色粘質土（炭粒と土器を含む）
11　明褐色土（炭粒と土器をわずかに含む）

第７図　北壁土層図 2(S=1:60)

17 世紀前葉の肥前系灰釉陶器片などが出土しており、遺構も限られることから、近世における耕作や洪水などによって、少なからず撹乱を受けている可能性がある。第７層より下層（第２遺構面以下）では 14 世紀以降の陶磁器を全く含まないため、４枚の遺構面のうち少なくとも第２遺構面以下については、下限を 13 世紀代として大過ないと考えられる。個々の遺構面には多少なりとも時期差があるようだが、遺構面の時期をピンポイントに把握することは難しい。

第 10 層は、東区の調査に際し一括して調査を行ったが、後の西区調査中になって明らかに土質や含有物の異なる粘土層を１枚挟むことが確認された。この粘土層は細片化した土師質土器片や木炭粒と、黄色・橙色・褐色等の粘土粒をマーブル状に含み、自然堆積でないことが明らかであった。この層の上面には、小鍛冶炉３基をはじめとする遺構群が掘り込まれており、作業面（第３遺構面）を整えるための造成土と考えられた。造成土は小鍛冶炉周辺の限られた部分にのみ残存し、西区北半では急激にレベルを下げていくが、それに伴い希薄になる。調査区北壁セクションでは数 cm 程度の厚さでしか認識できなかったが、調査中に大規模な法面崩落を起こし、急遽土留め柵を設置した為にセクション図に記録できなかった。

第 11 層以下は貧酸素状態にある層で、酸化により急激に褐色化する。基本的には遺物を含まないが、西区北西端近くでは急激に標高を下げる第 10 層との境界が曖昧となり、土器の細片が僅かに混じった。これらは第 10 層の所産である可能性が高いといえる。

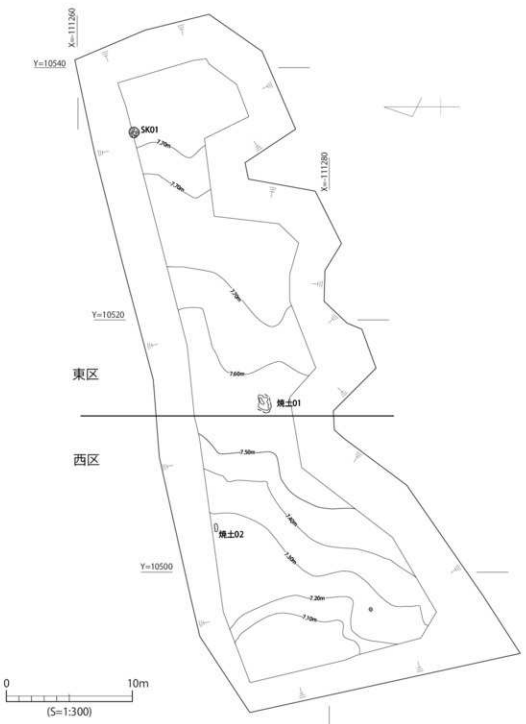
調査の必要な層位を把握するため、調査区の東西端で重機による深掘りをそれぞれ行ったが、第 11 層以下の堆積土は約 1.5m にわたって分層できず、無遺物層が続いたので調査対象としなかった。

3. 第７層及び第１遺構面の調査

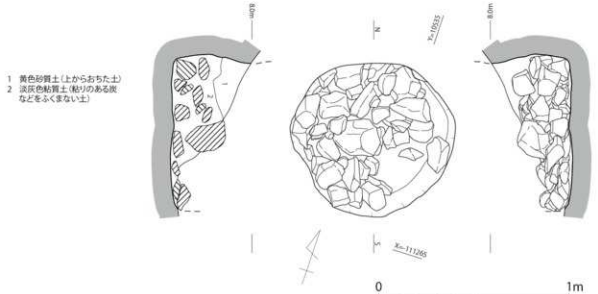
第７層及び第１遺構面では、中世以降の遺物と遺構が出土した。遺物・遺構とも少なく、第１遺構面上にも小規模な焼土面が把握できたに過ぎない。第１遺構面は北西向きのごく緩やかな斜面であるが、調査区西端では大きく落ち込んでいく様子が観察された。

第１遺構面の遺構（第８図）

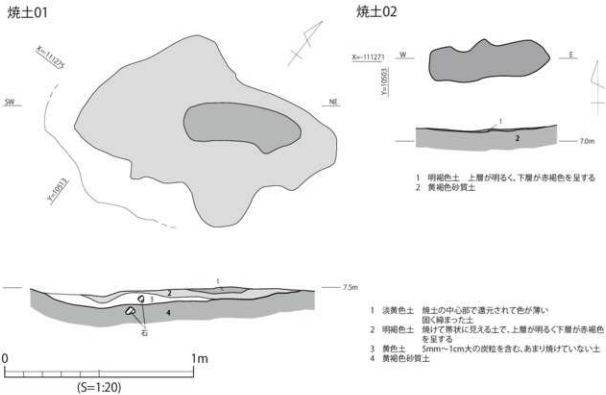
第７層直下の、当遺跡では最も新しい時期の遺構面である。第７層は大きく 7-1 層と 7-3 層に分層でき、調査時も二度に分けて掘削したが、両者の間に明確な遺構面を把握することはできなかっ



第８図　第１遺構面遺構配置図 (S=1:300)



第 9 図　SK01 実測図 (S=1:20)



第 10 図　焼土 01･02 実測図 (S=1:20)

た。とはいえ、局所的にしか把握できなかったものの、浸水に伴う黄白色の薄い砂層を挟んでいることは明らかであり、多少とも時期差があることは想定できよう。

・SK01(第 9 図)

SK01 は東区北辺の調査区壁際で検出した土坑である。上半部の一部は耕作土層に突き抜けており、第 1 遺構面に直接堀り込まれたものではない。中世後半以降、おそらく近世の所産と考えられるが、共伴遺物が皆無であり、時期は特定できない。

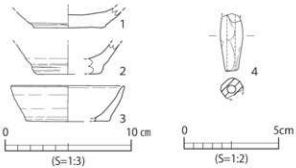
土坑の規模は南北約 84cm、東西約 82cm で、土坑側面はほぼ垂直に掘削されており、底面もほぼ水平である。土坑内には 10 ～ 30cm 大の礫が 50 個程度、雑然と残されている。石材は全て凝灰岩系の角礫である。管見に触れる限りでは、個々の礫に明確な加工痕跡は見えなかった。礫群には裏込め土がなく、意図的に並べたり、積み上げられた様子はうかがうことができない。土坑底面から約 25 ～ 30cm までは、混じりけのない粘質土に埋まっており、その上は耕作土と洪水砂が混じったような砂質土に変わる。SK01 の性格は不明だが、現状の地下水脈はさらに 50cm 近く下に位置しており、井戸として機能させるのは難しい。また、礫を意図的に入れ込んでいるのかも定かでない。したがって、厠の埋め桶跡、肥溜、ゴミ穴などの用途も視野に入れるべきであろう。

・焼土 01(第 10 図)

焼土 01 は第 7-3 層直下に検出した小規模な被熱痕跡である。南北約 25cm、東西約 60cm の長楕円形の、淡黄色に還元された焼土面があり、表面は明らかに硬化している。その外郭に明褐色に変色した土がレンズ状に広がっている。明褐色土は火からの距離、温度により遷移的に変色し、最も遠い位置では赤褐色を呈する。1cm 大までの炭粒が明褐色土のさらに外側まで拡散しているが、全体に濃度は希薄である。焼土 01 には土師質土器の細片を僅かに含んでいたが、図化できるものはなかった。

・焼土 02(第 10 図)

焼土 02 は西区北辺の調査区壁際で検出された。ごく小規模な被熱痕跡である。調査区外周に巡らした排水溝の掘削中に検出したため、上層が多少飛んでいる可能性もあるが、いずれにせよ規模の小さいものである。焼土面は南北約 25cm、東西約 60cm で、焼土 01 とほぼ同規模である。焼土面は薄く、硬化も進んでいない。出土遺物は皆無である。

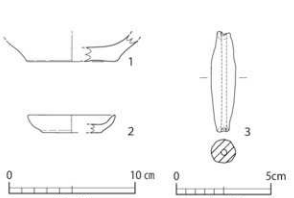


第 11 図　7-1 層出土遺物 (S=1:3,1:2)

第 7 層出土遺物 (第 11･12 図)

第 7 層は 7-1 層と 7-3 層に分けて掘削したため、包含層遺物も両者に分かれている。出土量が少ないため、図化できるものはわずかであるが、土師質土器と土錘が出土している。

11-1 ～ 3 は土師質土器の坏もしくは皿である。いずれも回転糸切りの底部を持つが、1･2 はやや厚底気味なのが目立つ。底部から器壁にかけての外面造作も

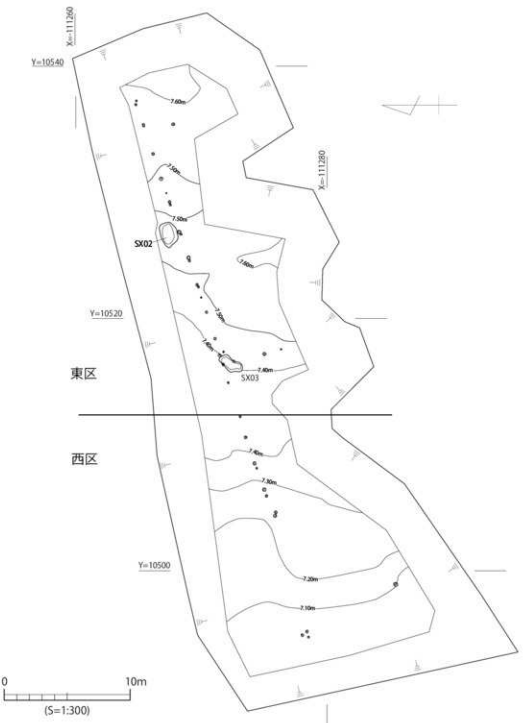


第 12 図　7-3 層出土遺物 (S=1:3,1:2)

簡略化されており、ナデ整形が甘い。3 は器壁が厚手で、直線的に立ち上がる皿である。口縁端部にはアクセントが付かず、軽く細めただけのシンプルな造作である。当遺跡では類似例がなく、皿の中でも後出するタイプの可能性がある。

12-1・2 は 7-3 層出土の土師質土器である。1 は厚底気味である点や、底部から器壁にかけての造作が甘い点で 7-1 層出土品と類似している。2 は小型の皿で、底部側縁を軽くつまみ上げただけの簡易な造作である。7 層では小型皿がほとんど含まれておらず、唯一の存在である。

これらの土師質土器の色調は、全て橙色系で構成され、白色系を含まない点が特徴である。



第 13 図　第 2 遺構面遺構配置図 (S=1:300)

4. 第 8･9 層および第 2 遺構面の調査

第 8・9 層及び第 2 遺構面では、中世の遺物・遺構が確認された。第 8 層は調査区西側に薄く広がる洪水由来の砂層であり、遺物の大部分は第 9 層から出土している。遺物量は少なく、特に第 2 遺構面に伴うものはほとんどない。また、出土遺物の大部分が土師質土器であり、陶磁器類は数点のみである。

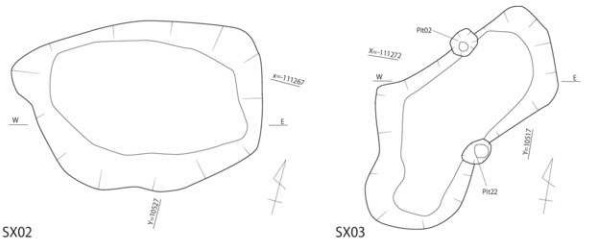
第 2 遺構面の遺構 (第 13 図)

第 2 遺構面は、傾きの変化が少ない西向きの緩斜面で、調査区をほぼ東西に横断するピット列と、これに直行するように南側に並ぶピット列、比較的濃密な炭層を持つ炭溜まり (SX02・03) で構成される。

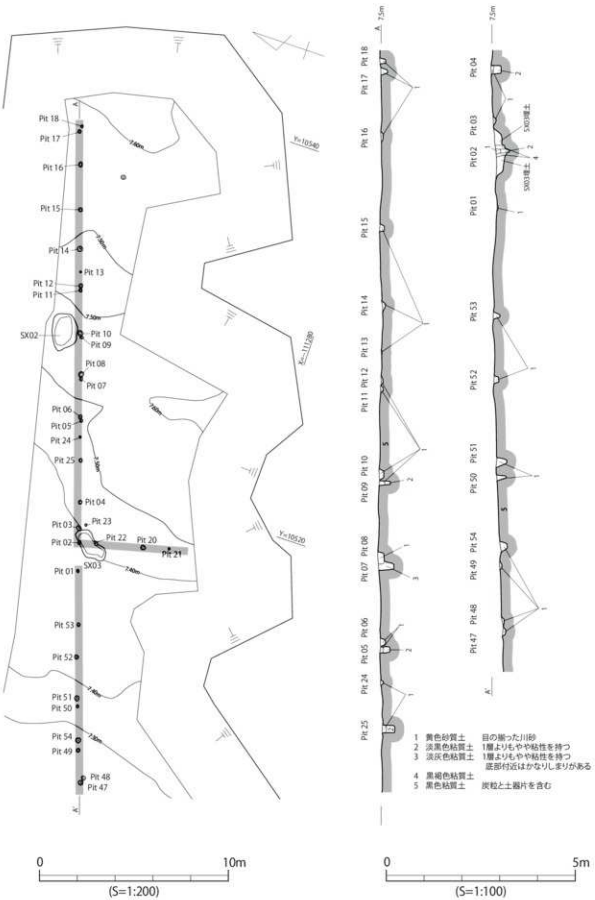
・SX02(第 14 図)

東区北側の 2 区で検出した炭溜まりである。炭を多く含む粘性の高い土が、南北 2.1m、東西 1.4m にわたり広がっており、厚さは最大 25cm に達する。明確な焼土面は存在せず、この場所で火を焚いたようには見えない。範囲を明確にすることはできないが、炭層から拡散したと考えられる炭粒が外周に点々と散在している。明確な堀方がないため、土坑というよりは炭の集中部と捉えるべきかもしれない。

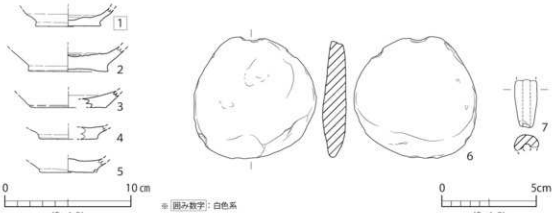
炭層 (1 層) からは小型の皿 (灯明皿か) が数点出土しており、この遺構の機能や生成要因を推察する上で注目される。積極的に評価するならば、小規模な祭祀跡の可能性がある。また同遺構面の直近には後述するピット列が存在し、両者の関係も考慮すべきであろう。直接の切り合い関係がないとはいえ、炭粒はピット列を超えて南側にも拡散しており、SX02 が先行する可能性が高いと考えられる。



第 14 図　SX02･SX03 実測図 (S=1:30)



第 15 図　ピット群出土状況図 (S=1:200,1:100)



第 16 図　第 9 層出土遺物 (S=1:3,1:2)

・SX03(第 14 図)

東区西端の３区で検出した炭溜まりである。南北約 1.9m、東西約 1.2m にわたり広がる炭層で、最大厚は約 15cm である。SX02 と同じく堀方は明確でなく、炭の一部は周辺に拡散している。出土遺物はほとんどなく、土師質土器の砕片が数点あるのみである。

SX03 は、後述するピット列 (Pit02 および Pit22) に切られており、これらに先行する。この事は、内容が類似する SX02 についても、ピット群に先行する可能性が高いことを示している。

・ピット群 (第 15 図)

調査区を約 35m にわたり東西に横断するピット列である。ピット列の方向は N71.7° E である。柱間は約 2.2 ～ 2.3m を基本としているが、Pit13 や Pit24 のようにさらに二分する位置にも小型のピットが並ぶ場合がある。南北に対になるようなピットは存在せず、塀や柵などの構造物であったと考えられる。各ピットの埋土は川砂であり、江の川の氾濫に伴って埋没した可能性が高い。

東区に並ぶピット群には、隣接してもう一つのピットを伴う場合が多い。両者を比較すると、西側のピットがより深く、径が小さい傾向があり、Pit05・06 や Pit07・08 の切り合い関係から、西側のピットが先行することが分かる。同じような構造物を建て替えたと考えざるを得ない。また、東から…Pit06、Pit25、Pit04 と等間隔で並んできたピット列は、その西の間隔が乱れている。一方で、Pit01、Pit53、Pit52…とさらに西へ等間隔で続くピット列も存在するため、間に挟まれた Pit01・Pit03 の間隔だけが狭い。Pit02 の南には、これに直交するように Pit22、Pit20、Pit21 と並ぶピット列があり、おそらくはこの位置で構造物や区画が南に回り込んだり、仕切られていたのだろう。

第 9 層出土遺物 (第 16 図)

16-1 ～ 5 は土師器坏もしくは皿の底部である。上下の包含層出土品との明確な差異は認められないが、より下層の遺物に比べやや粗雑な感がある。ここでは 1 のみが白色系だが、9 層出土土師質土器全体では白色系は 1 割以下にすぎない。口径の復元できる個体がなく、サイズの特徴は把握できない。6 は縁辺数カ所に欠けを持つ川原石である。石錘の一種と考えたが、人為的な加工でない可能性も残る。遺跡周辺ではあまり見かけない濃緑色の岩石で、側面を見るとわずかに片理があるようにも見え、変成岩の一種と考えられる。7 は一端を欠く土錘である。

5. 第 10 層 (上層) および第 3 遺構面の調査

第 10 層は遺跡内でも最も多くの土器を含む包含層で、同時に多量の炭粒を含んでいる粘質土である。調査中は、これらの包含層遺物を取り上げながら掘削し、上面から約 20cm の位置で土器溜まり (土器溜まり 1・2) を検出した。そのため、東区調査の時点では、第 10 層直下に「(仮称) 第 3 遺構面」を設定し、掘削と遺物の取り上げを行っていた。

ところが続いて実施した西区調査中、西区南半部で第 10 層とは明らかに異なる造成土と、これに掘り込まれた小鍛冶炉等の遺構が検出され、第 10 層の中程に別の遺構面が存在することが明らかとなった。造成土は小鍛冶炉周辺の限られた部分にのみ残存し、西区北半では遺構面のレベルが下がるにしたがって希薄になっていく。こうした状況は、洪水等による二次的な流出の結果と考えられる。造成土を面的に把握できた部分は限られたが、これを第 17 図に示した。以下、この造成土上面を「第 3 遺構面」と呼称する。(これに伴い、東区調査時に確認した「(仮称) 第 3 遺構面」は第 4 遺構面と呼称する。) また、第 10 層は同遺構面を挟んで時期の異なる 2 層 (以下、上層・下層と呼称) に分かれることが明らかであるが、東区においては遺構面を把握できておらず、西区においても造成土の残存しない場所では 2 層を区別することができなかったため、出土遺物は一括して取り上げを行っている。遺物の出土層位について出土状況から明確に区別し得たものは、第 10 層上層・下層と記載する。

第 3 遺構面の遺構 (第 17 図)

第 3 遺構面には小鍛冶炉と、それに付随する構造物と考えられるピット群が出土している。3 基の小鍛冶炉は、それぞれ約 6.8m、2.4 m離れて並んでいる。同時期に操業された蓋然性は高いが、断定しうる根拠を得ることはできなかった。また炉の操業に際し、鞴や金床などがおかれた作業スペースが存在したと考えられるが、それらの配置や内容を明確にすることはできなかった。

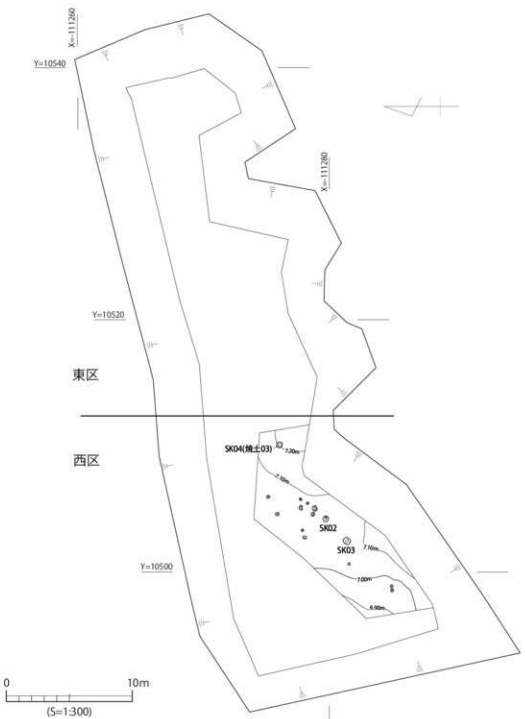
・SK02(第 18 図)

SK02 は径約 45 ～ 48cm、残存深約 10cm の碗状の土坑である。埋土には多量の炭化材を含み、特に 1 層上部は 5cm 大の破片も含む。1 層下部は細粉化した木炭が占める。1 層中には発泡した鉄滓の小片や羽口等の破片と思われる焼けた粘土をブロック状に含んでいる。土坑表面には 1 ～ 2cm の厚さで淡白色の粘土が貼り込まれている。南東側に羽口の先端部が残されているが、上半部は炉の上面と同じレベルで切られている。したがって、炉の上部や作業面は削平を受けている可能性が高く、全体規模や詳細構造は把握できない。小鍛冶炉はさほど深さを必要とせず、上部構造は石を並べた程度の簡素なもの、もしくは全くない場合もある。埋土から出土した粘土塊には、羽口片とは言いがたいものがあり、背の低い風よけのような構造物や、羽口を固定する造作物などが存在した可能性もある。羽口は北西向きに据えられており、吹き込まれた空気が当たる土坑表面部分には明確な被熱痕跡が残る。この痕跡を見る限り、羽口は一本のみだった可能性が高い。埋土を持ち帰りふるいにかけたところ、粒状滓計 0.7g、鍛造剥片計 7.8g が回収された。

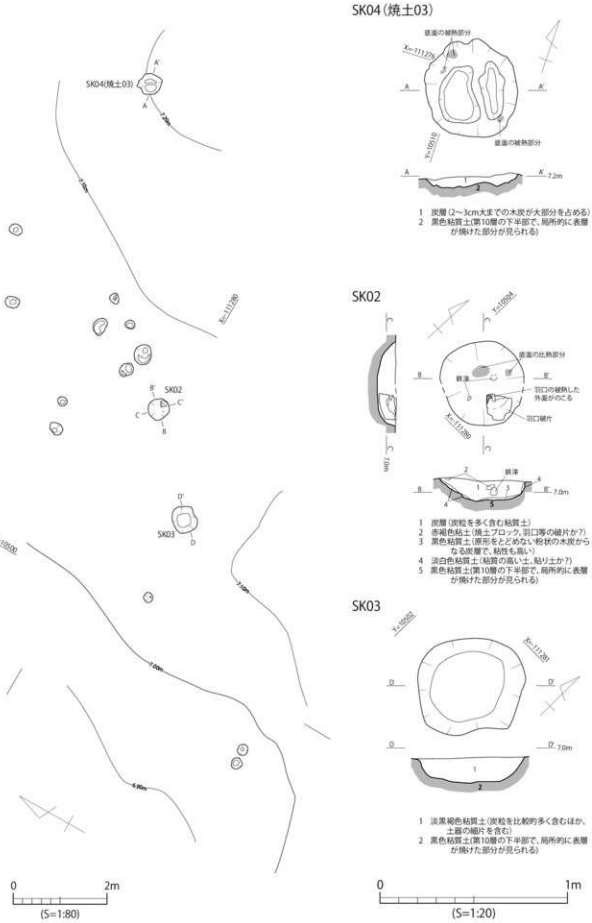
SK02 が鍛冶炉として操業していた際、作業場の様子はどのようなものだったのだろうか。小池伸彦氏によれば、中世から近世の鍛冶屋や工房を描いた絵巻物では、職人から見て左から鞴、炉、金床、水桶の順で並ぶものが多く、鍛冶職人は基本的には右利きだったと考えられている。平城京

跡で確認された鍛冶作業場の復元からも、左手に鉄素材、右手に槌を持った様子が推定できるという。SK02 では羽口が北西向きに設置されており、その隣に箱式鞴が置かれていたと考えると、職人は炉の北東側に座り、左手 (足を使う場合もあったらしい) で鞴を操作していたことが想定できる。炉の北～北西側には金床が置かれ、その側には水桶も置かれていたはずである。

また、鍛冶炉が屋外に単独で存在した可能性は低く、何らかの上屋を伴ったと考えられる。SK02 の周囲には幾つかのピットが確認されたが、具体的な形態を復元することは難しい。



第 17 図　第３遺構面遺構配置図 (S=1:300)

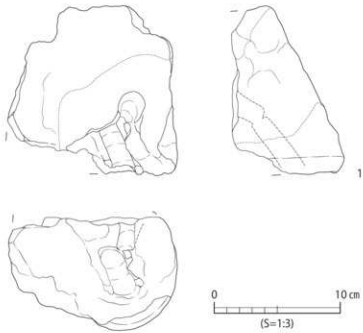


第 18 図　SK02,SK04(焼土 03),SK03 実測図 (全体図 S=1:80，各遺構図 S=1:20)

・SK02 出土遺物 (第 19 図)

19-1 は羽口の先端部である。先端側はテーパーを付けた筒状に加工しており、孔の内面には制作時に径を絞り込んだ痕跡が残っている。端部は丸めてある。先端部は高熱を受け、粘土が発泡したりガラス化している。小鍛冶炉に斜めに差し込まれた状態で残置されたため、上半部はカットされ、残っていない。

また、先端を除く周囲には、被熱して赤褐色化した粘土がこびり付いており、かなりの部分が同化している。羽口を固定するような造作が行われた痕跡かもしれない。



第 19 図　SK02 層出土遺物 (S=1:3)

・SK03(第 18 図)

SK03 は SK02 の西側で検出した土坑である。SK02 から約 2.4m と至近に存在し、形態的にも類似することから、小鍛冶炉と判断した。しかし、比較すると径約 60cm、深さ約 14cm と一回り大きく、埋土にもさほど木炭を含まないなどの相違点がある。また、鉄滓や羽口片は全く出土しなかった。

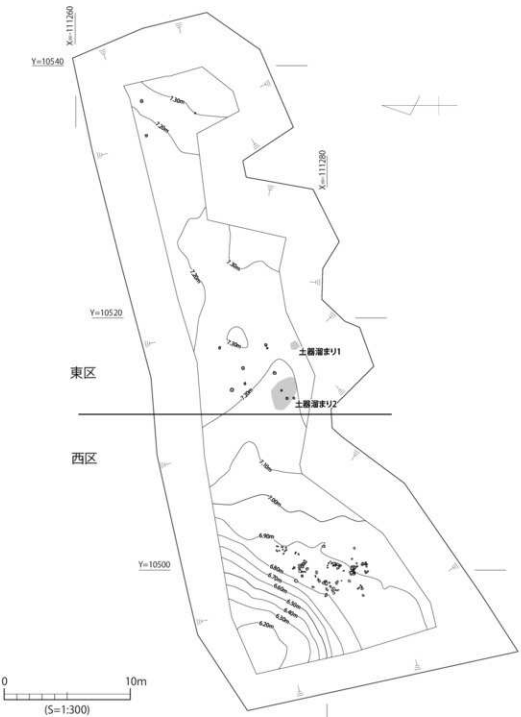
土坑表面には、部分的に被熱痕跡が見られるが、その輪郭は明確でなく、さほど焼けていない。内部が高温になったことは間違いないが、あるいは小鍛冶炉操業に伴い使用された、別用途の施設であった可能性もあるだろう。

・SK04(焼土 03)(第 18 図)

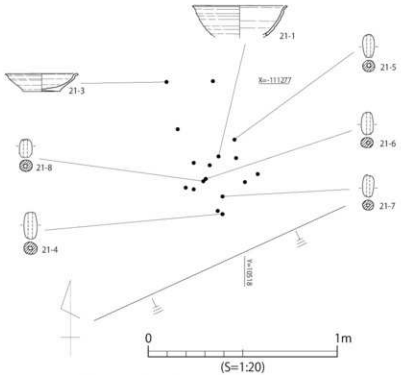
SK04 は SK02・03 からやや離れた位置で検出された土坑である。第 4 遺構面の土器溜まり 2 とは僅か 3m しか離れておらず、同遺構に土師質土器が一括廃棄された後、僅か 5cm 程かさ上げされた後構築されている。最大厚が 10cm 程しかなく、他の遺構に比べかなり浅い。上部が飛んでいる可能性が高いが、平面規模はほとんど同じである。土坑の底部は中央の尾根状の高まりを挟んで二分されており、西側の区画が若干大きい。埋土はほぼ木炭のみで構成されるが、原木の形状を残すものはほとんどなく、大部分が粉化している。底部表面には北西隅と南東隅に被熱痕跡が残っており、180 度対向に配置された二本の羽口が用いられていた可能性もある。それぞれの位置で使用された時期が異なることも想定できるが、そうであれば何らかの理由により、職人の着座位置が当初位置から炉を挟んだ対面に変更されたことになる。

6. 第 10 層および第 4 遺構面の調査

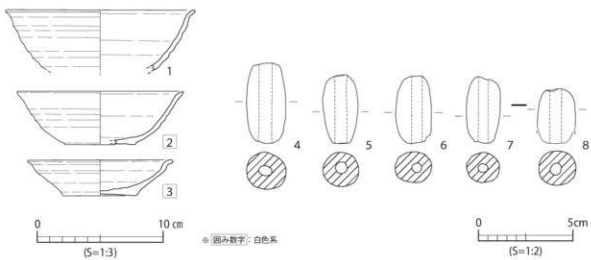
第 10 層および第 4 遺構面では、中世の遺物・遺構が確認された。すでに述べてきたように、第 10 層は第 3 遺構面を挟んで上層・下層に分かれるが、東区の調査中はこれを把握していなかった。また西区についても、出土遺物の多くは残念ながら層位を区別できない。第 10 層・第 4 遺構面の出土遺物は、遺跡内でも最も多く、土器溜まりに伴う土師質土器一括廃棄資料をはじめ、陶磁器類では白磁・青磁、中世須恵器類がある。また、小鍛冶炉に伴うと考えられる鉄滓や鉄塊も第 10 層上層を中心に出土している。鉄滓の中には製鉄・精錬の所産と考えられるものも含まれ、調査区内には見えないものの、近隣に製鉄・精錬施設が存在した可能性が指摘できる。



第 20 図　第 4 遺構面遺構配置図 (S=1:300)



第 22 図　土器溜まり 1 出土状況図 (S=1:20)



第 21 図　土器溜まり 1 出土遺物 (S=1:3,1:2)

第 4 遺構面の遺構 (第 20 図)

第 4 遺構面からは、土師質土器が一括廃棄された土器溜まり 2 カ所が検出された。土師質土器群には、いわゆる白色系と橙色系の坏・皿類が含まれ、土師質土器の分類、編年の上でも有用な一括資料といえる。また、数カ所のピットを把握することができたが、上屋を復元できるものではなかった。ただし、土器溜まり 2 の直下からもピットが検出されている点は注意を要する。

これらのほかに、6A･6B 区の標高 6.8 ～ 6.9m 付近に多くの礫が確認された。大部分が角礫であり、水流によるローリングや人為的な加工は認められなかった。礫は斜面の傾斜が急激に大きくなる境目付近に集中しており、南側の丘陵上から二次的に流れ込んできたものと判断した。元来、石垣等の何らかの構造物に使用されていたものかもしれないが、現状では判然としない。

・土器溜まり 1(第 21 図・第 22 図)

３区南端で検出された遺物群で、1.5m 四方程度の範囲から , かわらけ３個体以上と土錘５点がまとまって出土した。出土レベルもほぼ同一である。数 m 離れた位置には、形態的に類似する土師質土器群で構成される土器溜まり２が存在し、時期的にも近似すると考えられる。

土錘は比較的規格が揃っており、網に装着された状態であった可能性もある。

これらを用いた行為の具体的な様相は把握しがたいが、江の川沿岸という立地条件を考慮すれば、豊漁祈願や水難除けなどの祭祀跡の可能性もある。

・土器溜まり 1 出土遺物 (第 22 図)

22-1 ～ -3 は回転糸切りの底部を持つ坏および皿である。いずれも薄造りで、外面に凹凸の明瞭なナデ痕を持つのが特徴である。口縁端部はわずかに外反するアクセントが付けられている。-3 は明らかに嵩が低く、口縁端部の屈曲を大きくしており、むしろ皿と言うべきであろうか。注目されるのは、-1 のような須恵質の個体が存在することで、かわらけと形状や製作技法に特段の違いはない。当遺跡においてはこの個体のみの存在であり、あるいは意図せずに還元焼成されてしまったものかもしれない。

22-4 ～ -8 は土錘である。当遺跡出土の土錘は , 太さや長さにかなりばらつきが見られるが、土器溜まり１の土錘はいずれも径 2cm 程度に揃っており、セットで製作・使用されたと考えられる。

・土器溜まり 2(第 23･24 図)

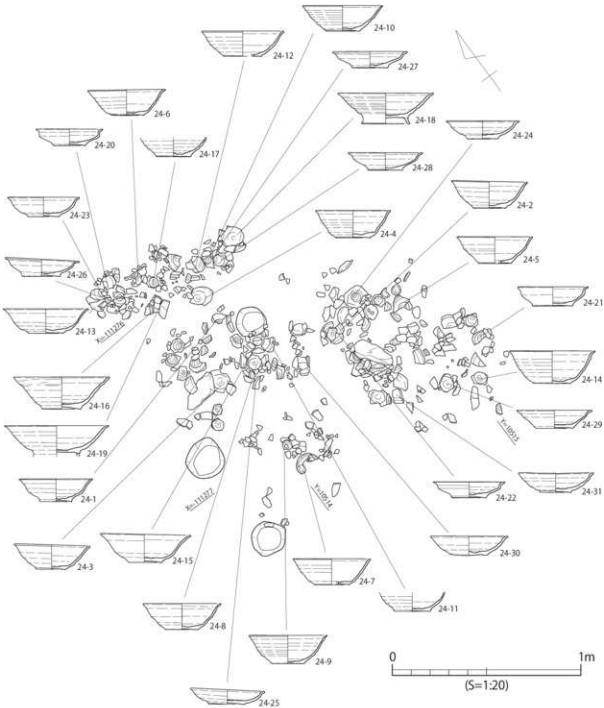
東区角にあたる３区南端で検出した、一括廃棄土師質土器群である。土師質土器のみで構成され、陶磁器は全く含んでいない。調査区縁辺付近から検出されたため、南壁法面を部分的に掘削して全体像の把握に努めたところ、南北約 2.0m、東西約 1.8m にわたり土器が集積していることが判明した。これらの土師質土器は、径がほぼ同じ坏と皿のみで構成され、小型の皿や他の器種を含まない。坏と皿の割合は 6：4 程度である。底部破片数は 102 点あり、推計個体数 65 点あまりの土器溜まりと考えられる。色調はほとんどが白色系である。浅黄橙や淡黄に見える破片は判断が難しいが、形状復元できる個体でこうした発色をするものはいずれも焼きが甘かったり、焼きムラのあるものばかりで、基本的には白色系の範疇に収まるだろう。

土師質土器の多くは伏せた状態で潰れており、複数が重なった状態のものも見られた。また、出土状況図からも分かるように、器種毎に数個体がまとまっている様子も見られた。こうした状況から、これらの土師質土器は数点毎に積み重ねられた状態でまとめて投棄されたものと考えられる。また、土器溜まり直下から小規模ながらピットが３カ所検出された。埋土は混じりのない川砂で、土器等も混じらないことから、土師質土器の廃棄時期に多少とも先行すると考えられる。

・土器溜まり 2 出土遺物 (第 24 図)

土器溜まり２からは土師質土器の坏と皿のみが出土した。厳密に見れば形態や調整に差異が認められるが、基本的には斉一性の高い一群と言える。

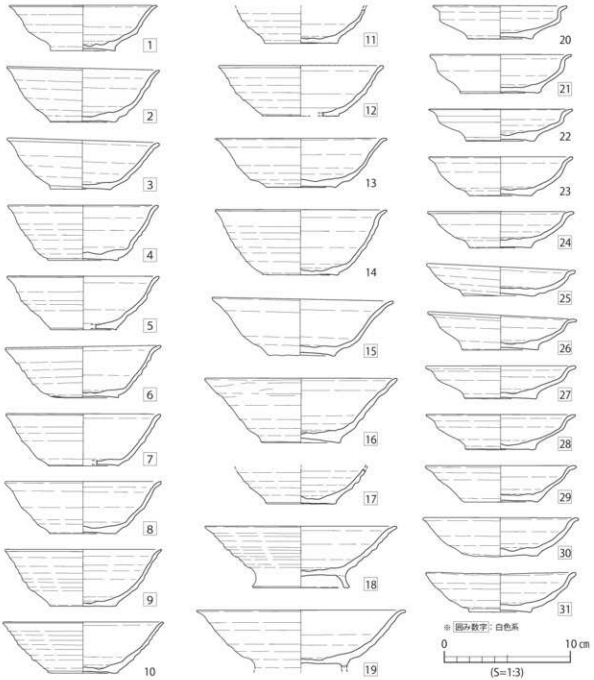
24-1 ～ 19 は坏を並べた。いずれも回転糸切りの底部を持つ。器壁が緩く内湾しながら立ち上がり、口縁部は軽く外反させてアクセントを付ける。16･18 は器壁が直線的に立ち上がり、図化



第 23 図　土器溜まり 2 出土状況図 (S=1:20)

すると違和感があるが、実際に他と並べるとさほど違いはない。復元口径 12 ～ 13cm 程度の個体が明らかに多いが、15cm を超えるものも見られる。器高は 4cm 台に収まる。また、内面の調整は見込みまで比較的丁寧にナデられているのに対し、外面のナデは個体差があり、明らかに意図的に凹凸を残している個体がある。18･19 は高台が付くが、こうした個体は少ない。

24-20 ～ 31 は皿である。坏と厳密に区別することは難しいが、ここでは器壁を横方向に広げてから立ち上げ、口縁端部を外側に屈曲させるものを皿とする。器高が総じて低く、断面形が鈎形になるのが特徴である。口径は坏とほぼ同じか、若干小さい傾向にある。調整は内外面とも比較的丁



第 24 図　土器溜まり 2 出土遺物 (S=1:3)

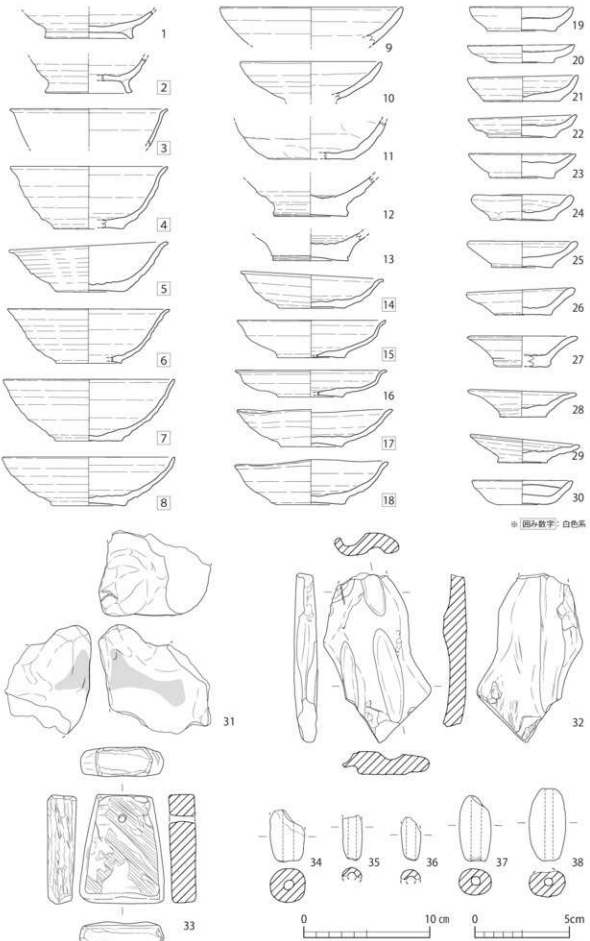
寧である。

第 10 層の遺物 (第 25 図)

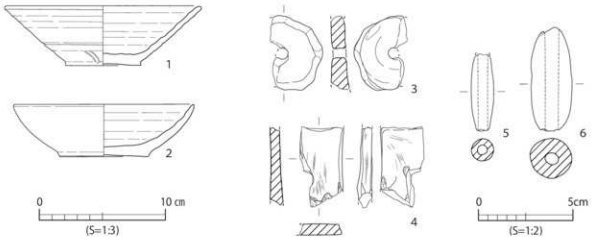
第 25 図には第 10 層出土遺物を並べた。すでに記したとおり、第 10 層は第 3 遺構面を挟み、上下 2 層に分層できるはずであるが、3 基の鍛冶炉周辺以外は遺構面を把握し得なかったため、出土遺物の大部分は区別無く取り上げた。したがって厳密には、小鍛冶炉の操業時期を挟んで前後に時期幅のある遺物がまとまっている点に留意されたい。

25-1 ～ 30 は土師質土器類である。基本的には土器溜まり 2 出土品と共通するが、同遺構では全く出土していない小型の皿が一定量含まれている。

25-1 ～ 8 は緩く内湾しながら立ち上がる坏で、個体差こそあるが口縁端部を外側に引き出して



第 25 図　第 10 層出土遺物 (S=1:3,1:2)



第 26 図　層位不明出土遺物 (S=1:3,1:2)

アクセントを付けている。外面は軽くなでられているものもあるが、むしろ強調するかのような凹凸がしっかり残るのが特徴である。このタイプの坏は底部も含め比較的薄作りである。1・2 のように高台が付くものもあるが、数は少ない。9 ～ 11 は体部が内湾する坏で、全体にやや厚みがあるのが特徴である。外面は丁寧になでられており、凹凸はほとんどない。12・13 は底部が厚みを持ち、器壁の立ち上がりが遅いもので、結果的にやや厚作りになっている。見込みには渦巻き状の凹凸が明確に残り、意図的に付けられた可能性が高い。こうした特徴を持つのは、いずれも橙色系の個体である。

25-14 ～ 18 は器壁を横に引き出してから立ち上げ、口縁端部をしっかり外反させる皿である。土器溜まり 2 出土遺物でも記したとおり、口径や製作方法など基本的な造作は坏と変わらないが、作り分けているのは間違いない。成形時もしくは焼成時の特性なのか、上げ底気味に底部が反る傾向があるようだ。

25-19 ～ 30 は小型の皿である。口径は 8 ～ 9cm に揃っているが、形状はそれぞれ微妙に異なる。19 ～ 23 は底部を比較的厚く採り、口縁部をつまみ上げるもので、雰囲気は内湾する口縁を持つ坏 (9 ～ 11) に近い。24・25 は口縁端部を玉縁様に丸めるが、口縁部を持ち上げる意識は見て取れる。26 ～ 29 は坏の成形に見られるような口縁部を外側に引き出す意識が見え、器壁が外反気味に広がる。内面にも渦巻き状の凹凸が残る傾向が強い。30 は底部縁辺が不明瞭な個体で、本遺跡で類似例が全くないタイプである。口縁部は底部と厚さが同じで、折り曲げたように無造作に持ち上がる。

25-31 は土製支脚の角部である。やや短めの二股角タイプである。これまでの調査例から、山陰地域における土製支脚の使用時期は古代に収まると考えられ、他の遺物と比較して著しく古いことが明らかである。当遺跡においては 11 世紀以前の遺物が皆無であり、発掘停止面以下 1.5m にわたり無遺物層が続いていることを考慮すると、違和感のある遺物である。洪水等により周囲から流入したものと考えられる。

25-32 は凝灰岩系石材を用いた砥石である。両面に研磨溝が直線的に走り、縁辺部も摩滅が激しい。溝のストロークが比較的短いことから、玉作に伴う筋砥石とは明らかに趣きが異なる。また石材自体も玉作用の砥石としてはあまり見かけないタイプである。あるいは小鍛冶炉の操業に伴って、製品や工具の研磨に用いられたのかもしれない。33 は滑石製の温石で、石鍋の底部再加工品と考えられる。片面には石鍋製作時の切削痕が残っており、縁辺を丁寧に面取り・研磨して台形に仕上

げている。穴は両面穿孔である。長崎県西彼杵半島を産地とする滑石製石鍋は、西日本に広く流通しており、その底部片などを利用した再加工品は各地で利用されている。34 ～ 38 は土錘である。欠損品も多いが、直径はおおむね２種類に分類できそうである。内径は両者ともほぼ同じである。

7. 層位不明遺物

層位不明遺物（第 26 図）

第 26 図には先行掘削した排水溝などから出土した、層位不明の土師質土器と石器類を並べた。1 は器壁が直線的に立ち上がる坏である。橙色系の土師質土器で、ナデ痕の凹凸がはっきりしている。底部側面に工具の当たりがある。当遺跡では直線的な器壁を持つ個体は少ないが、しいていえば 24-16 に近いか。2 は橙色系の内湾する坏で、器壁は丁寧にナデられているが、全体に厚作りである。このタイプも出土数が少ないが、25-9・10 が類似品か。3 は橙色系の坏を打ち欠いて円盤状に加工した底部に穿孔したもので、ほぼ半分を欠損している。紡錘車に用いられた可能性が高い。4 は粘板岩質の砥石である。破損品だが、片面と側縁部がかなり摩耗している。あるいは鍛冶道具や製品類の研磨に用いたのかもしれない。5・6 は太さの異なる土錘である。6 は径が 2cm 程度あり、土器溜まり 1 出土品に類似する (21-4 ～ 9)。土錘は小片も含め 40 点出土しており、概要は第２表にまとめた。

8. 陶磁器類

陶磁器類（第 27･28 図）

陶磁器は中国・朝鮮からの輸入陶磁器類と、国産の中世須恵器、瓦質土器などが出土した。輸入陶磁器と中世須恵器類は第 10 層を中心に出土しており、時期の下る国産陶器・瓦質土器類は第７層以上で出土した。

1) 中国陶磁

・白磁

27-1 ～ 4 の産地は広東省周辺と推定される。1 は碗の底部である。やや高めの高台で器壁が外開きに立ち上がる。高台内は削り出されたまま未調整であり、畳付け内面に小さな面を持つ。見込みは一段高く削り出される。灰白色の胎土で黒色粒子を少量含む。高台脇まで施釉され、畳付けを含めて高台を露胎とする。潮州窯系である。2 は碗の口縁部である。薄い器壁で立ち上がり、口縁端部を折り返して玉縁とする。胎土は灰白色を呈し、やや粗目である。灰色を帯びた光沢のない透明釉を施釉する。1･2 は大宰府分類の白磁椀Ⅱ類に比定され、11 世紀後半～ 12 世紀前半に位置づけられる。3 は皿の口縁部である。器壁は若干内湾しながら立ち上がる。灰白色を呈する緻密な胎土で、やや軟質である。細かい貫入の入る透明釉を施釉する。4 は皿の底部である。平底で外開きに立ち上がる。透明釉を内面から高台の側面まで施釉する。胎土は緻密で灰白色を呈する。3･4 は大宰府分類の白磁皿Ⅵ類に比定され、11 世紀後半～ 12 世紀前半に位置づけられる。

5 ～ 10 の産地は福建省周辺と推定される。5 は碗の底部である。底部は厚く、高台内は浅く削り出される。腰部以下を粗く削り出す。見込みに一条の沈線を廻らす。薄褐色を帯びた透明釉を施釉する。胎土は粗く薄褐色を呈しており、僅かな空隙を含む。大宰府分類の白磁椀Ⅳ類に比定され、11 世紀後半～ 12 世紀前半に位置づけられる。

6は碗の口縁部である。器壁は外開きに立ち上がり、端部は僅かに外反する。灰色を帯びた透明釉を施釉する。灰色を呈する緻密な胎土で、黒色粒子を微量に含む。博多における出土傾向から12世紀代と想定される。

7は碗の上半部である。器壁は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は嘴状に折れて口唇部が水平となる。見込みに一条の沈線を廻らす。粘質性のある透明釉が腰部まで施され、以下を露胎とする。灰色を呈した緻密な胎土で、黒色粒子を微量に含む。博多における出土傾向から12世紀前半～13世紀代と想定される。

8・9は平底で器壁が上向きに立ち上がる皿の底部で、見込みに浅い沈線を廻す。8は貫入のある透明釉を内面から腰部にかけて施し、底部以下を露胎とする。釉際には緋色が生じる。底部は回転削りで成形され、円筒状の焼台痕がつく。灰色を呈した胎土はやや軟質で、黒色粒子を含む。9は光沢のない透明釉を内外面に施釉して底部を拭き取る。緻密な胎土で灰色を呈する。それぞれ大宰府分類の白磁皿Ⅸ類に比定され、13世紀後半～14世紀前半に位置づけられる。

10は皿の底部である。器壁は厚く、高台内の削りは浅い。高台は台形を呈しており、器壁は外開きに立ち上がる。内面には印花で蓮花文が施され、蓮の種が描写される。灰白色に発色する透明釉を見込みから腰部まで施し、高台を露胎とする。胎土は緻密で淡灰褐色を呈する。一部器壁が黒色化しており、二次焼成を受けたものと思われる。沖縄県で集中的に出土するビロースクタイプに比定され、14世紀～15世紀前半代が想定される。当時、明との朝貢貿易を行っていた琉球を経由してもたらされた可能性が高い。

11・14は江西省の景徳鎮窯系と推定される。11は碗の底部である。高台はやや薄く全体的に小ぶりの印象を受ける。器壁は外開きに立ち上がる。内面には櫛描きで施文される。光沢性のある透明釉を腰部まで薄掛けし、高台を露胎とする。高台の内側面にアルミナ砂が付着する。緻密な胎土で白色を呈する。博多における出土傾向から12世紀代が想定される。14は皿の上半部である。器壁は薄く内湾しながら立ち上がり、口縁付近で外反する。光沢のない透明釉を施す。胎土はやや粗目で灰色を呈する。破断面に漆が付着していることから、漆継ぎを行ったものと思われる。森田分類の白磁皿E群に比定され、16世紀代に位置づけられる。

・青白磁

27-12、13は江西省の景徳鎮窯系と推定される青白磁である。12は小壺の蓋である。蓋体は型押しで成形され、掛子部分を貼り付ける。器面には陽刻で連子文が施文される。器壁の内外に青味を帯びた透明釉を施し、口受け部分を無釉とする。胎土は緻密で灰白色を呈する。博多における出土傾向から12世紀前半代が想定される。13は合子の蓋である。押型しで成形され、表面には陽刻の鳳凰文が施文される。外面に青味を帯びた透明釉を施し、口縁周りの釉を磁胎と共に薄く削り取る。釉際には緋色が生じる。内面は無釉であるが、頂部のみ透明釉を点付けする。胎土はやや粗く灰白色を呈する。博多における出土傾向から12世紀後半～13世紀代が想定される。

・青磁

27-15～17は福建省同安窯系の青磁である。15は碗の底部である。器壁はやや角度をもって立ち上がり、高台内は削り残しが兎巾状にせりあがる。見込みに一条の沈線を廻らせ、内面に箆描きの花文と櫛描きの地文様を点描する。外面には縦方向に櫛目文が施文される。内面から腰部にかけて施釉するが、粘性が高い釉調であり、ムラが生じる。胎土はやや粗目で、青灰色を呈する。

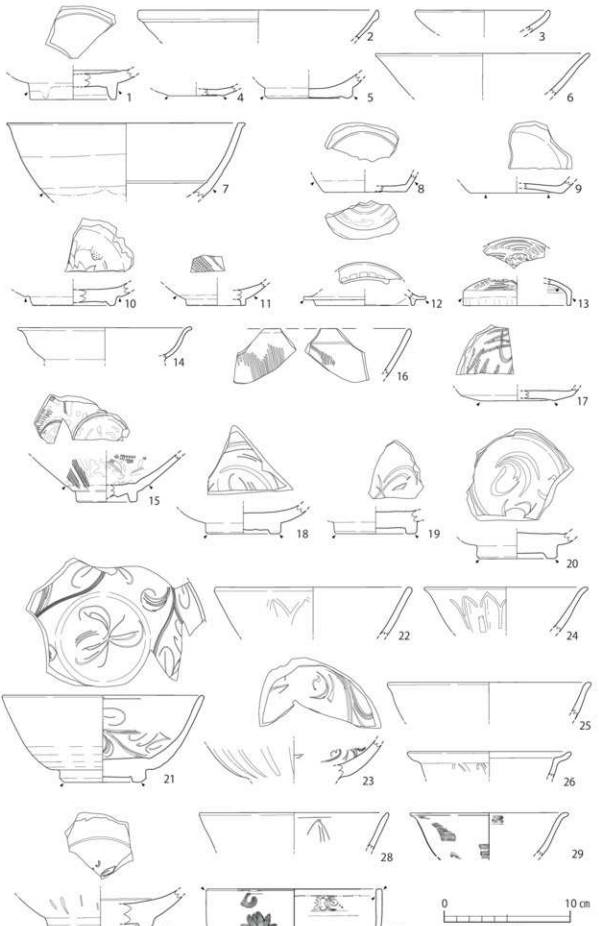
16は碗の口縁部である。薄い器壁は僅かに内湾しながら立ち上がる。口唇部は外側から内側にむけて傾斜する。内口縁には圏線を廻らし、内外面に縦方向の櫛目文を施文する。褐色を帯びた釉を薄掛けする。胎土は灰色を呈している。15･16は大宰府分類の同安窯系青磁碗Ⅰ類に比定され、年代観は12世紀中頃～12世紀後半代になる。17は皿の底部である。平底の底部で器壁は外開きに立ち上がり、腰部以下を篦削りして面をもつ。内面には櫛描き文様とジグザグの櫛点描を施文する。褐色を帯びた釉を薄掛けし、底部の釉は磁胎とともに薄く削りとる。胎土は灰色を呈している。大宰府分類の同安窯系青磁皿Ⅰ類に比定され、年代観は12世紀中頃～12世紀後半代になる。

18～28は浙江省龍泉窯系の青磁である。18は碗の底部である。底部は厚く、器壁は外開きに立ち上がる。幅広の高台で、畳付けの外周を面取する。高台内は浅く削り取る。見込みには一条の浅い沈線を廻らし、圏線内に劃花文を施す。褐色を帯びた青磁釉を高台の側面まで施し、畳付けを含めた高台は露胎とする。腰部は篦による回転削りで調整される。緻密な胎土で灰褐色を呈する。19は碗の底部である。底部は厚く、幅広の高台で畳付けの外周を面取する。見込みには劃花文が施される。高台内は浅く削り出し、小型焼台の痕跡がつく。若干青味を帯びた釉を高台の側面まで施し、畳付けを含めた高台内を露胎とする。胎土は緻密で灰色を呈する。20は碗の底部である。底部は厚く、器壁が外開きに立ち上がる。幅広の高台は台形を呈し、畳付けの外周を面取りする。高台内は浅く削り取られる。見込みに浅い沈線を廻らし、圏線内に劃花文を施す。褐色を帯びた青磁釉を高台の側面まで施し、畳付けを含めた高台内を露胎とする。胎土は緻密で灰色を呈する。21は口縁が直口する碗である。底部は厚く、器壁は外開きに立ち上がる。畳付けの外周を面取りし、腰部は回転削りで調整される。内口縁に圏線を廻らし、内面には劃花文を施す。光沢のある青磁釉を内面から高台の側面まで薄く掛け、畳付けを含めた高台内を露胎とする。高台内は浅く削り出し、小型の焼台痕が残る。胎土は緻密で灰色を呈する。

28は碗の口縁部である。薄い器壁は外開きに立ち上がり、口縁端部は直口する。口縁付近まで回転削りで調整され、口唇部は内面から外側に向けて傾斜する。内口縁に沈線を廻らし、内面に片切彫りで蓮花文を施す。光沢のある青磁釉が薄掛けされる。緻密な胎土で灰色を呈する。18～21･23･28は大宰府編年の龍泉窯系青磁椀Ⅰ類に比定され、12世紀中頃～後半に位置づけられる。

22は碗の口縁部である。薄い器壁は外開きに立ち上がる。口唇部は外側から内側にむけて傾斜する。内面に劃花文、外面に鎬蓮弁文を施す。内外面に貫入のある釉を薄掛けする。緻密な胎土で灰色を呈する。23は碗の底部である。器壁は厚く、内湾しながら立ち上がる。内面には劃花文が、外面には鎬蓮弁文を施す。やや粘性のある青磁釉を施す。緻密な胎土で灰色を呈する。大宰府分類の龍泉窯系青磁椀Ⅱ類に比定され、13世紀代に位置づけられる。24は碗の口縁部である。薄い器壁は僅かに内湾しながら立ち上がり、口縁端部は外反する。外面には幅広の鎬連弁文が施される。貫入のある青磁釉を厚掛けする。緻密な胎土で灰色を呈する。大宰府分類の龍泉窯系青磁椀Ⅲ類に比定され、13世紀中頃～14世紀初頭前後に位置づけられる。南宋の“砧青磁”に倣うが、釉調は火膨れを伴って質は落ちる。

25は碗の口縁部である。薄い器壁は僅かに内湾しながら立ち上がり、口縁端部は外反する。褐色を帯びた青磁釉を厚掛けする。緻密な胎土で灰色を呈する。上田氏分類の青磁碗Ｄ類に比定され、15世紀前半代と考えられる。26は折縁皿である。薄い器壁は内湾しながら立ち上がり、口縁付近で折れ曲がって鍔縁となる。外面には片切彫りで連弁文を施す。釉調は二次焼成により灰褐色化す



第 27 図　陶磁器類 1(S=1:3,1:2)

る。緻密な胎土で灰色を呈する。博多における出土傾向から 15 世紀前半代が想定される。27 は碗の底部である。厚手の底部に器壁が内湾しながら立ち上がる。高台畳付けは両端を削って丸みを帯びる。見込みに沈線を廻らし、圏線内に印花を施す。外面には縦方向に片彫りの連弁文の一部と思われる沈線を入れる。光沢のある釉を高台の内側面まで厚掛けする。緻密な胎土で灰色を呈する。上田氏分類の青磁碗 B3 類に比定され、15 世紀後半代と考えられる。

・青花

28-29・30 は青花である。29 は碗の上半部である。薄い器壁は内湾しながら立ち上がり、口縁端部は外反する。外面に箪木文、外口縁に二重圏線、内口縁に四方襷文を施文する。胎土は緻密で灰白色を呈し、黒色粒子を微量に含む。器形は小野氏分類の B 群に比定される。30 は蓋付碗の口縁部である。薄い器壁は直立し、口唇部は水平に成形される。蓋を受ける口唇部から内口縁にかけて無釉とする。外面には唐草文、内口縁に渦繋ぎ文を施す。釉際には緋色が生じる。緻密な胎土で白色を呈する。いずれの産地も中国江西省の景徳鎮窯である。

・褐釉陶器

28-31 ～ 35 は褐釉陶器である。31 は壺の口縁部である。薄い器壁は直立して立ち上がり、口縁端部を折り返して玉縁とする。頸部の内面から外面にかけて薄く褐釉を施す。口唇部は釉を拭き取って重ね焼きをした痕が残る。緻密な胎土で灰色を呈する。32 は壺の頸部である。外面には成形時の轆轤目が残り、内面は回転ナデで調整する。頸部内面から外面にかけて褐釉を薄く施す。緻密な胎土で灰色を呈する。31 と 32 の推定される産地は福建省周辺で、磁灶窯が指標とされる。博多における出土傾向から 13 世紀代が想定される。

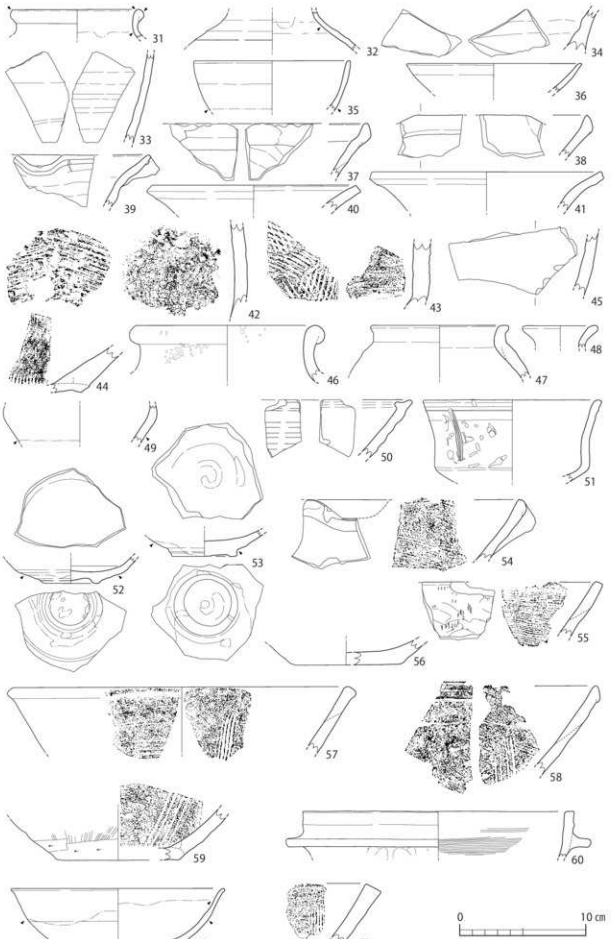
33 は壺の腰部である。器壁は薄く、僅かに内湾しながら立ち上がる。外面は篦による回転削り、内面を回転ナデで調整する。内外面に光沢のない褐釉を内外面に薄く施す。胎土は外表面が灰色、中心部は茶褐色を呈しており、砂粒を微量に含む。34 は壺の腰部である。底部に近い部分は厚く、器壁が立ち上がるにつれて薄くなる。2 点はほぼ同じ調整と釉調であり、胎土も似ていることから同一個体の可能性がある。推定される産地は浙江省の越州窯系である。博多における出土傾向から 12 世紀前半～ 13 世紀前半代と想定される。

・天目

中国産の天目碗が二点出土している。28-63 は碗の胴部付近で、内外面に鉄釉を施釉する。緻密な胎土で灰褐色を呈する。推定される産地は福建省周辺で、南平茶窯が指標とされる。64 は碗の腰部付近で、高台脇を箆削りして面を取る。銹釉を化粧掛けし、内外面に黒釉を施す。腰部以下は露胎とする。胎土は暗褐色を呈して、少量の砂粒を含む。推定される産地は福建省の閩江周辺諸窯である。

2) 朝鮮陶器

28-35・36 は朝鮮半島の灰青沙器である。35 は碗の口縁部である。器壁は僅かに内湾しながら立ち上がり、口縁は直口する。内外面に光沢のない灰釉を施す。緻密な胎土で灰色を呈する。36 は皿の口縁部である。器壁は僅かに内湾しながら立ち上がる。内外面に光沢のない灰釉を施す。灰色を呈した緻密な胎土で、黒色粒子を微量に含む。いずれも 15 世紀後半～ 16 世紀前半代が想定される。



第 28 図　陶磁器類 2(S=1:3,1:2)

3) 国産陶磁器・土器

国産の資料は、中世須恵器および陶器・瓦質土器がある。

・中世須恵器

28-37 ～ 43 は中世須恵器である。37 ～ 39 は東播系の捏鉢ないし擂鉢の一部と思われる。37･38 は鉢の口縁部で、38 は片口を有する。器壁は外開きに立ち上がり、端部を折り返して口縁外帯を膨らませる。内面は指ナデ、外面は回転ナデで調整される。暗灰色を呈した粗目の胎土で、砂粒を少量含む。口唇部は重ね焼きによって剥離している。38 は口縁下に別個体の口唇部が付着し、口縁外帯から片口内面にかけて自然釉が降り掛かる。39 は片口鉢の口縁部である。器壁は外開きに立ち上がり、外口縁に細い突帯が廻らされる。灰色を呈した胎土は、比較的緻密で砂粒を微量に含む。内外面とも回転ナデで調整される。

40･41 は壺の口縁部である。喇叭形にやや外反しながら立ち上がり、端部は面を持つように整形する。緻密な胎土で灰褐色を呈する。41 の内外面は焼きむらで茶褐色がかる。42･43 は厚い器壁の壺・甕類破片である。叩き成形されており、外面に平行タタキの痕が残る。42 は僅かに内湾することから胴部の一部と思われる。二次焼成を受けて赤褐色化しており、胎土は砂粒を微量含む。内外面は摩滅が激しい。43 は内壁面が屈折することから腰部付近と思われる。内面は横ナデで調整される。胎土は外表面が灰色、中心部は灰褐色を呈し、砂粒と微小な空隙を含む。40 ～ 43 の産地は不明である。

・陶器

28-44 ～ 48･62 は焼き締め陶器で、44 ～ 47 は備前系陶器である。44 は擂鉢の底部で、底部は薄く、厚手の器壁は外開きに立ち上がる。組作りで成形される。内面には九条以上を単位とする擦り目を入れる。胎土は外表面が暗灰色、中心部は灰褐色を呈しており、砂粒を少量含む。擦り面は使い込まれて摩滅する。45 は甕の胴部である。器壁は厚く、内外面は回転ナデで調整される。灰褐色を呈した胎土は、粗く砂粒を少量含み微小な空隙を含む。46 は壺の口縁部である。直口して立ち上がり、端部を折り返して玉縁とする。器壁の内外面は回転ナデで調整され、外面には灰落ちが降りかかる。胎土は灰色を呈しており、砂粒を少量含む。備前市分類の壺 - Ⅲ A 期に比定され、14 世紀前半代と考えられる。47 は壺の口縁部である。頸部は短く、口縁端部を押さえて嘴状に成形する。内外面は回転ナデで調整する。胎土は外表面が灰色、中心部は赤褐色を呈しており、緻密で砂粒を少量含む。備前市分類の壺 - Ⅴ B ～Ⅵ A 期頃に比定され、16 世紀後半～ 17 世紀前半代にあたる。

48 は瓶子の口縁部と思われる。頸部は外開きに短く立ち上がり、口縁端部を丸くする。内外面を回転ナデで調整され、内面に自然釉が掛かる。緻密な胎土で灰色を呈し、僅かに空隙を含む。産地は不明である。62 は擂鉢の口縁部である。器壁は外開きに立ち上がり、端部に面を取る。内外面は回転ナデで調整され、内面に五条以上を単位とする擦り目を上位付近まで入れる。胎土は淡褐色を呈しており、白色粒子を少量含む。産地不明であるが、備前焼や珠洲焼に同様のものが見られる。

49 ～ 50 は瀬戸美濃系陶器である。49 は天目碗の腰部である。器壁は外開きに立ち上がり腰部で屈折する。内外面に黒斑のある鉄釉を施釉し、高台周りを露胎とする。胎土はやや粗く、灰白色を呈する。50 は卸目付大皿の口縁部である。器壁は外開きに立ち上がり、端部を内側に折り返す。器壁外面には轆轤目が残る。内外面には細かな貫入のある灰釉を施す。内外面は摩耗しており、釉

薬の一部は剥落する。灰白色を呈した胎土は緻密であるが空隙を含む。藤澤分類の古瀬戸後期Ⅲ～Ⅳ期に比定され、15 世紀第２四半期～ 15 世紀中頃にあたる。

61 は陶器碗の口縁部である。薄い器壁は内湾しながら立ち上がり、口縁端部が外反する。外面は轆轤目が残り、内面は回転ナデで調整される。口縁部のみ薄く灰釉を施す。灰色を呈した胎土で黒色粒子を含む。産地は不明だが、東海地方で作られた山茶碗の可能性が考えられる。

51 ～ 53 は肥前系陶器で、51 は香茶碗の上半部である。器壁は外開きに立ち上がり、腰部で屈曲して外反気味に立ち上がる。外口縁に節目をもち、胴部に縦方向に篦目を入れる。斑のある鉄釉を施して長石釉を散らす。胎土は緻密で灰白色を呈する。断面の一部は黒色化しており、二次焼成を受けたものと思われる。17 世紀前葉頃と思われる。52 は皿の底部である。器壁は外開きに立ち上がり、腰部で緩やかに屈折する。腰部以下を篦削りで調整する。高台は低い台形を呈し、高台内は浅く削り出されて中心は兎巾状にせり上がる。濃緑色に発色する灰釉を厚掛けし、底部の釉を拭き取る。胎土は暗灰色を呈しており、粗目で砂粒を多く含む。内面は使い込まれて摩耗する。九州近世陶磁学会分類のⅠ -1 ～２期に比定され、16 世紀末葉～ 17 世紀前葉にあたる。53 は皿の底部である。底部は厚手で器壁は外開きに立ち上がる。見込みには回転ナデの調整痕が渦巻き状に、高台脇には回転削りの成形痕が竹節状に残る。高台内は中心がズレた状態で浅く削り出されて、畳付けの幅には広狭がある。腰部には胎土目跡が四ケ所付着するものの、見込みには目跡が見られない。重ね焼きの一番上に置かれて窯詰めされたものと思われる。灰釉を見込みから腰部に掛けて施しており、底部を露胎とする。胎土は緻密で灰色を呈する。内面は使い込まれて摩耗する。九州近世陶磁学会分類のⅠ -2 期に比定され、16 世紀末～ 17 世紀初頭に位置づけられる。

・瓦質土器

28-54 ～ 60 は瓦質土器である。54 は片口鉢の口縁部である。器壁は外開きに立ち上がり、端部を折って玉縁状に成形する。内外面はハケ目で調整し、外面をナデ消す。胎土は灰白色を呈する。紐作りで成形され、断面には粘土の継ぎ目がみえる。55 は鉢の口縁部である。器壁は外開きに立ち上がり、端部は面をもつ。内外面はハケ目で調整され、外面は削りが加えられる。紐作りで成形され、断面には粘土の継ぎ目がみえる。胎土は灰色と灰白色のマーブル状になり、黒雲母を微量に含む。56 は鉢の底部である。底部は篦削りで調整され、器壁は外開きに立ち上がる。胎土は灰色を呈しており、微量に砂粒を含む。二次焼成を受けていると思われる。いずれも擂鉢ないし捏鉢の一部と思われる。

57 ～ 59 は擂鉢である。57 は薄い器壁が外開きに立ち上がり、端部を外側に折り返して口縁下を篦で削り外帯としている。紐作りで成形し、内外面をハケ目で調整したのち外面に削りを加える。胎土は灰白色を呈しており、砂粒を少量含む。内面には四条を単位とする擦り目が間隔を空けて中位まで入れられる。58 の器壁は外開きに立ち上がり、端部を外側に抑えて嘴状とする。紐作りで成形し、内外面を回転ナデで調整する。内面には五条を単位とする擦り目が間隔を空けて上位まで入れられる。胎土は淡褐色を呈しており、砂粒を微量に含む。59 は底部である。紐作りで成形され、内外面をカキ目で調整したのち外面に削りを加える。四条を単位とする擦り目が間隔を空けて入れられる。胎土は淡灰褐色を呈しており、2㎜以下の砂粒を少量含む。見込み付近は使い込まれて摩耗している。

60 は羽釜の口縁部である。薄い器壁は僅かに内湾しながら立ち上がり、頸部は直口して口唇部

は面を持つ。鍔は頸部脇に貼り付けられ、上面は回転ナデで調整され、下面にはナデつけた指頭圧痕が残る。鍔下面より底部にかけて煤が付着し、頸部以上は比熱で表面が白化する。胎土は灰白色を呈しており、2㎜以下の砂粒を多く含む。

9. 鉄器、その他の出土遺物

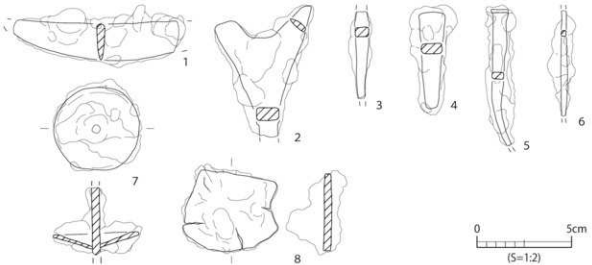
鉄製品（第 29 図）

鉄製品は第５表のとおり、計 48 点出土した。内訳は、刀子５点、鏃２点、楔３点、紡錘車１点、釘 29 点、板状鉄製品１点、板材２点、用途不明鉄製品５点である。12 世紀後半～ 13 世紀初頭頃、当遺跡では鉄製品の生産を行っていたと考えられるため、これらの鉄製品には製品や鍛冶に関連する道具類が含まれる可能性がある。

29-1 は刃部が僅かに反る刀子で、関の形状は不明である。あるいは鍛冶等に使用する工具の刃先かもしれない。２は狩股形鉄鏃の頭部である。茎側は断面長方形を呈し、先端部は杏仁形に整形する。刃部の研磨が為されているかは分からない。３は一端が絞り込まれて稜を持つ鉄棒で、形状から鉄鏃の柄と判断したが、工具類の柄の可能性もある。４はテーパーの付いたやや厚手の鉄片で、楔と考えられる。錆の状況を見ると鍛造品か。5･6 は釘である。５は断面長方形で、頭部をたたき込んで幅広に整形したものである。６は頭部を欠くが、太さが約 0.4cm と細身である。出土品の太さは 0.6 ～ 0.7cm 程度が最も多いが、1cm 程度のやや太めのものも幾つかある。

７は紡錘車の紡輪である。傘形にテーパーが付いており、最大径は約 4.5cm である。軸棒は両端が失われ、紡輪付近の様子しか把握できないが、軸棒とは別作りである。腐食が激しいが、断面円形の鉄棒を打ち込んでいるように見える。８は厚さ約 5mm の板片である。不定形に切られた鉄板で、縁辺から中心に向かって複数のひび割れが走っている。割れ口の様子から、鋳造品を叩いて板状に引き伸ばしたものの可能性が高い。製品に加工する途上の鉄片、もしくは端切れと考えられる。

用途不明鉄製品には、札状の鉄片をＬ字型やコの字形に曲げたものが３点含まれる。屈曲の角度は一定で、明らかに直角を出す意図が認められることから、鍵や留金具のようにも見える。用途は同じなのだろうが、具体的な使用方法は不明である。



第 29 図　鉄製品 (S=1:3,1:2)

古銭

第 10 層から皇宋元寶が 1 点出土した。出土時はかろうじて原形を留めており、銭の種類を把握することができたが、すでに金属成分がほとんど残っていない状態であった。現場から回収後、復元不能なほど粉々に砕けてしまったため、詳細は不明である。

鍛冶・製鉄関連遺物 (第 30 図)

田渕遺跡からは、少ないながらも鉄滓や鉄塊、炉壁片・羽口片などの鍛冶・製鉄関連遺物が出土した。(第 6 表) 総遺物量は、羽口・炉壁等が 1462.4g、鉄滓・鉄塊等が 13657.9g である。これらの多くは 7 層以下の包含層から出土している。特に小鍛冶炉 3 基が確認された 10 層及び第 3 遺構面からの出土が多い。すでに述べたとおり、小鍛冶炉の操業面 (第 3 遺構面) は 10 層の中程にあたり、出土遺物もこれを境に少なくとも 2 時期に区分できるはずである。小鍛冶炉周辺には造成土が部分的に残っていたため、その区別は容易であったが、遺構から離れた場所での識別は困難であった。したがって、10 層出土遺物には小鍛冶炉操業以降の遺物と小鍛冶炉構築前の遺物が混在している点は注意を要する。また、数量は少ないが流動滓や炉壁片なども見られ、調査区外のさほど遠くない場所に製鉄・精錬関連施設が存在した可能性が指摘できる。

以上のように、田渕遺跡の鍛冶・製鉄関連遺物は、おおむね中世 (12 世紀後半以降) の所産と考えられるが、およそ一括性の高いものではない。また、調査区内の小鍛冶炉に伴うものと、調査区外の鍛冶・製鉄関連施設から流入したもの、客土 (造成土等) に含まれたもの、等の出自の異なるものが混在していると考えられる。こうした状況を勘案し、遺物整理作業においては全数を計測した上で、主要遺物の選別を行い、必要最小限の図化や写真撮影を行うにとどめた。

30-1 は碗形鍛冶滓で、一部を欠くがほぼ全体像を把握できるものである。平面形は長軸 17.3cm、短軸 13.5cm の楕円径を呈し、重量は 1800.0g である。出土した碗形滓は他に 3 点あるが、いずれも 10 層の中でも比較的低いレベルから出土しており、小鍛冶炉のある第 3 遺構面よりも古い時期の所産である可能性が高い。

流動滓は 11 点出土しているが、うち 2 点を図化した。(30-2・3) いずれも 10cm 以下の小片であり、幅の把握できるものはない。比較的よく流動しており、木炭は少ない。破断面の角が欠落し、丸くなっ

第 30 図　鍛冶・製鉄関連遺物 (S=1:3)

ている場合もあり、洪水等によって土砂とともに流入したものも含まれるかもしれない。

鉄塊は 40 点出土している。特に第３遺構面及び 10 層からまとまって出土しており、小鍛冶炉の操業に伴って、素材として持ち込まれた可能性が高い。また、SK02 の埋土をふるいにかけたところ、多量の木炭片に混じり、鍛造剥片や粒状滓が確認できた。(図版 24)

ところで、江の川対岸にあたる八神上ノ原遺跡では、鍛冶関連遺物とともに緑青の付着した坩堝などが出土している。坩堝自体は復元径が 5cm にも満たない小型のものだが、溶銅を行っていたことが明らかである。関連遺物の絶対量が少なく、銅製品の製作は小規模少量であったと考えられるが、鉄製品と銅製品を作り分けていたことが把握できる興味深い事例である。一方、田渕遺跡においては、銅製品や関連遺物が全く出土しておらず、立地の類似する２遺跡で異なる様相が見られる。この時期の銅製品は、梵鐘などの大型品のほか、仏具類や飾り金具、銭などが考えられるが、実際に何を製作していたのかは不明である。

引用・参考文献

伊藤創編 2018『八神上ノ原Ⅱ遺跡発掘調査報告書』江津市教育委員会

伊藤創 2017「江津市における石見焼生産の特徴」『近世・近代の石見焼の研究』古代文化センター研究論集第 17 集

上田秀夫 1982「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究№ 2』日本貿易陶磁研究会

梅木茂雄編 2002『高津遺跡　都治地区県営圃場西部に伴う発掘調査報告書Ⅱ』江津市教育委員会

小野正敏 1982「15 ～ 16 世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究№ 2』日本貿易陶磁研究会

角田徳幸 2004「中国山地における中世の鉄生産」『中国山地の中世製鉄遺跡』第 32 回山陰考古学研究集会

角田徳幸編 2005『儀谷釜跡発掘調査報告書』島根県古代文化センター研究報告書 26

片山まび 2017「高麗・朝鮮陶磁の概要」『山陰における高麗・朝鮮陶磁』山陰中世土器検討会

九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』九州陶磁学会 10 周年記念

江津市 1982『江津市誌　上巻』江津市

榊原博英 2014「石見」『中世府中』第 14 回山陰中世土器検討会「山陰地方における中世府中の様相」

榊原博英氏 2001「浜田・古市遺跡における中世前半の土器について」『松江考古』第９号　松江考古談話会

榊原博英 2006「中世前期の貿易陶磁器の様相」『山陰における中世前期の諸様相』第５回山陰中世土器検討会

山陰中世土器検討会 2003『中世須恵器の生産と流通　山陰地方を中心に』第３回山陰中世土器検討会資料集

山陰中世土器検討会 2009『山陰における中世後期の貿易陶磁器　15･16 世紀の出土陶磁の組成を中心に』第８回山陰中世土器検討会資料集

山陰中世土器検討会 2013『山陰中世土器研究１　西尾克己さん還暦記念論集』山陰中世土器検討会

山陰中世土器検討会 2012『土器・陶磁器から見た中世前半期の山陰　検討会 10 年のあゆみ』第 11 回山陰中世土器検討会資料集

鈴木康之編 1998『草戸千軒町遺跡出土の滑石製石鍋』草戸千軒町遺跡調査研究報告２　広島県立歴史博物館

太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡ⅩⅤ―陶磁器分類編―』大宰府市の文化財第 49 集

田中克子 2011「博多遺跡群出土の中国陶磁と対外貿易」『博多研究会誌 20 周年記念特別号』博多研究会

田中克子 2016「日宋貿易期における博多遺跡群出土中国陶磁器の変遷と流通―博多に残されたものから国内流通を考える―」『中近世陶磁器の考古学』第三巻　雄山閣

中世土器研究会編 1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

中安恵一 2017「近世・近代における石見焼の商品流通と窯場経営」『近世・近代の石見焼の研究』古代文化センター研究論集第 17 集

備前市教育委員会 2013『備前窯詳細分布調査報告書』備前市埋蔵文化財調査報告 11

平凡社地方資料センター編 1995『日本歴史地名体系第 33 巻　島根県の地名』平凡社

松尾秀昭 2017『石鍋が語る中世　ホゲット石鍋製作遺跡』シリーズ遺跡を学ぶ 122　新泉社

三浦史峰ほか 2003「江津の鍛跡」『石見潟』第 22 号

森田勉 1982「14 ～ 16 世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究№ 2』日本貿易陶磁研究会

第 4 章　自然科学分析

第 1 節　田渕遺跡出土遺物の蛍光 X 線分析について

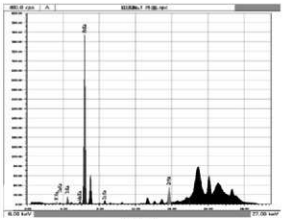
1　対象資料 (試料)　田渕遺跡出土赤彩土師器 3 点

2　分析方法　蛍光 X 線分析による元素定性分析 (非破壊)

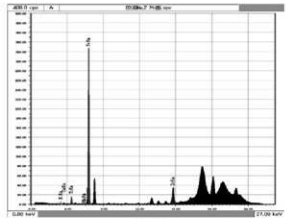
3　使用機器　卓上型ケイ光 X 線分析計 (エネルギー分散型)」 SEA1200VX
SII・ナノテクノロジー社 (現；株式会社日立ハイテクサイエンス) 製
＊島根県古代文化センター所有・島根県埋蔵文化財調査センター設置

4　蛍光 X 線分析における測定条件
管電圧；50kV　管電流；管電圧の設定による自動設定 (53 ～ 894μA)
測定時間；100 秒 (うち、測定可能な有効時間は 63 ～ 70 秒)
試料室雰囲気；大気　コリメータ；直径 8.0mm
X 線管球；Rh(ロジウム)　検出器；マルチカソード Si 半導体検出器
一次フィルタ；Pb
※ Chemplex 社製マイラーカバーを使用

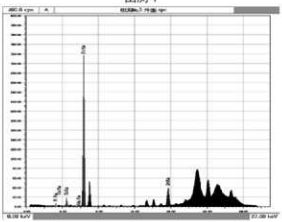
5　結果
蛍光 X 線スペクトルデータのとおり、いずれの土器も Fe(鉄) の高いピークを検出した。
赤彩は鉄由来の顔料 (ベンガラ系) によるものとみられる。



田渕 1



田渕 2



田渕 3

第 2 節　田渕遺跡周辺地域における古植生などの古環境変遷について

渡辺正巳：文化財調査コンサルタント (株)

はじめに

田渕遺跡は島根県中央部の江津市川平町南川上に位置し、中国山地を縦断する中国地方最大の河川である江の川左岸の沖積地上に立地する。本報は、田渕遺跡周辺地域の古植生などの古環境 (変遷) を明らかにする目的で、島根県教育庁埋蔵文化財センターが、文化財調査コンサルタント株式会社に委託・実施した花粉分析業務の概報である。

分析試料について

試料採取地点及び試料採取層準を、第 1 図に示した。また、第 1 図は島根県教育庁埋蔵文化財調査センターより提供を受けた原図をもとに、作成したものである。

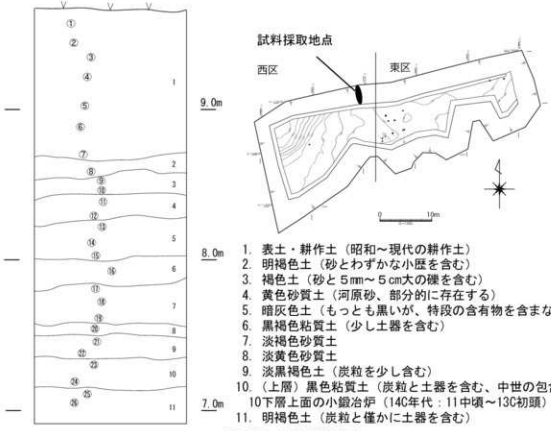
分析方法

1) 微化石概査方法

花粉分析用プレパラート及び花粉分析処理残渣を顕微鏡下で観察し、花粉 (胞子)、植物片、微粒炭、珪藻、植物珪酸体、火山ガラスの含有状況を 5 段階で示した。

2) 花粉分析方法

渡辺 (2010) に従って実施した。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常 400 倍で、必要に応じ 600 倍あるいは 1000 倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が 200 粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また中村 (1974) に従ってイ



1. 表土・耕作土（昭和～現代の耕作土）
2. 明褐色土（砂とわずかな小歴を含む）
3. 褐色土（砂と 5 ㎜～ 5 ㎝大の礫を含む）
4. 黄色砂質土（河原砂、部分的に存在する）
5. 暗灰色土（もっとも黒いが、特段の含有物を含まない）
6. 黒褐色粘質土（少し土器を含む）
7. 淡褐色砂質土
8. 淡黄色砂質土
9. 淡黒褐色土（炭粒を少し含む）
10. （上層）黒色粘質土（炭粒と土器を含む、中世の包含層）
    10下層上面の小鍛冶炉（14C年代：11中頃～13C初頭）
11. 明褐色土（炭粒と僅かに土器を含む）

第 1 図　試料採取地点

ネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科 (40 ミクロン以上) と、イネを含む可能性が低い小型のイネ科 (40 ミクロン未満) に細分した。

第１表　微化石概査結果

試料No.	花　粉	植物片	植物珪酸体	珪　藻	火山ガラス	植物珪酸体
1	△	○	◎	△	○	○
2	△	◎	○	△×	◎	◎
3	△×	◎	△	△	◎	◎
4	△×	◎	△	○○	◎	○
5	△×	◎	△	○○	◎	○
6	△×	◎	△×	○	◎	◎
7	△×	◎	△×	○○	◎	◎
8	△×	◎	△×	○	◎	◎
9	△	◎	△×	△○	◎	◎
10	△×	◎	△×	○	◎	◎
11	△×	◎	△×	△	○	○
12	△×	◎	△×	△	○	○
13	△×	◎	△×	△	◎	○
14	△×	◎	△×	△×	◎	○
15	△×	◎	△×	△×	◎	○
16	△×	◎	△×	△	○	○
17	△×	◎	△	△	○	○
18	△×	◎	△×	△	○	○
19	△×	◎	△×	△	○	○
20	△×	◎	△×	△	○	○
21	△×	◎	△×	△	○	○
22	△×	◎	△×	○	○	○
23	△	◎	△×	△	○	○
24	△×	◎	△×	△	○	○
25	△×	◎	△×	△	○	○
26	△×	◎	△×	△	○	○

凡例　◎：十分な数量が検出できる　○：少ないが検出できる　△：非常に少ない
△×：極めてまれに検出できる　×：検出できない

分析結果

1) 微化石概査結果

微化石概査結果を第１表に示す。全ての試料で、花粉、植物片の含有量は少なく、炭片、植物珪酸体、火山ガラスの含有量が多かった。珪藻の含有量はやや少ないものの、全ての試料に含まれていた。

2) 花粉分析結果

分析結果を花粉ダイアグラム (第２図)、花粉 (含有量) ダイアグラム (第３図) と花粉組成表 (第２表) に示す。花粉ダイアグラムでは、分類群ごとの百分率 (百分率の算出には、木本花粉総数を基数にしている。) を、スペクトルで表している (木本 (針葉樹) は黒、木本 (広葉樹) は暗灰、草本・藤本は明灰、胞子は白のスペクトルで表した。)。[総合ダイアグラム] では「木本 (針葉樹)」、「木本 (広葉樹)」、「草本・藤本」と「胞子」の割合を示すグラフを示した。[含有量ダイアグラム] では「木本」、「草本・藤本」、「胞子」「花粉・胞子 (全ての合計)」ごとに含有量 (湿潤試料 1g 中の粒数) の変化を示している。

花粉 (含有量) ダイアグラムでは、分類群ごとに含有量 (湿潤試料 1g 中の粒数) を算出し、スペクトルで表している (木本 (針葉樹) は黒、木本 (広葉樹) は暗灰、草本・藤本は明灰、胞子は白のスペクトルで表した。)。

得られた花粉化石群集の特徴を、以下に示す。花粉化石群集の変遷を明らかにするために、下位から上位に向かって記した。

試料№ 26 ～ 3 では木本花粉の割合が数％で、含有量も 10 粒 /g に満たなかった。一方、胞子の割合が 90％程度と高率を示した。

検出された木本花粉ではマツ属 (複維管束亜属) が 15 試料、スギ属が 10 試料から検出された。草本花粉ではイネ科 (40 ミクロン未満) が 21 試料、キク亜科が 20 試料、ヨモギ属が 18 試料、タンポポ亜科が 16 試料から検出された。このほか、試料№ 10 からはソバ属が検出された。

試料№ 2 では、木本花粉の割合が 19％まで増加し、胞子が 46％と減少する。木本花粉ではマツ属 (複維管束亜属) が 52％と高率を示すほか、スギ属が 14％、アカガシ亜属が 10％と続く。草本花粉ではイネ科 (40 ミクロン以上) が 81％、アカザ科 - ヒユ科が 29％、タンポポ亜科が 26％、アブラナ科が 19％と続く。

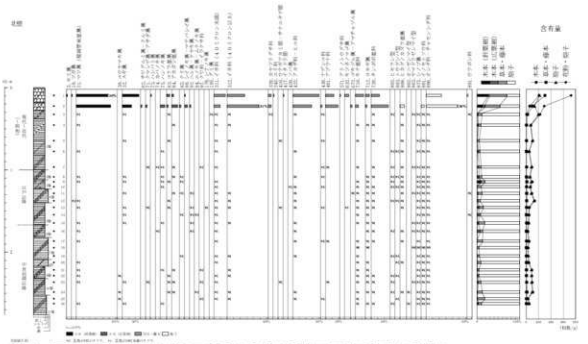
試料№ 1 では、木本花粉の割合が 29％と更に増加する一方で、胞子が 30％まで減少する。木本花粉ではマツ属 (複維管束亜属) が 60％と高率を示すほか、スギ属が 25％と続き、その他の種類は数％以下と低率である。草本花粉ではアカザ科 - ヒユ科が 40％、イネ科 (40 ミクロン以上) が 27％、イネ科 (40 ミクロン未満) が 17％、アブラナ科、キク亜科、タンポポ亜科が 13％と続く。

花粉化石が含まれなかった原因について

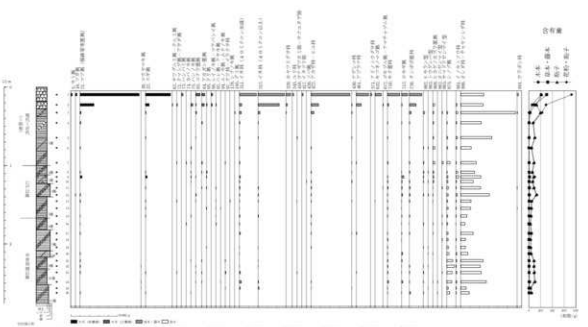
花粉分析の結果、多くの試料で花粉・胞子化石含有量が 100 粒 /g 程度以下と少ないことが明らかになった。花粉化石処理の残渣を観察する微化石概査によると、花粉以外の微化石では植物片につい同様の傾向が認められるが、炭片、植物珪酸体は豊富に含まれていた。ただし、珪藻化石は花粉化石ほどではないが、含有量が少なかった。

花粉化石の含有量が少ない原因について、一般には以下のようなことが考えられており、今回の微化石検出傾向と比べると、以下のようになる。

1．堆積物の特性 (粒度・比重) と花粉化石の平均的な粒径、比重が著しく異なり、堆積物中に花粉化石が含まれない。



第 2 図　花粉ダイアグラム



第 3 図　花粉 (含有量) ダイアグラム

今回の分析層準（試料）では、一部で砂主体の層（試料）があるものの、多くは花粉化石と動態の似た粘土～シルトが主体であり、該当しない。

2. 堆積速度が速いために、堆積物中に花粉化石の含有量が少ない。

花粉の生産量が毎年ほぼ一定であると仮定すると、堆積速度が速いほど花粉化石の含有量は少なく、遅いほど含有量は多くなる。また、花粉化石に限らず、堆積中に付加される微化石の量は、堆積速度が遅いほど多くなる。しかし、炭片、植物片や植物珪酸体の含有量が、花粉化石などと異なり多いことから、堆積速度が速かったとは考えにくい。

3.「土壌生成作用」の及ぶ期間が短く、花粉の付加量が少なかった。

「土壌生成作用」に伴って花粉粒が、炭片、植物片などの有機物とともに、堆積面から地中に取り込まれる場合もある。年間「付加量」が一定と仮定すると、「土壌生成作用」を受けた期間の長短によって、含有量の多少が決まる。今回は花粉化石の含有量は少なかったものの、炭片や植物片、植物珪酸体の含有量が多かったことから、土壌化を受けた期間が短かったとは考えにくい。

4. 堆積の過程で、花粉粒が紫外線により消滅した。

一般に、花粉化石は紫外線によって劣化・消滅する。花粉粒は、地表面に落下した直後から、紫外線の影響下に置かれる（例えば畑作環境）が、水中で堆積した場合（例えば水田環境）、紫外線が遮断され、影響は軽減される。花粉分析結果では、コウヤマキ属、アブラナ科、キク亜科、ヨモギ属の外、胞子などが、選択的に高率を示す傾向にある。また、後述の「堆積後の化学変化による劣化・消滅」との区別は困難である。

今回の花粉分析結果では胞子の割合が高く、アブラナ科、キク亜科、ヨモギ属なども比較的多く検出されるなど、紫外線（あるいは堆積後の化学変化）による影響を示唆する結果が得られている。さらに、紫外線の影響を受けにくい炭片の含有量も多く、紫外線の影響で花粉粒が劣化・消滅した可能性が指摘できる。

5. 花粉化石が本来含まれていたが、堆積後の化学変化により花粉化石が消滅した。

花粉粒や植物片などの有機物、珪藻や植物珪酸体など鉱物質のものも、グライ化などの化学変化に伴い（程度に差があるものの）分解してしまう（堆積後の化学変化は酸化鉄や酸化マンガンの沈着として現れ、多くは水田耕作における灌漑によるグライ化（鉄、マンガンの還元作用）と落水による鉄、マンガンの酸化作用の結果と考えられる。）。一方炭片は化学的に安定しており、堆積後に消滅することがない。花粉分析結果では、コウヤマキ属、アブラナ科、キク亜科、ヨモギ属の外、胞子などが、選択的に高率を示す傾向にある。また、前述のように「紫外線による劣化・消滅」との区別は困難である。

今回の分析層準（試料）は全体に褐色を帯びているが、酸化鉄や酸化マンガンの顕著な生成は認められなかった。一方、花粉分析結果では胞子の割合が高く、コウヤマキ属、アブラナ科、キク亜科、ヨモギ属なども比較的多く検出されるなど、堆積後の化学変化（あるいは紫外線）による影響を示唆する結果も得られている。さらに、化学変化に安定な炭片の含有量も多く、堆積後の化学変化の影響で花粉粒が劣化・消滅した可能性が僅かながらある。

6. 有機物に極めて富む堆積物で、花粉以外の有機物（炭片、植物片など）が多く、希釈効果により花粉化石が回収できなかった。

炭片、植物珪酸体などの含有量が多かった。また、数粒 /g 以下になるような極端に含有量の少

第 2 表

試料番号		1			2			3			4			5		
5 *Abies*	モミ属	1	2%	3.3												
10 *Tsuga*	ツガ属	1	2%	3.3												
21 *Pinus(Diploxylon)*	マツ属：複維管束亜属	38	60%	126.0	22	52%	29.4	2	33%	2.1	2	50%	1.4			
30 *Sciadopitys*	コウヤマキ属															
32 *Cryptomeria*	スギ属	16	25%	53.1	6	14%	8	1	17%	1				1	50%	0.7
62 *Pterocarya-Juglans*	サワグルミ属－クルミ属				1	2%	1.3									
71 *Carpinus-Ostrya*	クマシデ属－アサダ属				1	2%	1.3									
73 *Corylus*	ハシバミ属	1	2%	3.3												
74 *Betula*	カバノキ属															
75 *Alnus*	ハンノキ属				3	7%	4									
83 *Quercus*	コナラ亜属	3	5%	9.9	1	2%	1.3	2	33%	2.1				1	50%	0.7
84 *Cyclobalanopsis*	アカガシ亜属	2	3%	6.6	4	10%	5.3				2	50%	1.4			
85 *Castanea*	クリ属				1	2%	1.3									
88 *Castanopsis-Pasania*	シイノキ属－マテバシイ属	1	2%	3.3	2	5%	2.7									
92 *Ulmus-Zelkova*	ニレ属－ケヤキ属				1	2%	1.3									
94 *Aphananthe-Celtis*	エノキ属－ムクノキ属															
97 Moraceae-Urticaceae	クワ科－イラクサ科															
178 *Tilia*	シナノキ属															
195 *Elaeagnus*	グミ属							1	17%	1						
311 Gramineae(<40)	イネ科（40ミクロン未満）	11	17%	38.5	4	10%	5.3	4	67%	4.1	2	50%	1.4	1	50%	0.7
312 Gramineae(>40)	イネ科（40ミクロン以上）	17	27%	56.4	34	81%	45.4	4	67%	4.1	1	25%	0.7	1	50%	0.7
320 Cyperaceae	カヤツリグサ科	3	5%	9.9	2	5%	2.7	1	17%	1						
340 Liliaceae	ユリ科	1	2%	3.3												
416 *Echinocaulon-Persicaria*	ウナギツカミ節－サナエタデ節													1	50%	0.7
417 *Reynoutria*	イタドリ節	1	2%	3.3												
420 *Fagopyrum*	ソバ属															
422 Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科	25	40%	82.9	12	29%	16	6	100%	6.2						
430 Caryophyllaceae	ナデシコ科				1	2%	1.3	1	17%	1				1	50%	0.7
461 Cruciferae	アブラナ科	8	13%	26.5	8	19%	10.7									
571 Haloragaceae	アリノトウグサ科	1	2%	3.3												
632 *Justicia*	キツネノマゴ属	4	6%	13.3												
672 *Actinostemma-Gynostemma*	ゴキヅル属－アマチャヅル属				1	2%	1.3									
710 Carduoidae	キク亜科	8	13%	26.5	2	5%	2.7				1	25%	0.7	1	50%	0.7
712 *Artemisia*	ヨモギ属	4	6%	13.3	1	2%	1.3				1	25%	0.7			
720 Cichorioideae	タンポポ亜科	8	13%	26.5	11	26%	14.7	4	67%	4.1	1	25%	0.7	2	100%	1.3
802 *Urostachys sieboldii* type	ヒモラン型							3	50%	3.1						
803 *Urostachys serratum* type	トウゲシバ型															
808 Subgenus *Lycopodium*	ヒカゲノカズラ亜属				3	7%	4	2	33%	2.1	3	75%	2.1	3	150%	2
862 *Osmunda claytoniana*. type	オニゼンマイ型															
863 *Osmunda cinnamomea*. type	ヤマドリゼンマイ型							1	17%	1						
875 *Davallia*	シノブ属							2	33%	2.1	1	25%	0.7	3	150%	2
881 Pteridaceae	イノモトソウ科				2	5%	2.7	4	67%	4.1	3	75%	2.1	5	250%	3.3
886 Aspid.-Asple.	オシダ科－チャセンシダ科	15	24%	49.7	36	86%	48.1	114	1900%	116.9	62	1550%	44.2	101	5050%	66.8
891 Polypodiaceae	ウラボシ科	1	2%	3.3				1	17%	1						
898 MONOLATE-TYPE-SPORE	単条溝胞子	22	35%	73.0	30	71%	40.1	32	533%	32.8	18	450%	12.8	22	1100%	14.6
899 TRILATE-TYPE-SPORE	三条溝胞子	27	43%	89.5	29	69%	38.8	33	550%	33.9	10	250%	7.1	16	800%	10.6
木本花粉総数		63	29%	209	42	19%	56	6	3%	6	4	4%	3	2	1%	1
草本花粉総数		91	42%	302	78	35%	101	20	9%	21	6	6%	4	7	4%	5
胞子総数		65	30%	216	100	46%	134	192	88%	197	97	91%	69	150	94%	99
総数		219		726	218		291	218		224	107		76	159		106

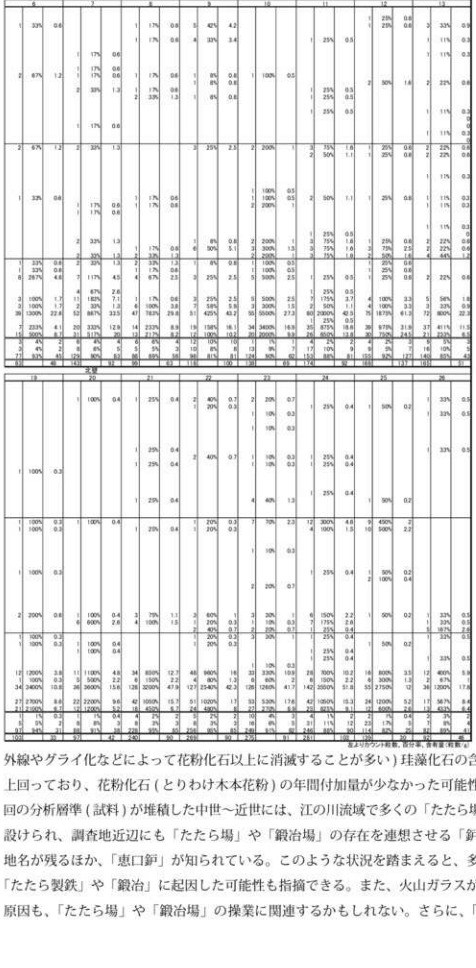
試料番号		14			15			16			17			18		
5 *Abies*	モミ属															
10 *Tsuga*	ツガ属															
21 *Pinus(Diploxylon)*	マツ属：複維管束亜属				1	17%	0.3	1	17%	0.3	1	100%	0.4			
30 *Sciadopitys*	コウヤマキ属															
32 *Cryptomeria*	スギ属	1	20%	0.4	2	33%	0.6									
62 *Pterocarya-Juglans*	サワグルミ属－クルミ属															
71 *Carpinus-Ostrya*	クマシデ属－アサダ属															
73 *Corylus*	ハシバミ属															
74 *Betula*	カバノキ属							2	33%	0.7						
75 *Alnus*	ハンノキ属				2	33%	0.6									
83 *Quercus*	コナラ亜属															
84 *Cyclobalanopsis*	アカガシ亜属															
85 *Castanea*	クリ属	2	40%	0.9												
88 *Castanopsis-Pasania*	シイノキ属－マテバシイ属			0												
92 *Ulmus-Zelkova*	ニレ属－ケヤキ属	1	20%	0.4	1	17%	0.3	3	50%	1						
94 *Aphananthe-Celtis*	エノキ属－ムクノキ属	1	20%	0.4												
97 Moraceae-Urticaceae	クワ科－イラクサ科															
178 *Tilia*	シナノキ属															
195 *Elaeagnus*	グミ属															
311 Gramineae(<40)	イネ科（40ミクロン未満）	1	20%	0.4	5	83%	1.4	2	33%	0.7	6	600%	2.2			
312 Gramineae(>40)	イネ科（40ミクロン以上）				5	83%	1.4									
320 Cyperaceae	カヤツリグサ科															
340 Liliaceae	ユリ科															
416 *Echinocaulon-Persicaria*	ウナギツカミ節－サナエタデ節															
417 *Reynoutria*	イタドリ節															
420 *Fagopyrum*	ソバ属															
422 Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科－ヒユ科				2	33%	0.6	1	17%	0.3	1	100%	0.4			
430 Caryophyllaceae	ナデシコ科										1	100%	0.4			
461 Cruciferae	アブラナ科										3	300%	1.1			
571 Haloragaceae	アリノトウグサ科															
632 *Justicia*	キツネノマゴ属															
672 *Actinostemma-Gynostemma*	ゴキヅル属－アマチャヅル属															
710 Carduoidae	キク亜科	2	40%	0.9	2	33%	0.6				1	100%	0.4	3	–	1.1
712 *Artemisia*	ヨモギ属	1	20%	0.4	3	50%	0.9	1	17%	0.3	2	200%	0.7	1	–	0.4
720 Cichorioideae	タンポポ亜科				3	50%	0.9	1	17%	0.3	2	200%	0.7			
802 *Urostachys sieboldii* type	ヒモラン型							2	33%	0.7						
803 *Urostachys serratum* type	トウゲシバ型															
808 Subgenus *Lycopodium*	ヒカゲノカズラ亜属							2	33%	0.7	2	200%	0.7			
862 *Osmunda claytoniana*. type	オニゼンマイ型															
863 *Osmunda cinnamomea*. type	ヤマドリゼンマイ型				1	17%	0.3	1	17%	0.3				1	–	0.4
875 *Davallia*	シノブ属	7	140%	3.1	6	100%	1.7	6	100%	2.1	8	800%	2.9	9	–	3.2
881 Pteridaceae	イノモトソウ科	2	40%	0.9	3	50%	0.9	1	17%	0.2				3	–	1.1
886 Aspid.-Asple.	オシダ科－チャセンシダ科	49	980%	21.5	47	783%	13.4	27	450%	9.2	75	7500%	27	30	–	10.8
891 Polypodiaceae	ウラボシ科	1	20%	0.4									0			
898 MONOLATE-TYPE-SPORE	単条溝胞子	15	300%	6.6	40	667%	11.4	16	267%	5.5	18	1800%	6.5	26	–	9.4
899 TRILATE-TYPE-SPORE	三条溝胞子	21	420%	9.2	20	333%	5.7	14	233%	4.8	10	1000%	3.6	9	–	3.2
木本花粉総数		5	5%	2	6	4%	2	6	8%	2	1	1%	0.4	0	0%	0
草本花粉総数		4	4%	2	20	14%	6	5	6%	2	16	12%	6	4	5%	2
胞子総数		95	91%	42	117	82%	33	69	86%	24	113	87%	41	78	95%	28
総数		104		46	143		41	80		27	130		47	82		30

ない試料も存在しなかった。多くの試料で、花粉化石と比重の近い炭片や植物片が多量に含まれていたことによって花粉粒の濃縮が進まず、これらによる希釈効果が現れたものと考えられる。

以上のことを整理すると、炭片や植物片による希釈効果により花粉化石の濃縮が進まなかったことが、直接の原因であると考えられる。また、堆積時の紫外線及び堆積後の化学変化によって、堆積時及び堆積後に花粉粒 (有機物：植物片) が少なからず消滅した可能性が指摘できる。

一方、今回の分析結果では、特に花粉化石 (とりわけ木本花粉) の含有量が少ない傾向にある。(紫

花粉組成表



外線やグライ化などによって花粉化石以上に消滅することが多い）珪藻化石の含有量は花粉化石を上回っており、花粉化石（とりわけ木本花粉）の年間付加量が少なかった可能性も指摘できる。今回の分析層準（試料）が堆積した中世～近世には、江の川流域で多くの「たたら場」や「鍛冶場」が設けられ、調査地近辺にも「たたら場」や「鍛冶場」の存在を連想させる「釿」、「鍛冶屋谷」の地名が残るほか、「恵口釿」が知られている。このような状況を踏まえると、多量の炭片の検出は「たたら製鉄」や「鍛冶」に起因した可能性も指摘できる。また、火山ガラスが多量に検出される原因も、「たたら場」や「鍛冶場」の操業に関連するかもしれない。さらに、「たたら場」や「鍛

冶場」の操業に伴い、調査地周辺の山林が伐採され、「ハゲ山」状態であった可能性も指摘できる。このことは、江の川上流の「潮村」での百姓山の植生 (佐竹，2009) からも裏付けられる。

第 3 表　元禄 7 年潮村百姓山の「植生」(佐竹、2009)

栗	松	小松	細木	柴木	芝草	草	黒竹	筆数	面積 (町)	歩
○			○					2	0. 46	
	○	○		○				1	1. 50	
	○		○					1	1. 86	
		○	○					2	6. 26	25
		○		○		○		5	16. 46	10
		○		○				11	33. 27	2
		○			○			2	4. 41	20
			○					6	22. 88	10
				○		○		22	45. 01	24
				○				3	4. 03	10
					○			9	9. 74	
						○		1	0. 16	20
							○	2	0. 14	29
注：『潮村百姓間尺相改帳』								67	146. 23	

局地花粉帯の設定

花粉分析結果を解析するに当たり、通常は木本花粉化石群集の変化を読み取り、花粉分帯 (局地花粉帯の設定) を行う。さらに、各分帯ごとに古植生等古環境を推定し、その変遷を明らかにする。一方、今回の分析結果ではほとんどの試料で木本花粉化石の検出量が少なかったことから、花粉分帯を行わなかった。

古植生及び土地利用 (堆積環境) について

第 10 層は出土遺物から中世に堆積したと考えられていた。また、第 10 層下層上面で「小鍛冶炉」が検出され、関連する炭片からの 11 世紀中頃～ 13 世紀初頭の 14C 年代値が得られていた (第 5 章, 表Ⅳ・表Ⅴ)。これらのことから、第 10 層が中世初頭に堆積した可能性が高い。したがって、今回の分析結果は中世初頭以降、現代までの古環境を反映していると考えられる。以下では、田渕遺跡で実施した花粉分析結果を基に、田渕遺跡周辺における中世初頭以降、現代までの古環境を推定する。また、時間軸に沿って古い時期から新しい時期へと示す。

(1) 中世初頭～近代？

① 周辺の植生

花粉分析の結果、検出された多くは胞子化石であり、木本花粉のみならず、草本・藤本花粉の検出量も少なかった (割合も低かった)。

胞子化石ではオシダ科 - チャセンシダ科が全試料で多く検出された。試料によってはシノブ属も多く検出され、イノモトソウ属やヒカゲノカズラ亜属が特徴的に検出される試料もあった。花粉化石の割合が全体に低いことから、調査地周辺にはこれらシダ類が生育していたと考えられる。シダ類には林床 (暗く湿潤な場所) 植生のイメージが強いが、日当たりの良い裸地に生育する種類もある。後述のように、「ハゲ山」状態の丘陵や低地に広く分布していた可能性がある。

稲作の指標となるイネ科 (40 ミクロン以上) 花粉の含有量が少ないことから、短期間の耕作で水田が作り直されていた可能性が指摘できる。このことは、調査時に「洪水のたびに水田が復元され、水田耕作土が重なっている」と考えられたことと、整合する。このほか、試料№ 10 でソバ属が検出され、3 層 (江戸時代) での畑作の可能性が示唆される。畑作 (特にソバ栽培) は、水田の裏作や休耕田で行われていたと考えられ、水田耕作を否定するものではない。

また、植物珪酸体化石の保存状態が良いことから、改めて植物珪酸体分析を実施することで、調査地近辺の植生、土地利用の実体が明らかになる可能性がある。

② 森林植生

前述のように、近辺での「たたら場」や「鍛冶場」の操業に伴い、調査地周辺の山林が伐採され、「ハゲ山」状態であった可能性も指摘できる。丘陵上には、僅かに花粉が検出されるアカマツやクリ、

ナラ類、カシ類の「葉：孫生（ヒコバエ）」や幼木が目立ったと考えられる。

(2) 近代～現代（昭和以降）

① 周辺の植生

上位の２試料（1 層上部、試料№ 1 は現耕土）では、他の試料（層準）に比べ花粉化石が多く検出された。ここではイネ科（40 ミクロン以上）が高率で検出され、水田耕作が行われていたと考えられる。また、アカザ科 - ヒユ科、アブラナ科の出現率も高く、雑穀のアカザ（あるいはヒユ）やナタネ（あるいはダイコン、キャベツ、カブ、コマツナなど）などが裏作や休耕田を利用して栽培されていた可能性も指摘できる。

② 森林植生

調査地周辺丘陵の現存植生は、丸山ほか (1982) が示した様に、コナラ群落、アカマツ植林、スギ植林でほとんどが占められている。花粉分析結果でも、マツ属（複維管束亜属）、スギ属、コナラ亜属、アカガシ亜属が高率を示す傾向にあり、現存植生と矛盾しない。日本における「エネルギー革命：家庭用エネルギーに関して、1960 年代以降の木炭・薪などの木質エネルギーから石油・ガス・電気への移行を言う。」以降、急激に森林環境が復活しているものと推測される。

まとめ

田渕遺跡で実施した花粉分析の結果、以下の事柄が明らかになった。

(1) 花粉分析結果、花粉・胞子化石含有量が少ないことが分かった。このため、解析で通常行う「局地花粉帯の設定（花粉分帯）」を行わなかった。

(2) 花粉・胞子化石の含有量が少なかった原因について考察した。他の微化石：炭片、植物珪酸体の含有量は多く、珪藻の含有量も少なくなかった。花粉の検出量が少なかった直接原因は、多量の炭片による希釈効果によると考えられた。また、堆積時の紫外線及び堆積後の化学変化によって、堆積時及び堆積後に花粉粒（有機物：植物片）が少なからず消滅した可能性も指摘できる。一方、珪藻の含有量が花粉化石を上回ることから、木本花粉の年間付加量が少なかった（調査地周辺の丘陵が「ハゲ山」状態であった）可能性も指摘できた。

(3) 既存資料から、調査地周辺の丘陵植生について、「たたら製鉄」や「鍛冶」に伴う伐採が関連する可能性が示唆された。

(4) 調査地内での耕作について、1 層上部（現代）でのイネ栽培と、アカザ（あるいはヒユ）やナタネ（あるいはダイコン、キャベツ、カブ、コマツナなど）などの栽培、3 層（江戸時代以降）でのソバ栽培が明らかになった。一方、「洪水のたびに水田が復元され、水田耕作土が重なっている」という現地での観察結果を直接裏付ける結果は得られなかった。ただし、イネ科 (40 ミクロン以上) 花粉の含有量が少ないことから短期間の耕作で水田が作り直されていた可能性が指摘され、整合的な結果と言える。植物珪酸体含有量が多いことから、今後分析を実施することで、稲作の実態について明らかになる可能性がある。

(5) 1 層上部で得られた花粉化石群集と現存森林植生資料との比較を行った結果、矛盾しないことが分かった。

(6) 1960 年代以降の木炭・薪などの木質エネルギーから石油・ガス・電気への移行（エネルギー革命）以降、急激に森林環境が復活しているものと推測される。

引用文献

佐竹　昭 (2009) 石見銀山領における猪被害とたたら製鉄．広島大学総合博物館研究報告，1，77-84.

中村　純 (1974) イネ科花粉について，特にイネを中心として．第四紀研究，13,187-197.

丸山　巌・西上一義・杉村喜則・有田宗一・西田雄行・山根　忠 (1982) 第 2 回自然環境保全基礎調査 (植生調査) 現存植生図 島根県 20 川本．環境庁．

渡辺正巳 (2010) 花粉分析法．必携 考古資料の自然科学調査法．174-177. ニュー・サイエンス社.

第５章　総括

第１節　中世の遺構と遺物

・土器溜まりと土師質土器（坏・皿）

田渕遺跡出土品の大部分は、中世の土師質土器である。これらのうち、壺・甕類はごく僅かで、坏・皿が９割以上を占める。

坏・皿類の出土数を表Ⅰにまとめた。これらは器壁や口縁部が薄く、小片になりやすいため、比較的厚みのある底部の数をピックアップし、カウントした。底部破片から坏・皿の区別を行うことは難しく、すべてを一括して扱う。また、表では破片サイズを４段階に区分したが、ここでは破片数をベースに記述する。坏・皿の総破片数は2112点であるが、全てが回転糸切りの底部を持ち、柱状高台を持つものは皆無である。層位不明品を除くと７割近くが第10層から出土している。

第10層出土品は、一括性の高い土器溜まり出土資料が存在し、全体の傾向が明確に把握できる。坏は、①器壁が内湾しながら立ち上がり、口縁部をわずかに外反させてアクセントをつけるもの、②器壁が緩く内湾したままのもの、に分類できる。前者は薄造りで、ろくろ目以上に顕著な凹凸を（おそらく意図的に）外面に残すものが多い。また口径が12～13cm前後に揃い、明らかに規格性が高い。後者は全体に厚手で、内外面をしっかりナデ整形するためろくろ目が残らない。また、形状やサイズはややバラつくようである。高台の付く個体は前者にのみ見られるが、その数は少ない。破片数を比較すると、両者の割合は９：１程度で前者が圧倒する。皿は、坏①タイプを扁平に潰したようなものと、小型品に分類できる。前者の出土は第10層に集中する。

一方、第７・９層は出土量が明らかに少なく、特に第7-1・7-3層（第１・２遺構面を含む）では、図化しうる土器片を選択することが困難なほどであった。全体像や口径が復元できる個体はほとんどない。これらの土師質土器群の形態的特徴を抽出することは難しいが、坏がやや厚底傾向で、造作が甘い点は指摘できる。また11-3は、径の広い底部から直線的に立ち上がる器壁を持つ皿で、他の層位では出土していない。この形態の小皿は、より新しい要素なのかもしれない。

ところで江津・浜田地域においては、橙色（あるいは褐色）系・白色（あるいは灰白色）系と呼称される、色調の異なる２種類の土師質土器が使用されていることが知られている。これらの土器は、焼成時の温度等の差によって生じている面もあるが、どうやら胎土自体がもともと異なるようである。一例として、「石見府中」と推定される下府川下流域（浜田市下府町・上府町・国府町）の発掘調査では、横路遺跡（原井ケ市地区）や古市遺跡で、古市Ⅰ期の白色系土師質土器が溝や土

層位		橙色系				小計	白色系				小計	合計	比率（%）	
		底部完形	1/2以上	1/4以上	小片		底部完形	1/2以上	1/4以上	小片			橙色系	白色系
7-1層		2	1	12	43	58	0	0	0	0	0	58	100.0	0.0
7-2層		1	2	12	79	94	0	0	1	6	7	101	93.1	6.9
9層		3	13	97	333	446	0	0	5	32	37	483	92.3	7.7
10層	包含層	40	45	155	257	497	21	33	103	216	373	870	57.1	42.9
	土器溜まり１	0	1	5	1	7	1	1	1	0	3	10	70.0	30.0
	土器溜まり２	5	7	5	6	23	41	16	18	4	79	102	22.5	77.5
	合計	45	53	165	264	527	63	50	122	220	455	982	53.7	46.3
層位不明		12	23	96	262	393	4	4	29	58	95	488	80.5	19.5
合計		63	92	382	981	1518	67	54	157	316	594	2112	71.9	28.1

＊この他に須恵質の坏破片（土器溜まり１出土）1点あり

表Ⅰ　坏・皿類（土師質土器）数量一覧表

坑に一括廃棄されていた。[註1] 本遺跡の土師質土器は、第 10 層では白色系が約 45％を占めるのに対し、第 9・7 層といった上層部にほとんど含まれない。こうした変化は田渕遺跡の約 5km 下流に位置する八神上ノ原・八神上ノ原Ⅱ遺跡でも見られる。輸入陶磁器のうち白磁を主体とする八神上ノ原遺跡では白色系が見られるのに対し、時期がやや下り青磁が卓越する八神上ノ原Ⅱ遺跡では、白色系が皆無である。[註2] 古市遺跡でも、供伴する輸入陶磁器の差異から同様の変遷が想定されており、12 世紀～ 13 世紀初頭にかけての江津・浜田沿岸部に共通する現象と捉えることができよう。また、榊原氏は白色系をより儀礼的要素の強い一群と想定しているが[註3]、祭祀もしくは饗宴後の一括廃棄と考えられる当遺跡の土器溜まり 2 において、出土土師質土器の 8 割以上が白色系である点は、これを裏付けるものである。なお本遺跡では、焼成後の白色系土器の内外面にベンガラを塗布したものも出土している。(第 4 章第 1 節参照) 管見に触れる限りこの地域では初例であり、両者の使い分けを考える上で、注目される事例といえる。

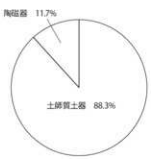
・陶磁器類

田渕遺跡出土の陶磁器類を、表ⅡとグラフⅠにまとめた。土師質土器と陶磁器類の割合は、およそ 9：1 である。ただし土師質土器は底部数を元に推定個体数をカウントしたので、多少とも接合したとはいえ全破片を対象とした陶磁器の割合は、これよりも少ないと考えられる。国産陶磁器と輸入陶磁器の割合はそれぞれ 44％と 55％で、若干輸入陶磁器が上回る。㎡あたりの輸入陶磁器数では 157/950=0.16 点となり、貿易陶磁器の集散地とされる古市遺跡 (浜田市下府町) の 0.53 点や、横路遺跡土器土地区 (浜田市下府町) の 0.39 点に比べかなり少ない。[註4] 本遺跡は石見沿岸部の一消費地とみるべきだろう。とはいえ出雲・伯耆地域の遺跡では、㎡あたりの出土数が 0.1 点を超え

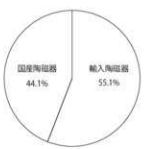
白磁									青白磁		青磁								青花		中国陶器			
広東系		福建系				江西系		不明	江西系		福建系		浙江系					不明	江西系		福建系		福建系	浙江系
						景徳鎮系			景徳鎮系		同安系		龍泉系						景徳鎮系		南平茶系	閩江周辺	磁灶系	越州系
椀Ⅱ	皿Ⅳ	椀Ⅳ	皿Ⅸ	碗	その他	碗	皿Ⅰ		小壺蓋	合子蓋	椀Ⅰ	皿Ⅰ	椀Ⅰ	椀Ⅱ	椀Ⅲ	椀Ⅳ	蓮碗B4	小碗	椀B	蓋付碗	天目	天目	壺	四耳壺
11	12	9	3	10	2	2	1	7	1	1	18	5	35	7	1	2	1	1	4	1	1	1	6	9

朝鮮陶器		陶器							中世須恵器			瓦質土器				土師器甕・鍋等		
灰青沙器		偏前系			瀬戸美濃系		産地不明		東播系	産地不明								
碗	皿	擂鉢	壺	甕	天目	皿	碗	擂鉢	鉢	壺・瓶	鉢	鉢	擂鉢	鍋か	羽釜	甕	鍋	不明
4	1	1	2	1	1	1	3	1	7	80	9	3	5	6	2	1	1	0

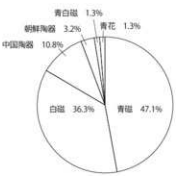
表Ⅱ　陶磁器類数量一覧



土師器質土器と陶磁器の比率



国産、輸入陶磁器の比率



輸入陶磁器の比率

グラフⅠ　陶磁器類の割合

る遺跡は少なく、これらの地域に比べ貿易陶磁器の流通量は多かったと考えられる。

輸入陶磁器の内訳を見ると、青磁が約半数を占め、白磁は 36%、中国陶器は 10%である。表Ⅲは、出土した輸入陶磁器の年代観をまとめたものであるが、① 11 ～ 12 世紀前半の白磁のみの時期、② 12 世紀後半～ 13 世紀前半の青磁を主流とする時期、③ 14 世紀以降、の３時期に区分できる。

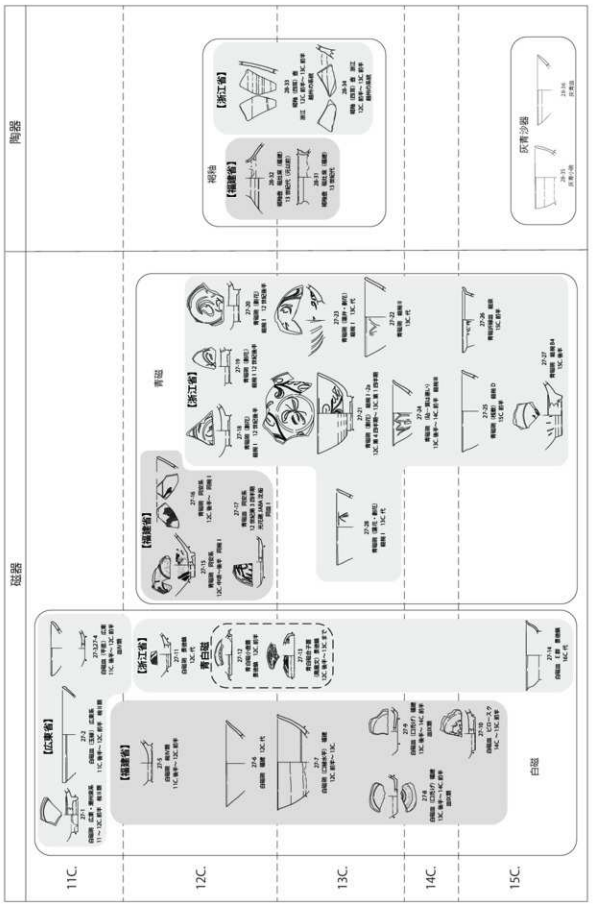
①は広東系の白磁を主体とし、景徳鎮の青白磁合子等を含む一群だが、数量自体は多くない。多くが第 10 層から出土しており、当遺跡では最古参の遺物と考えられる。輸入陶磁器類は、その性格から入手～廃棄まで相応の時間を経ている可能性があり、11 世紀代の白磁が 12 世紀代に残ることもあるだろう。すでに述べたように、第４遺構面直上 (第 10 層下層) からは、土器溜まりをはじめとする土師質土器がまとまって出土しており、これらの年代観とも矛盾はない。

②は本遺跡で最も数量が多く、輸入陶磁器類の中心となる時期と考えられる。同安窯系と龍泉窯系の青磁が大部分を占め、これに福建系の白磁を少数含んでいる。青磁碗がまとまった数出土しており、有力者の屋敷や寺院などが近隣に存在した可能性が指摘できよう。また磁灶窯 (福建省) と越州系の褐釉壺も一定数出土している。出土層位は第 10 層を主体とし、調査の際には①との層位的な分別ができなかった。しかし、これらの青磁類が土器溜まりを含む第４遺構面から全く出土していない点を考慮すると、第 10 層でも上層、第３遺構面よりも上の所産である可能性が高い。遺構との対比でいえば、第３遺構面の小鍛冶炉の操業時期に近いと考えられる。なお、鎬蓮弁を持つ青磁碗が数点出土しており、13 世紀後半あるいは 14 世紀までを含めてもよいかもしれないが、中心的な時期からは外れると見てよい。

③は数量が限られる。調査区部分は 17 世紀以降、畑地として耕作されていたことが分かっており、耕作に際し遺構・遺物が四散した可能性もある。特筆されるのは、14 世紀～ 15 世紀前半代のピロースク系白磁皿が出土している点である。沖縄県のピロースク遺跡出土品で知られるこの白磁は、福建系の窯で生産され、南西諸島 (沖縄) を経由して流通したと考えられている。島根県内では、益田平野周辺の三宅御土居跡、七尾城跡など数カ所の出土にとどまり、遺跡あたりの出土数も１～２点に過ぎない。山陰地域では馴染みの少ない資料であるだけに、現状では他の白磁と区別されていない可能性もあり、今後の資料増加が待たれる。

・滑石製温石

田渕遺跡では、第 10 層から石鍋を再加工したと考えられる滑石製温石が１点出土した。滑石製石鍋は、西日本を中心に古代から中世の遺跡で出土しており、先行研究によれば長崎県西彼杵半島一帯を原産地とする滑石を用いて製作されたとされている。中国地方では、12 世紀後半以降になると瀬戸内沿岸を中心に中国地方各地で出土例が増加する。[註5] 滑石は比較的柔らかく、加工が容易であることから、転用素材としても利用された。草戸千軒町遺跡 (広島県福山市) においては、出土した滑石製品 2171 点のうち 574 点に何らかの再加工が施されており、温石・硯・漁網錘・スタンプなどが作られている。[註6] 温石もしくはその未製品と考えられる、板状で方形に加工されたものは計 123 点あり、約２割を占めるという。草戸千軒町遺跡出土品では、石鍋の体部～口縁部に由来する湾曲したものと、底部を切り出した平坦なものが混在して利用されているが、本遺跡出土品は後者である。片面には石鍋製作時の粗い切削痕がそのまま残っており、こちら側が当初の底部外面であろう。本遺跡出土品は、草戸千軒資料に比べ側面の面取りや研磨が丁寧に施されており、製作者のこだわりがうかがわれる。



表Ⅲ　出土輸入陶磁器類編年表

温石の具体的な使用法、特に小穴の使用方法は、携帯時の紐通し用、鉄輪等の把手装着用、あるいは高温の温石を取り扱う際に火箸を刺す、など意見の分かれるところである。

第２節　鍛冶・製鉄関連遺構と遺物

・鍛冶関係遺物と遺構

田渕遺跡では、第３遺構面から小鍛冶炉３基が検出された。SK02 と SK04 の埋土からは炭層に混じって鍛造剥片や粒状滓が出土しており、これらが実際に操業していたことは間違いない。しかし、鍛冶作業に使用される輪・羽口・工具類・金床石等は遺構面に残されておらず、小鍛冶炉が築かれた造成土も、鍛冶炉周辺の一部分でしか残されていない。こうした状況は、単に使用を止めて放置されたというよりも、洪水等によって流失したことを想起させる。包含層から出土した羽口片なども、厳密にはこれらの炉に伴うかどうか不明であり、SK02 内に残されていた羽口片 (19-1) のみが、唯一操業時の原位置に残されたものと考えられる。

今回は埋土出土炭化物の AMS 測定を実施し、表Ⅳの結果を得た。SK03 は十分な炭化物が得られず分析できなかった。SK02・SK04 の暦年較正年代 (1 σ) は、資料 SK04-2 が 100 年ほど古い値を示すが、他の３点は 12 世紀後半～ 13 世紀初頭を示し、輪入陶磁器類の年代観と大きな矛盾はない。ただし、今回の資料はいずれも小片で、樹木最外年輪から大きく離れた位置の炭化物である可能性が残る。したがって、それぞれの操業時期は確定できないが、仮に同時操業でないとしてもさほど時期差なく設置され、鍛冶作業が行われたと考えられる。

・製鉄関係遺物

本遺跡の包含層からは、小鍛冶炉の操業に伴うとは考えにくい鉄滓が出土している。流動滓や比較的大型の鉄滓の多くは、調査区外の近隣で行われた製鉄もしくは精錬の所産である可能性がある。奥谷川を挟んだ対岸には、近世末～近代に操業した恵口鑪が存在しており、西に続く谷筋には鍛冶屋谷の地名も残っている。こうした状況から、調査中は出土した鉄滓や鉄塊の多くが近世末以降に位置づけられると認識していた。しかし整理段階で集計すると、近世以降の出土遺物は７層より

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ ^{13}C (‰) (AMS)	δ ^{13}C 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-171540	SK02-1	SK02　10 層	炭化物 (鍛冶炉内木炭片)	AAA	-26.47 ± 0.59	850 ± 20	89.90 ± 0.25
IAAA-171541	SK02-2	SK02　10 層	炭化物 (鍛冶炉内木炭片)	AAA	-25.83 ± 0.41	880 ± 20	89.63 ± 0.24
IAAA-171542	SK04-1	SK04(焼土 3)　10 層	炭化物 (鍛冶炉内木炭片)	AAA	-25.38 ± 0.40	870 ± 20	89.75 ± 0.24
IAAA-171543	SK04-2	SK04(焼土 3)　10 層	炭化物 (鍛冶炉内木炭片)	AAA	-25.51 ± 0.37	930 ± 20	89.12 ± 0.25

［IAA 登録番号：#8787］

表Ⅳ　放射性炭素年代測定結果 (δ ^{13}C 補正値)

測定番号	δ ^{13}C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age　(yrBP)	pMC　(%)			
IAAA-171540	880 ± 20	89.63 ± 0.23	854 ± 22	1169calAD - 1215calAD (68.2%)	1155calAD - 1252calAD (95.4%)
IAAA-171541	890 ± 20	89.48 ± 0.23	879 ± 21	1155calAD - 1210calAD (68.2%)	1048calAD - 1085calAD (18.2%) 1124calAD - 1137calAD (3.5%) 1150calAD - 1219calAD (73.7%)
IAAA-171542	870 ± 20	89.68 ± 0.23	868 ± 21	1163calAD - 1208calAD (68.2%)	1051calAD - 1081calAD (7.6%) 1151calAD - 1223calAD (87.8%)
IAAA-171543	930 ± 20	89.03 ± 0.24	925 ± 22	1045calAD - 1095calAD (43.1%) 1120calAD - 1142calAD (19.5%) 1147calAD - 1154calAD (5.7%)	1035calAD - 1160calAD (95.4%)

［参考値］

表Ⅴ　放射性炭素年代測定結果 (δ ^{13}C 未補正値、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代)

上層にのみ存在し、量も非常に少ないことが判明した。また第６表のように、鉄滓・鉄塊の半数以上は９層以下から出土し、層位不明なものも多くがより下層から出土した印象が強い。したがって、これらの遺物も小鍛冶炉や土師質土器・貿易陶磁器などと同時期の所産であろう。

江の川流域では、支流である八戸川上流を中心に平安時代後半～室町時代の製鉄遺跡が確認されている。これらは、それまでの製鉄炉に比べ地下構造が長く採られ、本床状遺構の両側に小舟状遺構を伴うものが多い。こうした地下構造の複雑化・大型化は、製鉄炉の大型化を反映していると考えられており、近世床釣構造を持つ高殿鑪へと繋がるものとされている。[註７] 本遺跡は段丘上の緩斜面に位置し、平坦地を確保しうる場所は背後の丘陵裾だけである。後世の改変のためか、試掘確認調査（江津市教育委員会実施）においても明確な遺構は確認されなかったため、製鉄・精錬遺構の位置は不明である。現状では江の川下流域でこの時期に遡る製鉄遺跡は皆無だが、後に「石見鉄」の生産地として知られるこの地域で、より古い時期の製鉄・精錬遺構が発見される可能性は高いといえる。

第３節　まとめ

田渕遺跡は、試掘確認調査での出土遺物が少なく、調査面積も限られることから、短期間での調査が予定されていた。しかし、実際には近世以降の分厚い耕作土の下に、12～13 世紀を中心とする遺構や遺物がまとまって存在し、最終的に４つの遺構面を把握することができた。遺構では、12～13 世紀の柵列もしくは塀と考えられる柱穴列や、土師質土器を一括廃棄したと考えられる土器溜まり、小鍛冶炉などが検出された。遺物では、これらの遺構に伴う土師質土器、輸入陶磁器類、国産陶磁器類、製鉄・精錬・鍛冶関連遺物が出土した。これまで述べてきたように、土師質土器、輸入陶磁器の年代観や小鍛冶炉由来の放射性炭素年代測定の結果は、概ね整合性がとれている。簡単に遺跡の変遷を振り返れば、本遺跡は土師質土器の一括廃棄と白磁を伴う 12 世紀前半～中頃にはじまり、12 世紀後半～ 13 世紀初頭になると小鍛冶炉が操業するとともに、柵や塀が機能した。調査区の周囲には、青磁類を所持しうるような有力者の屋敷や寺院が存在したと考えられる。また、周辺では製鉄・精錬炉が操業していた可能性もある。13 世紀後半以降になると、出土遺物・遺構とも急激に減少し、石見銀山を巡る攻防が繰り広げられた時期の様相ははっきりしない。そして遅くとも近世に入る頃には、調査区一帯が耕作地へと姿を変えていったと考えられる。

以上のように、今回の調査では江の川下流域における中世の様相を垣間見ることができた。この地域は、これまであまり発掘調査が行われておらず、石見銀山開発以前の資料は断片的なものでしかなかった。河川改修に伴う発掘調査は今後も続く予定であり、こうした歴史の空白が徐々に埋まっていくことを期待したい。

註１　榊原博英 2014「石見」『中世府中』第 14 回山陰中世土器検討会「山陰地方における中世府中の様相」
註２　伊藤創氏（江津市教育委員会）のご教示による
註３　榊原博英氏 2001「浜田・古市遺跡における中世前半の土器について」『松江考古』第９号　松江考古談話会
註４　榊原博英 2006「中世前期の貿易陶磁器の様相」『山陰における中世前期の諸様相』第５回山陰中世土器検討会
註５　松尾秀昭 2017『石鍋が語る中世　ホゲット石鍋製作遺跡』シリーズ遺跡を学ぶ 122　新泉社
註６　鈴木康之編 1998『草戸千軒町遺跡出土の滑石製石鍋』草戸千軒町遺跡調査研究報告２　広島県立歴史博物館
註７　角田徳幸 2004「中国山地における中世の鉄生産」『中国山地の中世製鉄遺跡』第 32 回山陰考古学研究集会

遺物観察表

第１表　田渕遺跡出土遺物観察表（土器）

fig	図版番号	出土地点	出土層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)		調整		色調		焼成	回転糸切	胎土	備考
11-1	13	1区	7-1 層	土師器	底部			5.8	外	摩滅	外	橙 5YR6/8	良好	○	1mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	橙 5YR6/8					
11-2	13	2区	7-1 層	土師器	底部			(4.5)	外	回転ナデ	外	橙 5YR6/8	良好	○	1mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	橙 7.5YR7/6					
11-3	13	1区	7-1 層	土師器	鉢	(9.0)	(2.8)	(6.6)	外	ナデ	外	橙 7.5YR6/6	良好	○	1mm 以下の砂粒含む	
									内	ヨコナデ	内	橙 7.5YR6/6					
12-1	13	3区	7-3 層	土師器	底部			(7.0)	外	摩滅	外	橙 7.5YR6/6	良好	○	1mm 以下の砂粒含む	
									内	摩滅	内	橙 7.5YR6/6					
12-2	13	3区	7-3 層	土師器	皿	(6.6)	(1.9)	(4.8)	外	摩滅	外	橙 5YR6/8	良好	○	1mm 以下の砂粒含む	
									内	摩滅	内	橙 5YR6/8					
16-1	13	3区	9 層	土師器	底部			(5.0)	外	回転ナデ	外	灰白 2.5YR8/2	良好	○	1mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	灰白 2.5Y8/3					
16-2	13	2区	9 層	土師器	底部			6.3	外	回転ナデ	外	橙 5YR6/8	良好	○	1mm 以下の砂粒含む	内側に強い回転痕
									内	回転ナデ	内	橙 5YR6/8					
16-3	13	1区	9 層	土師器	底部			(6.0)	外	ヨコナデ	外	にぶい黄橙 10YR7/4	良好		1mm 以下の砂粒含む	
									内	ヨコナデ	内	にぶい黄橙 10YR7/4					
16-4	13	1区	9 層	土師器	底部			(4.6)	外	ヨコナデ	外	橙 7.5YR7/6	良好	○	1mm 以下の砂粒含む	
									内	摩滅	内	橙 7.5YR7/6					
16-5	13	2区	9 層	土師器	底部			4.6	外	摩滅	外	橙 7.5YR6/6	良好	○	1mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	褐灰 7.5YR4/1					
21-1	14	3区	土器溜まり 1	須恵器	坏	(15.0)			外	回転ナデ	外	灰 5Y5/1	良好		1mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	灰 5Y5/1					
21-2	14	3区	土器溜まり 1	土師器	坏	(13.2)	(4.3)	(5.6)	外	回転ナデ	外	浅黄橙 10YR8/3	良好	○	1mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	浅黄橙 10YR8/3					
21-3	14	3区	土器溜まり 1	土師器	坏	(11.6)	2.9	5.9	外	ナデ	外	灰白 10YR8/2	良好	○	3mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	灰白 10YR8/2					
田渕 1	14	3区	土器溜まり 1	土師器	坏				外	回転ナデ	外	淡赤橙 2.5YR7/4	良好		2mm 以下の砂粒含む	ベンガラ赤赤彩
									内	回転ナデ	内	淡赤橙 2.5YR7/4				内外面塗布	
田渕 2	14	3区	土器溜まり 1	土師器	小片				外	回転ナデ	外	明赤褐 2.5YR5/8	良好		1mm 以下の砂粒含む	ベンガラ赤赤彩
									内	回転ナデ	内	浅黄橙 10YR8/3				外面のみ塗布	
田渕 3	14	3区	土器溜まり 1	土師器	底部				外	回転ナデ	外	明赤褐 2.5YR5/8	良好	○	1mm 以下の砂粒含む	ベンガラ赤赤彩
									内	回転ナデ	内	浅黄橙 10YR8/3				外面のみ塗布	
24-1	15	4区	土器溜まり 2	土師器	坏	(11.7)	(3.6)	(5.1)	外	回転ナデ	外	灰白 2.5Y8/1	良好	○	1mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	灰白 2.5Y8/1					
24-2	15	4区	土器溜まり 2	土師器	坏	12.0	4.4	5.3	外	回転ナデ	外	灰白 2.5Y8/2	良好	○	1mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	灰白 2.5Y8/2					
24-3	15	4区	土器溜まり 2	土師器	坏	(12.0)	4.1	5.0	外	回転ナデ	外	灰白 2.5Y8/2	良好	○	1mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	灰白 2.5Y8/2					
24-4	15	4区	土器溜まり 2	土師器	坏	(12.0)	4.4	5.6	外	回転ナデ	外	灰白 10YR8/2	良好	○	2mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	灰白 10YR8/2					
24-5	15	4区	土器溜まり 2	土師器	坏	(12.0)	4.3	5.2	外	回転ナデ	外	浅黄橙 7.5YR8/4	不良	○	1mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	浅黄橙 7.5YR8/6					
24-6	15	4区	土器溜まり 2	土師器	坏	12.2	4.2	5.5	外	回転ナデ	外	淡黄 2.5Y8/3	良好	○	1mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	淡黄 2.5Y8/3					
24-7	15	4区	土器溜まり 2	土師器	坏	(12.2)	4.1	(5.6)	外	回転ナデ	外	灰白 2.5Y8/2	良好	○	1mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	灰白 2.5Y8/2					
24-8	15	4区	土器溜まり 2	土師器	坏	(12.4)	(4.2)	5.2	外	回転ナデ	外	浅黄橙 10YR8/3	不良	○	1mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	浅黄橙 10YR8/3					
24-9	15	4区	土器溜まり 2	土師器	坏	(12.5)	4.5	5.4	外	回転ナデ	外	浅黄橙 7.5YR8/4	不良	○	1mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	浅黄橙 10YR8/4					
24-10	15	4区	土器溜まり 2	土師器	坏	(12.7)	(4.1)	5.4	外	回転ナデ	外	橙 5YR7/6	良好	○	1mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	橙 5YR7/6					
24-11	16	4区	土器溜まり 2	土師器	坏			5.9	外	回転ナデ	外	灰白 2.5Y8/2	良好	○	1mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	灰白 2.5Y8/2					
24-12	16	4区	土器溜まり 2	土師器	坏	(13.0)	4.0	(6.0)	外	回転ナデ	外	灰白 10YR8/2	良好	○	1mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	灰白 10YR8/2					
24-13	16	4区	土器溜まり 2	土師器	坏	(13.6)	(3.9)	5.4	外	回転ナデ	外	浅黄橙 7.5YR8/4	良好	○	1mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	橙 7.5YR7/6					
24-14	16	4区	土器溜まり 2	土師器	坏	(13.6)	5.2	6.0	外	回転ナデ	外	橙 5YR7/6	不良	○	1mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	橙 7.5YR7/6					
24-15	16	4区	土器溜まり 2	土師器	坏	(14.2)	(4.6)	(5.4)	外	回転ナデ	外	灰 10YR8/2	良好	○	3 mm以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	灰 10YR8/2					
24-16	16	4区	土器溜まり 2	土師器	坏	(15.2)	5.1	(6.2)	外	回転ナデ	外	灰白 2.5Y8/2	良好	○	1mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	灰白 2.5Y8/2					
24-17	16	4区	土器溜まり 2	土師器	坏			(5.6)	外	回転ナデ	外	橙 7.5YR7/6	不良	○	1mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	浅黄橙 10YR8/3					
24-18	16	4区	土器溜まり 2	土師器	高台付坏	(15.2)	4.9	7.8	外	回転ナデ	外	灰白 10YR8/2	良好	○	1mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	灰白 10YR8/2					
24-19	16	4区	土器溜まり 2	土師器	高台付坏	(16.6)	(4.6)	(7.3)	外	回転ナデ	外	浅黄橙 10YR8/3	良好	○	1mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	浅黄橙 10YR8/3					
24-20	17	4区	土器溜まり 2	土師器	坏	(10.7)	(2.7)	5.3	外	回転ナデ	外	橙 5YR7/6	良好	○	1.5mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	橙 5YR7/6					
24-21	17	4区	土器溜まり 2	土師器	坏	(11.3)	(3.1)	(6.0)	外	回転ナデ	外	浅黄橙 10YR8/3	良好	○	2.5mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	浅黄橙 10YR8/3					

fig	図版番号	出土地点	出土層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)		調整		色調	焼成	回転糸切	胎土	備考
24-22	17	4区	土器溜まり2	土師器	坏	(11.4)	(2.6)	(5.4)	外	回転ナデ	外	橙 7.5YR7/6	良好	○	1.5mm以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	橙 7.5YR7/6				
24-23	17	4区	土器溜まり2	土師器	坏	(11.5)	3.1	5.0	外	回転ナデ	外	浅黄橙 7.5YR8/6	不良	○	1mm以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	浅黄橙 7.5YR8/6				
24-24	17	4区	土器溜まり2	土師器	坏	(11.6)	2.9	4.9	外	回転ナデ	外	にぶい黄橙 10YR7/3	良好	○	1mm以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	にぶい黄橙 10YR7/3				
24-25	17	4区	土器溜まり2	土師器	坏	(11.8)	(2.6)	5.8	外	回転ナデ	外	浅黄橙 10YR8/4	不良	○	1mm以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	浅黄橙 10YR8/4				
24-26	17	4区	土器溜まり2	土師器	坏	11.9	3.0	6.0	外	回転ナデ	外	淡黄 2.5Y8/3	良好	○	1mm以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	淡黄 2.5Y8/3				
24-27	17	4区	土器溜まり2	土師器	坏	(12.0)	2.6	5.8	外	ヨコナデ、回転ナデ	外	灰白 2.5Y8/2	良好	○	1mm以下の砂粒含む	
									内	ヨコナデ、回転ナデ	内	灰白 2.5Y8/2				
24-28	17	4区	土器溜まり2	土師器	坏	(11.9)	(2.8)	(5.7)	外	回転ナデ	外	にぶい橙 7.5YR7/4	不良	○	1.5mm以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	にぶい橙 7.5YR7/4				
24-29	17	4区	土器溜まり2	土師器	坏	(12.0)	(2.9)	5.9	外	回転ナデ	外	浅黄橙 10YR8/4	良好	○	2mm以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	浅黄橙 10YR8/4				
24-30	17	4区	土器溜まり2	土師器	坏	(12.3)	3.1	6.0	外	回転ナデ	外	灰白 10YR8/2	良好	○	1mm以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	灰白 10YR8/2				
24-31	17	4区	土器溜まり2	土師器	坏	12.0	3.1	5.0	外	回転ナデ	外	灰白 2.5Y8/2	良好	○	1mm以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	灰白 2.5Y8/2				
25-1	18	3区	10層	土師器	高台付坏			7.0	外	回転ナデ	外	にぶい黄橙 10YR7/3	良好	○	1mm以下の砂粒含む	
									内	ナデ	内	黒 10YR2/1				
25-2	18	4B区	10層	土師器	高台付坏			7.0	外	回転ナデ	外	浅黄橙 10YR8/4	不良	○	1mm以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	浅黄橙 10YR8/4				
25-3	21	3区	10層	土師器	坏	(12.4)			外	回転ナデ	外	灰白 2.5Y8/1	良好		1mm以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	灰白 2.5Y8/2				
25-4	18	3区	10層	土師器	坏	(12.4)	(5.0)	(5.6)	外	回転ナデ	外	灰白 10YR8/2	良好	○	1mm以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	灰白 10YR8/2				
25-5	18	4B区	10層	土師器	坏	12.6	3.0	5.4	外	回転ナデ	外	灰白 10YR8/1	良好	○	1mm以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ、ナデ	内	灰白 2.5Y8/1				
25-6	18	4B区	10層	土師器	坏	(12.8)	(4.3)	(5.2)	外	回転ナデ	外	灰白 2.5Y8/2	良好	○	1mm以下の砂粒含む	内側に強い回転痕
									内	回転ナデ	内	灰白 2.5Y8/2				
25-7	18	3区	10層	土師器	坏	(13.5)	(4.9)	(5.2)	外	回転ナデ	外	灰白 10YR8/2	良好	○	1mm以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	灰白 10YR8/2				
25-8	18	3区	10層	土師器	坏	(13.6)	(3.9)	5.8	外	回転ナデ	外	灰白 2.5Y8/2	良好	○	1mm以下の砂粒含む	内側に強い回転痕
									内	回転ナデ	内	灰白 2.5Y8/2				
25-9	21	1区	10層	土師器	坏	(14.4)			外	回転ナデ	外	浅黄橙 7.5YR8/4	良好		2mm以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	にぶい橙 7.5YR7/4				
25-10	21	1区	10層	土師器	皿？	(11.0)			外	ナデ	外	橙 5YR6/6	良好		2mm以下の砂粒含む	
									内	ヨコナデ	内	橙 5YR6/6				
25-11	18	5B区	10層	土師器	底部			(7.0)	外	ナデ	外	橙 7.5YR7/6	良好		1mm以下の砂粒含む	
									内	ナデ	内	橙 7.5YR6/6				
25-12	18	3区	10層	土師器	坏			6.0	外	回転ナデ	外	橙 7.5YR7/6	良好	○	1mm以下の砂粒含む	内側に強い回転痕
									内	回転ナデ	内	橙 7.5YR7/6				
25-13	18	2区	10層	土師器	底部			6.0	外	回転ナデ	外	橙 7.5YR7/6	良好	○	1mm以下の砂粒含む	内側に強い回転痕
									内	回転ナデ	内	橙 7.5YR7/6				
25-14	19	4B区	10層	土師器	皿	(11.3)	(2.9)	5.3	外	回転ナデ	外	浅黄橙 10YR8/3	良好	○	1mm以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	浅黄橙 10YR8/4				
25-15	19	3区	10層	土師器	坏	(11.8)	(3.0)	5.4	外	回転ナデ	外	灰白 2.5Y8/2	良好	○	1mm以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	灰白 2.5Y8/2				
25-16	21	3区	10層	土師器	皿	(12.0)	(2.1)	(5.2)	外	ヨコナデ	外	橙 7.5YR7/6	良好	○	1mm以下の砂粒含む	底部中央がかなり薄い
									内	ヨコナデ	内	橙 7.5YR7/6				
25-17	19	3区	10層	土師器	皿	12.3	3.0	5.0	外	回転ナデ	外	灰白 2.5Y8/2	良好	○	1mm以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	灰白 2.5Y8/2				
25-18	19	3区	10層	土師器	皿	12.2	3.4	(5.4)	外	回転ナデ	外	灰白 10YR8/2	良好	○	2mm以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	灰白 10YR8/2				
25-19	19	5B区	10層	土師器	皿	(8.2)	(1.9)	(5.5)	外	ナデ	外	橙 7.5YR7/6	良好	○	1mm以下の砂粒含む	
									内	ヨコナデ	内	橙 7.5YR7/6				
25-20	19	1区	10層	土師器	皿	8.5	2.0	5.2	外	ヨコナデ	外	黄橙 7.5YR7/8	良好	○	1mm以下の砂粒含む	
									内	ヨコナデ	内	黄橙 7.5YR7/8				
25-21	19	1区	10層	土師器	皿	(8.8)	2.1	6.0	外	回転ナデ	外	浅黄橙 10YR8/3	良好	○	3mm以下で黒褐色の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	浅黄橙 10YR8/3				
25-22	19	1区	10層	土師器	皿	(8.8)	(1.8)	(5.2)	外	回転ナデ	外	にぶい橙 7.5YR7/4	良好	○	3mm以下で黒褐色の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	にぶい橙 7.5YR7/4				
25-23	19	1区	10層	土師器	皿	(8.6)	(1.9)	5.2	外	ヨコナデ	外	にぶい黄橙 10YR6/3	良好	○	2mm以下の砂粒含む	
									内	ヨコナデ	内	にぶい黄橙 10YR7/3				
25-24	19	5B区	10層	土師器	皿	(7.6)	(2.0)	5.0	外	ナデ	外	橙 7.5YR6/6	良好	○	2mm以下の砂粒含む	
									内	ナデ	内	橙 7.5YR6/6				
25-25	20	5B区	10層	土師器	皿	(8.6)	(2.1)	4.8	外	ナデ	外	にぶい黄橙 10YR7/4	良好	○	2mm以下の砂粒含む	
									内	ナデ	内	橙 7.5YR7/6				
25-26	20	3区	10層	土師器	皿	8.6	2.1	4.6	外	ヨコナデ、回転ナデ	外	橙 7.5YR6/6	良好	○	1mm以下の砂粒含む	
									内	ヨコナデ、回転ナデ	内	橙 7.5YR7/6				
25-27	20	3区	10層	土師器	皿	(8.7)	(2.4)	(4.4)	外	回転ナデ	外	橙 5YR6/6	良好	○	1mm以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	橙 5YR6/6				

fig	図版番号	出土地点	出土層位	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整		色調		焼成	回転糸切	胎土	備考
25-28	20	4B区	10 層	土師器	皿	8.7	2.2	3.7	外	ヨコナデ	外	浅黄橙 10YR8/3	良好	○	2mm 以下の砂粒含む	
									内	ヨコナデ	内	浅黄橙 7.5YR8/4				
25-29	20	4B区	10 層	土師器	皿	8.7	2.3	4.0	外	回転ナデ	外	橙 7.5YR7/6	良好	○	1mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	橙 7.5YR7/6				
25-30	20	1 区	10 層	土師器	皿	(8.0)	(1.9)	(4.2)	外	回転ナデ	外	橙 5YR7/6	良好	○	1mm 以下の砂粒含む	内側に不明瞭な凹線
									内	回転ナデ	内	橙 5YR7/6				
25-31	20	2 区	10 層	土製品	土製支脚	残存長(8.2)	残存幅(8.5)	残存高(6.7)	ナデ		橙 2.5YR6/8		良好		2mm 以下の砂粒含む	被熱痕が残る
26-1	20	3 区	北排水溝	土師器	坏	(15.6)	(4.7)	6.0	外	回転ナデ	外	橙 5YR6/8	良好	○	1mm 以下の砂粒含む	ごく僅かに赤彩が残る
									内	回転ナデ	内	橙 5YR6/8				
26-2	20	1 区	北排水溝	土師器	坏	(14.2)	(4.1)	(7.0)	外	回転ナデ	外	橙 7.5YR7/6	良好	○	1mm 以下の砂粒含む	
									内	回転ナデ	内	橙 7.5YR7/6				
26-3	21	2 区	南排水溝	土師器？	不明	残存長(3.9)		残存高(0.8)	摩滅、中央に穿孔		外 橙 5YR7/6 内 橙 5YR7/6		良好		1mm 以下の砂粒含む	土師器底部を何らかに転用したもの？

第 2 表　田渕遺跡出土遺物観察表 (土師)

fig.	図版番号	出土地点	出土層位	計測値 (cm) 長さ	外径	内径	重量 (g)	色調
11-4	13	3 区	7-1 層		1.2	0.4	(3.0)	橙 7.5YR7/6
12-3	13	5A 区	7-3 層	5.4	1.3	0.2	8.1	浅黄橙 10YR8/3
16-7	13	2 区	9 層		1.2	(0.4)	(2.5)	にぶい黄橙 10YR7/4
21-4	14	3 区	土師溜まり 1	4.2	2.1	0.7	17.3	にぶい黄橙 10YR7/4
21-5	14	3 区	土師溜まり 1	3.7	1.9	0.6	10.9	にぶい橙 7.5YR7/4
21-6	14	3 区	土師溜まり 1	3.5	1.9	0.6	10.3	橙 7.5YR7/6
21-7	14	3 区	土師溜まり 1	3.4	1.8	0.5	9.3	橙 7.5YR7/6
21-8	14	3 区	土師溜まり 1		(2.0)	(0.6)	(8.6)	橙 5YR6/6
25-34	21	3 区	10 層		1.9	0.6	(8.2)	橙 5YR6/6
25-35	21	3 区	10 層		(1.0)		(0.9)	橙 7.5YR6/6
25-36	21	3 区	10 層		(1.0)	(0.5)	(0.9)	橙 5YR6/6
25-37	21	3 区	10 層	3.5	1.7	0.5	7.6	浅黄橙 10YR8/4
25-38	21	5B 区	10 層	3.8	1.9	0.4	(10.0)	橙 7.5YR7/6
26-5	21	1 区	北排水溝		1.2	0.5	(4.6)	橙 7.5YR7/6
26-6	21	3 区	北排水溝	5.5	2.1	0.7	23.4	明赤褐 5YR5/8
				以下計測値 (土錘)				
錘 2		2 区	7-3 層		(1.7)	0.3	(3.2)	橙 2.5YR6/8
錘 4		2 区	SX02	(4.0)	(1.5)	(0.4)	(6.3)	にぶい橙 7.5YR7/4
錘 5		2 区	SX02				(0.8)	橙 7.5YR6/6
錘 7		2 区	9 層		(1.5)		(3.7)	橙 5YR6/6
錘 8		2 区	9 層		(1.0)	(0.3)	(1.8)	浅黄橙 10YR8/3

fig.	図版番号	出土地点	出土層位	計測値 (cm) 長さ	外径	内径	重量 (g)	色調
錘 9		2 区	9 層				(1.2)	橙 5YR6/6
錘 10		5A 区	9 層				(4.0)	明赤褐 2.5YR5/6
錘 20		2 区	10 層	(4.7)	(1.9)	(0.6)	(10.1)	橙 5YR6/6
錘 21		5B 区	10 層	4.4	1.6	0.5	10.7	にぶい橙 7.5YR6/4
錘 23		5B 区	10 層		1.2	0.4	(4.1)	浅黄橙 7.5YR8/4
錘 24		4B 区	10 層		1.2	0.4	(2.9)	橙 5YR6/8
錘 25		2 区	10 層				(2.4)	にぶい褐 7.5YR5/4
錘 26		3 区	10 層		(1.5)		(2.4)	橙 5YR6/6
錘 29		2 区	北排水溝		1.5	0.6	(4.7)	灰白 2.5Y8/2
錘 30		2 区	北排水溝		1.3	0.5	(3.7)	にぶい橙 10YR7/4
錘 31		2 区	北排水溝		1.3	0.5	(4.6)	橙　5YR6/6
錘 32		3 区	北排水溝		(1.0)	0.4	(0.9)	橙 7.5YR6/6
錘 33		4A 区	北排水溝		(1.7)	0.3	(4.9)	明赤褐 5YR5/6
錘 34		4 区	西排水溝	3.7	1.2	0.3	(4.3)	橙 7.5YR6/6
錘 35		2 区	南排水溝	4.2	2.0	0.5	15.9	橙 7.5YR7/6
錘 36		4 区	西排水溝		1.9	0.6	(11.8)	明褐 7.5YR5/6
錘 37		3 区	南排水溝				(2.5)	にぶい橙 10YR7/4
錘 38		3 区	南排水溝	4.9	1.6	0.5	9.9	浅黄橙 7.5YR8/4
錘 39		3 区	南排水溝		(1.8)	0.5	(4.8)	にぶい橙 7.5YR7/4
錘 40		3 区	南排水溝		(1.3)		(1.7)	橙 7.5YR7/6

計　40 点

第 3 表　田渕遺跡出土遺物観察表 (陶磁器)

fig	図版番号	出土地点	出土層位	材質	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	成形	釉薬	文様	装飾	推定産地	備考
27-1	22	2 区	SX02	磁器	白磁碗			(16.8)	灰白色	轆轤	透明釉	-	白磁	潮州系	白磁 II
27-2	22	2 区	南排水溝	磁器	白磁碗	(18.0)			灰白色	轆轤	透明釉	-	白磁	広東系	白磁 II
27-3	22	2 区	10 層	磁器	白磁皿	(11.7)		(4.4)	灰白色	轆轤	透明釉	-	白磁	広東系	白磁IV
27-4	22	2 区	10 層	磁器	白磁皿			(4.4)	灰白色	轆轤	透明釉	-	白磁	広東系	白磁IV
27-5	22	5B 区	10 層	磁器	白磁碗			(6.6)	薄褐色	轆轤	透明釉	圏線	白磁・沈線	福建系	白磁IV
27-6	22	2 区	10 層	磁器	白磁碗	(17.0)			灰色	轆轤	透明釉	-	白磁	福建系	12C. 代
27-7	22	5A 区	10 層	磁器	白磁碗	(18.8)			灰色	轆轤	透明釉	圏線	白磁・沈線	福建系	12C. 前半～13C. 代
27-8	22	3 区	南排水溝	磁器	白磁皿			(6.6)	灰色	轆轤	透明釉	-	白磁	福建系	白磁IX
27-9	22	1 区	10 層	磁器	白磁皿			(7.2)	灰色	轆轤	透明釉	-	白磁	福建系	白磁IX
27-10	22	5A 区	7-3 層	磁器	白磁皿			(6.6)	灰白色	轆轤	透明釉	蓮花文	白磁・印花	福建系	14C. ～15C. 前半代 / ピロースクタイプ・二次焼成
27-11	22	4B 区	10 層	磁器	白磁碗			(4.6)	白色	轆轤	透明釉	不明	白磁・掻描	景徳鎮系	12C. 代
27-12	22	5A 区	北排水溝	磁器	青白磁小壺蓋	(9.8)			灰白色	押型	透明釉	連子文	青白磁・押型陽刻	景徳鎮系	12C. 後半～13C. 代
27-13	22	3 区	南排水溝	磁器	青白磁合子蓋	(8.6)			白色	押型	透明釉	鳳凰文	青白磁・押型陽刻	景徳鎮系	12C. 後半～13C. 代
27-14	22	-	不明	磁器	白磁皿	(11.8)			灰色	轆轤	透明釉	-	白磁	景徳鎮系	白磁 E・漆継ぎ
27-15	22	3 区	南排水溝	磁器	青磁碗			(4.8)	青灰色	轆轤	青磁釉	花文・点描文	青磁・掻描・蓋片彫	同安系	同梅 I
27-16	22	5A 区	北排水溝	磁器	青磁碗				灰色	轆轤	青磁釉	圏線・櫛目文	青磁・掻描	同安系	同梅 I

fig	図版番号	出土地点	出土層位	材質	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	成形	釉薬	文様	装飾	推定産地	備考
27-17	22	5B区	10層	磁器	青磁皿			(6.0)	灰色	轆轤	青磁釉	(花文カ)・点描	青磁・線描・蓋片彫	同安系	同皿 I
27-18	22	3区	南排水溝	磁器	青磁碗			(5.6)	灰褐色	轆轤	青磁釉	圏線・劃花文	青磁・蓋片彫	龍泉系	龍椀 I
27-19	22	2区	北排水溝	磁器	青磁碗			(6.4)	灰色	轆轤	青磁釉	劃花文	青磁・蓋片彫	龍泉系	龍椀 I
27-20	22	1区	10層	磁器	青磁碗			6.3	灰色	轆轤	青磁釉	圏線・劃花文	青磁・蓋片彫	龍泉系	龍椀 I
27-21	21	5B区	10層	磁器	青磁碗	(16.2)	6.9	6.0	灰色	轆轤	青磁釉	圏線・劃花文	青磁・蓋片彫	龍泉系	龍椀 I
27-22	22	1区	10層	磁器	青磁碗	(15.8)			灰色	轆轤	青磁釉	連弁文	青磁・鎬	龍泉系	龍椀 II
27-23	22	5B区	10層	磁器	青磁碗				灰色	轆轤	青磁釉	劃花文・連弁文	青磁・鎬・蓋片彫	龍泉系	龍椀 I
27-24	22	1区	10層	磁器	青磁碗	(13.0)			灰色	轆轤	青磁釉	連弁文	青磁・鎬	龍泉系	龍椀 III
27-25	22	5A区	7-3層	磁器	青磁碗	(16.2)			灰色	轆轤	青磁釉	-	青磁	龍泉系	龍碗 D
27-26	22	4A区	北排水溝	磁器	青磁皿	(13.0)			灰色	轆轤	青磁釉	連弁文	青磁・片切彫	龍泉系	15C. 前半代
27-27	22	西区	不明	磁器	青磁碗			(7.8)	灰色	轆轤	青磁釉	圏線・連弁文カ	青磁・印花・線描	龍泉系	15C. 前半代
27-28	22	5B区	不明	磁器	青磁碗	(15.0)			灰色	轆轤	青磁釉	圏線・蓮花文	青磁・蓋片彫	龍泉系	龍椀 I
27-29	22	-	不明	磁器	青花碗	(12.6)			灰白色	轆轤	透明釉・回青	算木文・二重圏線・四方襷文	青花	景徳鎮系	青花碗 B
27-30	22	2区	南壁	磁器	青花蓋付碗	(14.0)			白色	轆轤	透明釉・回青	唐草文・渦繋文	青花	景徳鎮系	-
28-31	23	5B区	10層	陶器	褐釉壺	(9.8)			灰色	-	褐釉	-	-	磁灶窯系	13C. 代
28-32	23	2区	9層	陶器	褐釉壺	-			灰色	-	褐釉	-	-	磁灶窯系	13C. 代
28-33	23	3区	北排水溝	陶器	褐釉壺				灰色	紐作り	褐釉	-	-	越州窯系	12C. 前半～13C. 前半
28-34	23	4A区	10層	陶器	褐釉壺				灰色	紐作り	褐釉	-	-	越州窯系	12C. 前半～13C. 前半
28-35	23	6B区	西排水溝	陶器	青灰碗	(12.4)			灰色	轆轤	灰釉	-	-	朝鮮	15C. 後半～16C. 前半代
28-36	23	1区	南排水溝	陶器	青灰皿	(14.0)			灰色	轆轤	灰釉	-	-	朝鮮	15C. 後半～16C. 前半代
28-37	23	5A区	10層	中世須恵器	鉢				暗灰色	紐作り	-	-	-	東播系	
28-38	23	2区	10層	中世須恵器	片口鉢				暗灰色	紐作り	-	-	-	東播系	
28-39	23	5B区	10層	中世須恵器	片口鉢				暗灰色	紐作り	-	-	-	東播系	
28-40	23	1区	10層	中世須恵器	壺	(16.2)			灰褐色	-	-	-	-	-	
28-41	23	4B区	10層	中世須恵器	壺	(18.4)			灰褐色	-	-	-	-	-	
28-42	23	4A区	10層	中世須恵器	壺・甕				赤褐色	紐作り	-	-	-	-	平行タタキ
28-43	23	3区	南排水溝	中世須恵器	壺・甕				灰褐色	紐作り	-	-	-	-	
28-44	23	5B区	7-3層	陶器	擂鉢				灰褐色	紐作り	-	-	-	備前系	擂目 9 条～
28-45	23	5A区	7-3層	陶器	甕				灰褐色	紐作り	-	-	-	備前系	
28-46	23	2区	7-3層	陶器	壺	(14.2)			灰色	紐作り	-	-	灰落ち	備前系	壺 III A
28-47	23	4A区	北排水溝	陶器	壺	(10.8)			赤褐色	紐作り	-	-	-	備前系	壺 V B～VI A
28-48	23	6A区	7-3層	陶器	甑子カ	(6.0)			灰色	-	-	-	-	-	
28-49	23	5A区	7-1層	陶器	天目碗	-			灰白色	轆轤	鉄釉	-	黒斑	瀬戸美濃系	
28-50	23	6B区	7-3層	陶器	卸目付大皿	-			灰白色	轆轤	灰釉	-	-	瀬戸美濃系	古瀬戸後Ⅲ～Ⅳ
28-51	23	5A区	7-3層	陶器	茶碗	(14.2)			灰白色	轆轤	鉄釉	黒目	箆削り・長石釉散らし	肥前系	17C. 前葉 / 二次焼成
28-52	23	5A区	7-3層	陶器	皿			(4.4)	暗灰色	轆轤	灰釉	-	-	肥前系	九海 I － 1
28-53	23	6B区	西排水溝	陶器	皿			5.2	灰色	轆轤	灰釉	-	-	肥前系	九海 I － 2
28-54	23	4区	北排水溝	瓦質土器	片口鉢				灰白色	紐作り	-	-	-	-	ハケ目
28-55	23	5A区	不明	瓦質土器	鉢				灰白色	紐作り	-	-	-	-	ハケ目

fig	図版番号	出土地点	出土層位	材質	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎土	成形	釉薬	文様	装飾	推定産地	備考
28-56	23	2区	9層	瓦質土器	鉢			(9.0)	灰色	紐作り	-	-	-	-	
28-57	23	5B区	9層	瓦質土器	擂鉢	(26.6)			灰白色	紐作り	-	-	-	-	擂目4条
28-58	23	3区	7-3層	瓦質土器	擂鉢				淡褐色	紐作り	-	-	-	-	擂目5条
28-59	23	3区	7-3層	瓦質土器	擂鉢			(8.8)	淡灰褐色	紐作り	-	-	-	-	擂目4条
28-60	23	5B区	10層	瓦質土器	羽釜	(21.6)			灰白色	-					煤付着
28-61		4B区	10層	陶器	碗	(17.0)			灰色	轆轤	灰釉	-	-	東海系	山茶碗ヵ
28-62		-	排水溝	陶器	擂鉢				淡褐色	紐作り	-	-	-	備前/珠洲	擂目5条～
以下非掲載(陶磁器)															
63	23	1区	7-1層	陶器	天目碗				灰褐色	轆轤	鉄釉	-	-	南平茶葉系	
64	23	2区	10層	陶器	天目碗				暗褐色	轆轤	黒釉・鉄釉	-	鉄釉化粧掛け	閩江系	

第4表　田渕遺跡出土遺物観察表(石器)

fig.	図版番号	出土地点	出土層位	遺物名称	石材	計測値(cm) 長さ	幅	高さ	重量(g)	備考
16-6	13	3区	9層	石錘	変成岩	6.5	6.5	1.2	80.0	
25-32	21	5B区	10層	扁磨石	凝灰岩	(8.1)	5.7	1.2	(64.6)	
25-33	21	4B区	10層	凹石	溶石	5.8	4.5	1.4	77.5	径4mmの穿孔あり。石鋸からの転用
26-4	21	4区	西排水溝	磨石	粘板岩	(4.1)	(2.2)	(0.6)	(8.6)	

計　4点

第5表　田渕遺跡出土遺物観察表(鉄製品)

fig.	図版番号	遺物名	出土地点	出土層位	計測値(cm) 長さ	幅	高さ	重量(g)
29-1	24	刀子	5B区	7-3層	(8.9)	(1.9)		(41.0)
29-2	24	狩股形鉄鏃	6A区	10層	(7.0)			(44.7)
29-3	24	鎌の柄	3区	南排水溝	(4.6)	(0.6)		(8.1)
29-4	24	楔	5A区	10層	(5.2)	(1.4)		(28.7)
29-5	24	釘	3区	7-3層	(7.1)	(0.7)		(24.3)
29-6	24	釘	5A区	10層	(5.6)	(0.4)		(8.1)
29-7	24	紡錘車	4A区	10層		径(4.5)	(3.5)	(37.6)
29-8	24	板材	5A区	7-3層	(3.7)	(4.1)	(0.5)	(59.4)
以下非掲載(鉄製品)								
8		不明鉄製品	3区	7-1層	(3.4)			(12.1)
28		釘	3区	7-1層	(6.6)	(0.9)	(0.6)	(34.6)
37		釘	1区	7-1層	(3.7)	(0.4)	(0.5)	(4.4)
1		釘	4B区	7-3層	(2.3)	(0.6)		(3.3)
3		釘	6B区	7-3層	(3.1)	(0.7)	(0.2)	(3.8)
11		釘	5A区	7-3層	(4.4)	(0.8)		(26.1)
54		刀子	5B区	7-3層	(5.3)	(2.3)	(0.2)	(21.1)
27		釘	5B区	7-3層	(3.9)	(0.7)	(0.6)	(4.4)
25		釘	5B区	7-3層	(6.6)			(15.1)
26		釘	5B区	7-3層	(3.1)	(0.5)	(0.5)	(3.5)
24		釘	5B区	7-3層	(4.7)	(0.7)		(9.6)
7		釘?	6A区	7-3層	(4.6)	(2.0)		(33.6)
40		釘	5B区	7-3層	(4.1)	(0.7)		(9.6)
36		釘	5B区	7-3層	(6.2)	(0.6)	(0.6)	(21.7)
33		釘	5B区	7-3層	(4.8)	(0.5)	(0.6)	(9.4)
30		釘	4B区	7-3層	(4.9)	(0.7)	(0.5)	(13.1)

fig.	図版番号	遺物名	出土地点	出土層位	計測値(cm) 長さ	幅	高さ	重量(g)
2		釘	5A区	9層	(2.5)	(0.6)	(0.6)	(4.8)
56		刀子	3区	9層	(1.4)	(1.2)	(0.4)	(1.2)
23		釘	2区	9層	(5.0)	(1.3)		(28.1)
38		不明鉄製品	3区	9層	(3.8)	(2.2)		(27.1)
31		釘	3区	9層	(2.2)	(0.5)	(0.5)	(1.9)
35		刀子	3区	9層	(2.4)	(1.5)	(0.3)	(4.3)
32		釘	3区	9層	(2.2)	(1.0)		(4.6)
4		釘	5A区第3遺構面		(6.6)	(0.6)	(0.6)	(26.8)
5		釘	5B区	10層	(3.6)	(0.6)	(0.6)	(14.6)
6		板状鉄製品	4A区	10層	(4.4)	(2.5)	(0.2)	(13.5)
14		釘	4A区	10層	(3.8)	(0.7)	(0.7)	(10.8)
17		楔?	5B区	10層	(7.1)	(1.6)		(39.7)
48		不明鉄製品	5B区	10層	(4.3)	(2.2)	(0.5)	(31.5)
44		釘	5A区	10層	(6.7)			(24.7)
42		釘	3区	10層	(6.6)			(14.4)
9		板材	2区	北排水溝	(2.7)	(2.0)	(0.2)	(6.3)
10		釘	2区	北排水溝	(4.7)	(0.5)	(0.5)	(10.5)
46		釘	5A区	北排水溝	(4.0)			(4.3)
43		刀子	3区	北排水溝	(4.2)	(1.1)	(0.4)	(8.0)
12		楔	2区	南排水溝	(6.8)	(3.5)	(0.7)	(94.9)
39		釘	2区	南排水溝	(4.2)	(0.6)	(0.6)	(11.5)
41		釘	4B区	南排水溝	(4.2)	(0.6)		(5.6)
19		不明鉄製品	不明	不明	(2.4)	(0.5)		(22.2)
50		不明鉄製品	不明	不明	(3.4)	(2.3)	(0.4)	(33.0)

計　48点

第6表　田渕遺跡出土遺物観察表(鍛冶・製鉄関連)

fig.	図版番号	遺物名	出土地点	出土層位	計測値(cm) 長さ	幅	高さ	重量(g)	磁着度	メタル度
19-1	24	羽口	5B区	SK02	(13.2)	(13.2)	(9.0)	775.0	PIII	1.6cm
30-1	24	碗形滓	5B区	10層	13.5	17.3	7.8	1800.0	8	H(○)
30-2	24	流動滓	5A区	第3遺構面	(9.1)	(8.0)	(3.5)	(454.0)	6	錆(△)
30-3	24	流動滓	5B区	10層	(5.5)	(6.2)	(3.1)	(130.0)	5	錆(△)
以下非掲載(鍛冶・製鉄関連遺物)										
1		流動滓		耕作土	(3.2)	(2.7)	(1.8)	(18.9)	2	錆(△)
2		鉄滓		耕作土	4.8	4.5	4.8	141.9	4	錆(△)
3		鉄滓		耕作土	5.4	4.9	4.8	189.0	4	錆(△)
4		鉄滓		耕作土	3.4	2.5	1.9	18.9	3	錆(△)
5		流動滓	3区	7-1層	(5.2)	(3.8)	(2.6)	(69.2)	2	錆(△)
6		流動滓	5B区	7-1層	(7.3)	(6.4)	(3.2)	(156.8)	4	錆(△)

fig.	図版番号	遺物名	出土地点	出土層位	計測値(cm) 長さ	幅	高さ	重量(g)	磁着度	メタル度
7		流動滓	3区	7-1層	(5.8)	(5.8)	(4.4)	(168.7)	5	錆(△)
8		鉄滓	2区	7-1層	3.0	1.3	1.3	5.0	4	錆(△)
9		鉄滓	3区	7-1層	6.7	4.8	5.7	214.2	6	錆(△)
10		鉄滓	3区	7-1層	2.4	1.9	1.6	6.9	3	錆(△)
11		鉄滓	3区	7-1層	3.3	2.0	1.5	15.3	3	錆(△)
12		鉄滓	3区	7-1層	4.5	2.5	1.4	20.9	3	錆(△)
13		鉄滓	3区	7-1層	2.5	1.3	1.1	5.1	1	錆(△)
14		鉄滓	3区	7-1層	6.7	4.8	5.7	214.2	6	錆(△)
15		鉄滓	3区	7-1層	3.3	2.7	2.2	19.3	8	H(○)
16		羽口	2区	7-3層	(2.5)	(2.7)	(1.4)	(9.1)		
17		炉壁?	2区	7-3層	(4.2)	(3.8)	(3.2)	(37.2)		

fig.	図版番号	遺物名	出土地点	出土層位	計測値 (cm)			重量 (g)	磁着度	メタル度
					長さ	幅	高さ			
18		炉壁？	4B 区	7-3 層	(3.3)	(3.3)	(1.9)	(14.9)		
19		鉄滓	3 区	7-3 層	2.3	1.6	1.6	7.8	4	銹 (△)
20		鉄滓	3 区	7-3 層	2.7	2.0	1.4	9.9	2	銹 (△)
21		鉄滓	2 区	7-3 層	3.5	2.2	1.6	12.4	3	銹 (△)
22		鉄滓	4B 区	7-3 層	2.1	1.4	1.3	2.4	1	銹 (△)
23		鉄滓	3 区	7-3 層	1.3	1.1	0.5	0.8	1	銹 (△)
24		鉄滓	3 区	7-3 層	3.0	1.8	1.7	15.1	2	銹 (△)
25		鉄滓	3 区	7-3 層	1.0	0.8	0.3	0.3	1	銹 (△)
26		鉄滓	3 区	7-3 層	3.1	2.6	2.0	9.9	3	銹 (△)
27		鉄滓	4B 区	7-3 層	1.5	1.6	1.5	4.8	3	銹 (△)
28		鉄塊	4B 区	7-3 層	3.5	3.1	2.1	24.3	8	銹 (△)
29		鉄塊	1 区	7-3 層	2.5	2.3	1.2	7.3	6	銹 (△)
30		鉄塊	3 区	7-3 層	4.8	3.3	3.3	48.5	9	H(○)
31		鉄塊	4A 区	7-3 層	3.1	2.3	2.3	21.0	8	H(○)
32		羽口	4A 区	9 層	(7.0)	(6.6)	(4.1)	(140.9)		
33		炉壁？	1 区	9 層	(3.0)	(1.7)	(1.5)	(5.1)		
34		炉壁？	1 区	9 層	(1.6)	(1.3)	(0.9)	(1.2)		
35		流動滓	1 区	9 層	(3.0)	(2.1)	(1.3)	(12.5)	2	銹 (△)
36		流動滓	4A 区	9 層	(5.7)	(5.5)	(3.2)	(149.2)	5	銹 (△)
37		鉄滓	3 区	9 層	3.0	2.3	1.3	8.6	2	銹 (△)
38		鉄滓	5B 区	9 層	4.5	2.9	2.8	47.1	3	銹 (△)
39		鉄滓	5B 区	9 層	2.0	1.3	0.6	1.7	2	銹 (△)
40		鉄滓	4B 区	9 層	3.2	1.6	1.7	9.3	4	銹 (△)
41		鉄滓	5A 区	9 層	2.3	2.1	1.7	15.5	3	銹 (△)
42		鉄塊	5B 区	9 層	1.9	1.8	1.3	4.9	5	銹 (△)
43		鉄塊	5B 区	9 層	3.7	3.1	1.9	45.6	9	L(●)
44		羽口	5B 区	SK02	(5.5)	(4.0)	(1.9)	(31.7)		
45		羽口	5B 区	SK02	(4.0)	(3.3)	(2.9)	(32.0)		
46		炉壁？	5B 区	SK02	(2.7)	(1.7)	(1.8)	(6.1)		
47		鉄滓	5B 区	SK02	4.2	1.9	1.8	15.6	8	銹 (△)
48		鉄滓	5B 区	SK02	6.8	5.6	4.3	97.7	3	銹 (△)
49		鉄滓	5B 区	SK02	5.3	4.9	3.2	41.3	4	銹 (△)
50	24	鍛造剥片	5B 区	SK02				総量 7.8	5	銹 (△)
51	24	粒状滓	5B 区	SK02				総量 0.7	3	銹 (△)
52		鉄滓	5A 区	第 3 遺構面	5.7	5.6	4.7	118.5	5	銹 (△)
53		鉄滓	5A 区	第 3 遺構面	3.1	2.1	1.4	9.1	1	銹 (△)
54		鉄滓	5A 区	第 3 遺構面	5.3	4.4	3.2	102.3	3	銹 (△)
55		鉄滓	5A 区	第 3 遺構面	8.2	6.0	4.6	252.8	7	H(○)
56		鉄滓	5A 区	第 3 遺構面	3.5	3.5	2.3	24.7	2	銹 (△)
57		鉄滓	5A 区	第 3 遺構面	2.8	2.1	1.6	7.7	2	銹 (△)
58		鉄滓	5A 区	第 3 遺構面	9.2	6.5	5.8	241.5	4	銹 (△)
59		鉄滓	5A 区	第 3 遺構面	2.4	2.5	1.6	14.2	2	銹 (△)
60		鉄滓	5A 区	第 3 遺構面	3.9	3.1	2.6	42.2	3	銹 (△)
61		鉄滓	5A 区	第 3 遺構面	4.5	4.1	3.3	45.3	3	銹 (△)
62		鉄滓	5A 区	第 3 遺構面	5.7	4.6	3.5	117.9	5	銹 (△)
63		鉄滓	5A 区	第 3 遺構面	2.5	2.6	2.0	8.9	3	銹 (△)
64		鉄滓	5A 区	第 3 遺構面	8.1	5.9	5.5	261.1	4	銹 (△)
65		鉄滓	5A 区	第 3 遺構面	3.1	2.4	1.5	13.2	3	銹 (△)
66		鉄滓	5A 区	第 3 遺構面	2.7	2.3	2.1	20.1	4	銹 (△)
67		鉄滓	5A 区	第 3 遺構面	6.1	4.1	4.4	102.8	3	銹 (△)
68		鉄滓	5A 区	第 3 遺構面	3.0	3.2	2.5	32.8	3	銹 (△)
69		鉄滓	5A 区	第 3 遺構面	6.0	4.9	3.2	77.8	5	銹 (△)
70		鉄塊	4 区	第 3 遺構面	7.1	4.1	4.3	147.5	13	H(○)
71		鉄塊	5A 区	第 3 遺構面	8.7	6.4	4.1	284.3	13	L(●)
72		鉄滓	5A 区	10 層	4.9	4.7	4.2	92.4	3	銹 (△)
73		羽口	5B 区	10 層	(5.8)	(3.6)	(1.6)	(27.9)		
74		羽口	5B 区	10 層	(4.3)	(3.6)	(2.6)	(38.3)		
75		炉壁	4A 区	10 層	(5.2)	(3.3)	(2.1)	(33.5)		
76		炉壁？	5A 区	10 層	(2.3)	(2.1)	(1.2)	(3.5)		
77		炉壁？	5A 区	10 層	(1.3)	(1.2)	(0.4)	(0.6)		
78		炉壁？	5A 区	10 層	(2.6)	(2.0)	(1.6)	(6.8)		
79		炉壁？	5B 区	10 層	(2.1)	(1.4)	(1.6)	(4.6)		
80		炉壁？	6B 区	10 層	(3.0)	(1.5)	(1.1)	(3.2)		
81		炉壁？	6B 区	10 層	(1.5)	(1.0)	(0.6)	(0.5)		
82		碗形滓	5B 区	10 層	10.4	8.0	4.6	434.0	5	銹 (△)
83		碗形滓	5A 区	10 層	11.5	7.3	4.1	428.7	4	銹 (△)
84		碗形滓	5B 区	10 層	6.0	4.4	1.6	41.9	7	H(○)
85		流動滓	5A 区	10 層	(4.5)	(3.0)	(3.7)	(44.9)	2	銹 (△)
86		流動滓	5A 区	10 層	(4.0)	(3.3)	(2.0)	(48.6)	5	銹 (△)
87		流動滓	5A 区	10 層	(7.5)	(6.8)	(4.3)	(211.8)	3	銹 (△)
88		鉄滓	5B 区	10 層	3.7	3.0	2.3	22.5	3	銹 (△)
89		鉄滓	4A 区	10 層	5.9	5.1	3.7	128.6	9	H(○)
90		鉄滓	5B 区	10 層	3.2	2.4	2.0	11.0	2	銹 (△)
91		鉄滓	5B 区	10 層	1.7	0.8	0.7	1.2	4	銹 (△)
92		鉄滓	5B 区	10 層	10.6	9.2	7.5	568.2	4	銹 (△)
93		鉄滓	5B 区	10 層	3.0	2.0	1.4	7.0	4	銹 (△)
94		鉄滓	4A 区	10 層	8.4	5.7	4.0	182.5	8	H(○)
95		鉄滓	6B 区	10 層	11.5	8.1	6.8	593.9	7	H(○)
96		鉄滓	2 区	10 層	2.4	2.1	0.7	4.0	1	銹 (△)
97		鉄滓	6B 区	10 層	1.2	1.1	1.1	1.8	3	銹 (△)
98		鉄滓	5B 区	10 層	8.1	5.4	3.3	127.2	2	銹 (△)
99		鉄滓	3 区	10 層	4.7	3.5	3.2	60.7	3	銹 (△)
100		鉄滓	6B 区	10 層	2.1	1.7	1.3	4.2	5	銹 (△)
101		鉄滓	5A 区	10 層	5.0	2.9	1.9	31.9	4	銹 (△)
102		鉄滓	4A 区	10 層	2.9	1.7	1.7	8.6	6	銹 (△)
103		鉄滓	5B 区	10 層	3.4	2.6	2.1	20.5	6	銹 (△)
104		鉄滓	5B 区	10 層	2.9	2.6	2.2	21.3	4	銹 (△)
105		鉄滓	5A 区	10 層	3.3	2.4	1.9	12.0	2	銹 (△)
106		鉄滓	5B 区	10 層	2.2	1.3	1.1	4.0	4	銹 (△)
107		鉄滓	5A 区	10 層	3.5	3.1	1.7	13.9	2	銹 (△)
108		鉄滓	5B 区	10 層	2.3	2.1	1.7	6.6	2	銹 (△)
109		鉄滓	4B 区	10 層	4.6	6.0	5.1	189.7	5	銹 (△)
110		鉄滓	5B 区	10 層	5.2	3.4	2.1	35.7	4	銹 (△)
111		鉄滓	5B 区	10 層	4.2	4.5	2.6	39.2	3	銹 (△)
112		鉄滓	3 区	10 層	6.9	4.2	3.2	107.3	5	銹 (△)
113		鉄滓	5A 区	10 層	3.1	4.1	1.6	22.1	3	銹 (△)
114		鉄滓	5B 区	10 層	3.5	3.3	2.0	28.5	2	銹 (△)
115		鉄滓	6B 区	10 層	3.0	2.3	1.4	11.0	2	銹 (△)
116		鉄滓	5A 区	10 層	3.4	1.8	1.6	9.4	2	銹 (△)
117		鉄滓	5B 区	10 層	6.3	5.0	4.7	130.5	4	銹 (△)
118		鉄滓	5A 区	10 層	5.3	3.0	2.2	39.1	2	銹 (△)
119		鉄滓	5A 区	10 層	3.1	2.5	2.4	13.6	3	銹 (△)
120		鉄滓	5A 区	10 層	7.9	7.4	4.4	213.5	3	銹 (△)
121		鉄滓	5A 区	10 層	7.2	3.3	2.9	83.7	4	銹 (△)
122		鉄塊	2 区	10 層	5.1	4.1	3.6	49.5	9	銹 (△)
123		鉄塊	5B 区	10 層	3.3	3.1	1.7	14.4	8	銹 (△)
124		鉄塊	5B 区	10 層	3.0	1.7	1.8	10.5	6	銹 (△)
125		鉄塊	5B 区	10 層	3.1	1.9	1.5	9.3	7	銹 (△)
126		鉄塊	4A 区	10 層	2.4	2.3	1.9	13.9	8	銹 (△)
127		鉄塊	4A 区	10 層	3.5	2.0	1.8	20.3	9	銹 (△)
128		鉄塊	5B 区	10 層	1.4	1.4	1.0	2.5	6	銹 (△)
129		鉄塊	5A 区	10 層	2.5	2.3	1.3	7.0	6	銹 (△)
130		鉄塊	5A 区	10 層	3.6	2.4	1.5	15.2	6	H(○)
131		鉄塊	5B 区	10 層	2.3	2.3	1.7	13.6	9	H(○)
132		鉄塊	5B 区	10 層	7.7	5.9	4.2	237.2	13	H(○)
133		鉄塊	4A 区	10 層	4.3	3.6	3.1	39.8	11	H(○)
134		鉄塊	5B 区	10 層	3.1	2.3	1.6	12.2	8	H(○)
135		鉄塊	5B 区	10 層	4.6	2.7	1.8	31.1	8	H(○)
136		鉄塊	5B 区	10 層	2.6	1.9	1.7	10.8	9	H(○)
137		鉄塊	5B 区	10 層	2.7	2.2	0.7	6.5	10	H(○)
138		鉄塊	4A 区	10 層	6.8	6.0	2.9	144.1	12	H(○)
139		鉄塊	4A 区	10 層	3.1	1.7	1.7	10.2	8	H(○)
140		鉄塊	3 区	10 層	5.0	2.9	2.0	35.4	8	H(○)
141		鉄塊	5B 区	10 層	2.7	2.0	1.6	9.0	4	M(◎)
142		鉄塊	4A 区	10 層	7.5	7.2	4.3	273.8	12	L(●)
143		鉄塊	4A 区	10 層	7.8	6.2	5.1	341.2	12	L(●)
144		鉄塊	4B 区	10 層	4.1	3.5	2.9	55.1	10	L(●)
145		鉄塊	5A 区	10 層	5.5	4.2	2.5	82.0	10	L(●)
146		流動滓	2 区	北排水溝	(3.2)	(2.3)	(1.1)	(16.2)	3	銹 (△)
147		鉄滓	2 区	北排水溝	3.0	2.4	2.6	20.5	3	銹 (△)
148		鉄滓	2 区	北排水溝	2.9	1.9	1.5	11.0	2	銹 (△)
149		羽口	4 区	南排水溝	(8.3)	(6.0)	(3.9)	(141.0)		
150		炉壁？	2 区	南排水溝	(3.0)	(2.6)	(2.5)	(12.2)		
151		鉄滓	1 区	南排水溝	4.5	2.7	2.0	37.2	3	銹 (△)
152		鉄滓	2 区	南排水溝	4.8	2.8	1.9	18.2	3	銹 (△)
153		炉壁	3 区	南排水溝	(6.1)	(5.1)	(5.8)	(137.1)		
154		鉄滓	3 区	南排水溝	3.3	1.9	1.5	8.2	4	銹 (△)
155		鉄滓	3 区	南排水溝	4.5	4.1	4.2	74.9	7	銹 (△)
156		鉄滓	2 区	南排水溝	6.4	4.4	3.2	106.4	9	H(○)
157		鉄滓	4B 区	南排水溝	5.4	5.1	3.0	122.8	9	M(◎)
158		鉄滓	1 区	南排水溝	1.8	1.6	0.5	1.4	1	銹 (△)
159		鉄滓	5B 区	南排水溝	8.5	7.5	7.4	346.7	8	H(○)
160		鉄滓	4B 区	南排水溝	5.1	3.7	2.5	64.0	5	銹 (△)
161		鉄塊	5B 区	南排水溝	2.9	2.6	2.3	22.3	6	銹 (△)
162		鉄塊	1 区	南排水溝	3.0	2.7	2.0	28.0	9	H(○)
163		鉄塊	3 区	南排水溝	10.6	10.0	6.8	738.7	12	H(○)
164		鉄塊	1 区	南排水溝	2.8	2.6	2.0	15.1	9	H(○)
165		鉄塊	4B 区	南排水溝	5.6	4.0	3.4	99.2	10	L(●)
166		鉄滓	不明	不明	7.6	5.5	5.2	319.1	5	銹 (△)
167		鉄塊	不明	不明	4.9	4.3	3.6	80.5	7	H(○)

碗形滓 = 碗形鍛冶滓

計 171 点

写真図版

上空から見た田渕遺跡東区 (西から)

上空から見た田渕遺跡東区 (真上から)

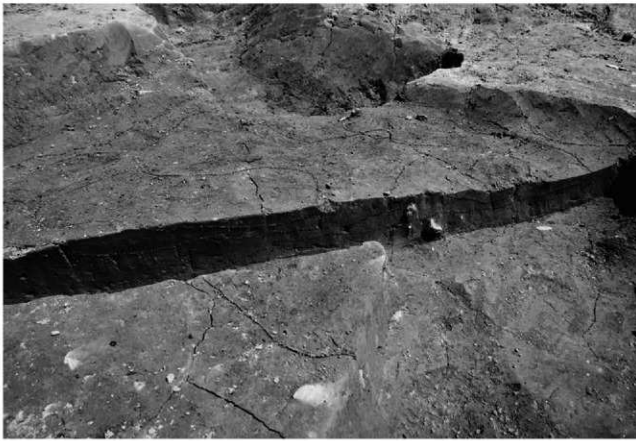
上空から見た田渕遺跡西区 (西から)

上空から見た田渕遺跡西区 (真上から)

調査前の状況（西から）

調査前の状況（北東から）

SK01 出土状況 (南から)



焼土 01 出土状況 (北から)

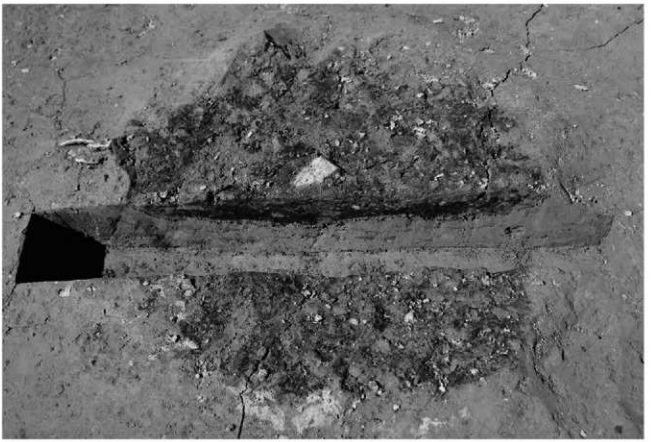
SX02 出土状況 (北東から)

SX03 出土状況 (南から)

第 2 遺構面柱穴列・東区 (西から)

第 2 遺構面柱穴列・西区 (東から)

SK04(焼土 03) 出土状況 (東から)



SK04(焼土 03) 半裁状況 (南から)

SK02 半裁状況 (北西から)

SK02 半裁状況 (南東から)

SK02 完掘状況 (西から)

SK03 半裁状況 (南東から)

土器溜まり 1 出土状況（北東から）

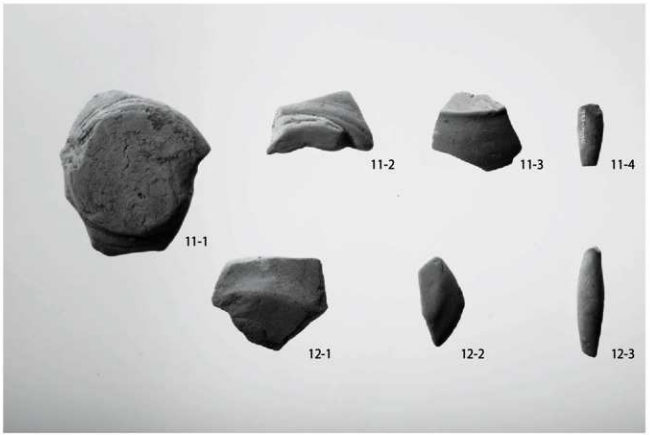
土器溜まり 1 出土状況（南西から）

土器溜まり 2 出土状況 (北東から)

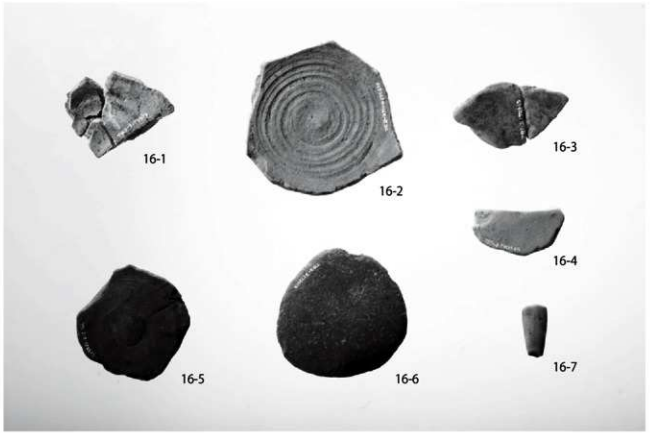
土器溜まり 2 出土状況 (南から)

土器溜まり 2 出土状況（北東から）

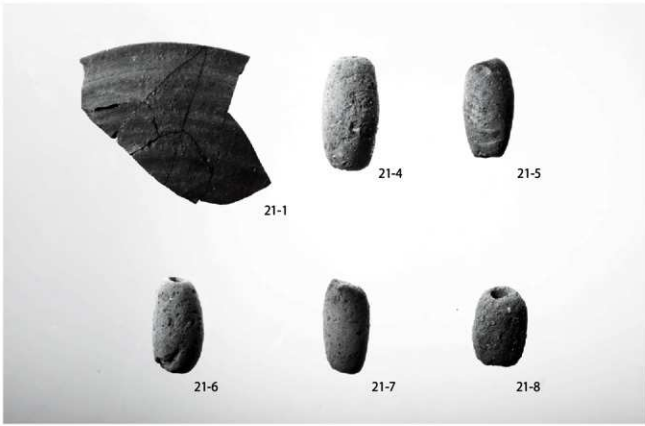
土器溜まり 2 出土状況（南東から）



7-1 層、7-3 層出土遺物



第 9 層出土遺物



土器溜まり 1 出土遺物

24-1

24-6

24-2

24-7

24-3

24-8

24-4

24-9

24-5

24-10

土器溜まり 2 出土遺物 (1)

土器溜まり 2 出土遺物　(2)

24-20

24-21

24-22

24-23

24-24

24-25

24-26

24-27

24-28

24-29

24-30

24-31

土器溜まり 2 出土遺物 (3)

25-1

25-7

25-2

25-8

25-4

25-11

25-5

25-12

25-6

25-13

第 10 層出土遺物　(1)

25-14

25-20

25-15

25-21

25-17

25-22

25-18

25-23

25-19

25-24

第 10 層出土遺物 (2)

25-25

25-29

25-26

25-30

25-27

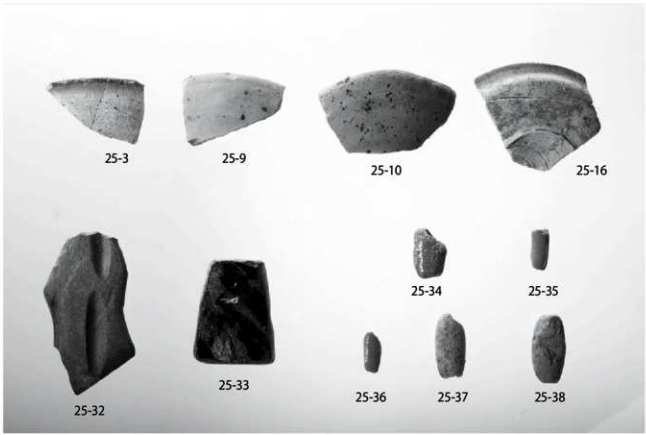
25-31

25-28

26-1

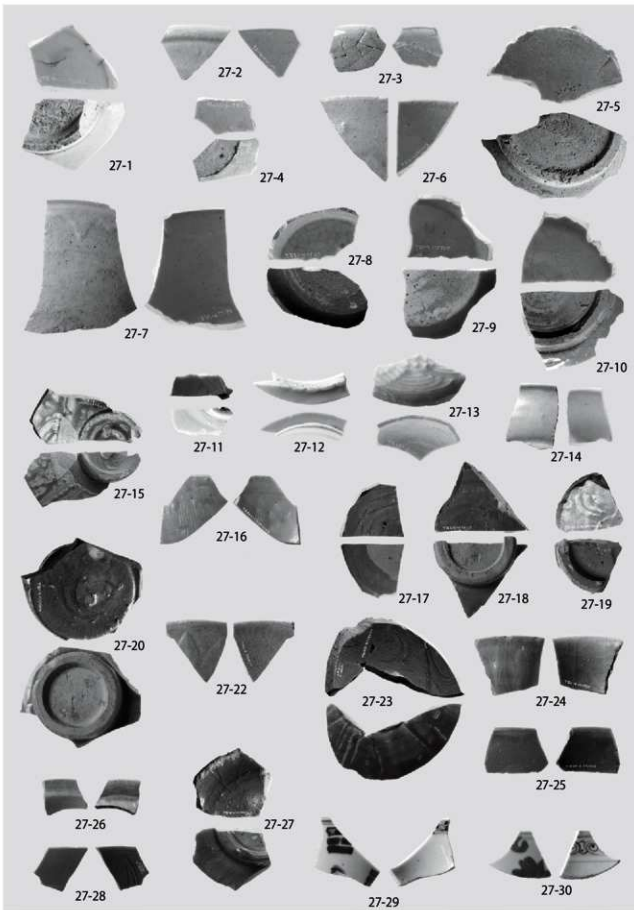
26-2

第 10 層出土遺物 (3)、層位不明遺物　(1)

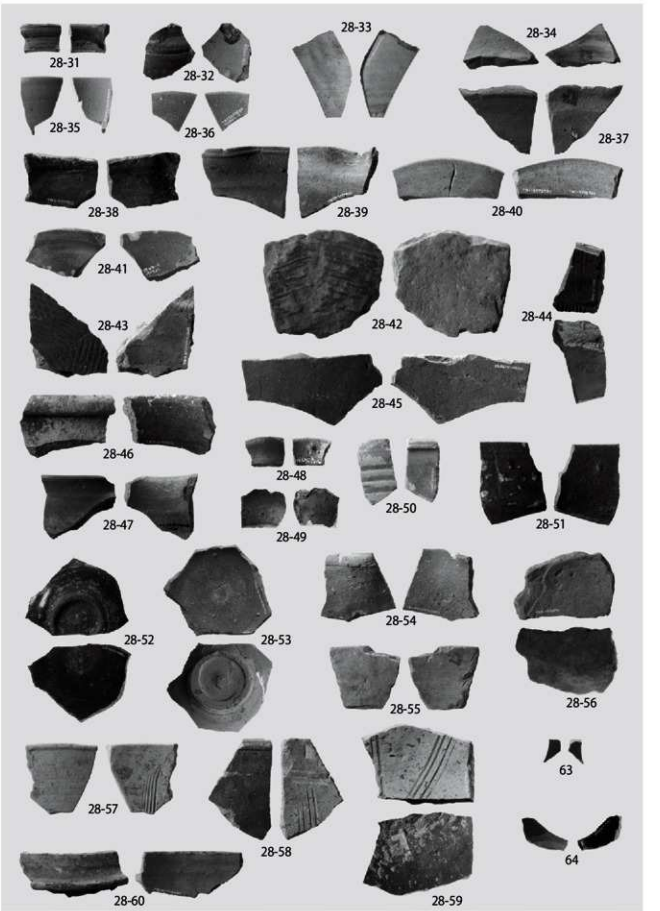


第 10 層出土遺物 (4)

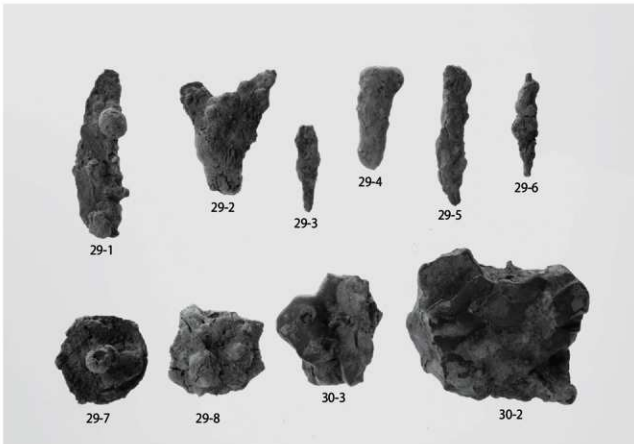
層位不明遺物 (2)、出土陶磁器類 (1)


27-1
27-2
27-3
27-4
27-5
27-6
27-7
27-8
27-9
27-10
27-11
27-12
27-13
27-14
27-15
27-16
27-17
27-18
27-19
27-20
27-22
27-23
27-24
27-25
27-26
27-27
27-28
27-29
27-30

出土陶磁器類 (2)


28-31
28-32
28-33
28-34
28-35
28-36
28-37
28-38
28-39
28-40
28-41
28-42
28-43
28-44
28-45
28-46
28-47
28-48
28-49
28-50
28-51
28-52
28-53
28-54
28-55
28-56
28-57
28-58
28-59
28-60
63
64

出土陶磁器類 (3)



出土鉄製品、流動滓

第 10 層出土碗形鍛冶滓

SK02 埋土内出土鍛造剥片

SK02 内出土羽口

SK02 埋土内出土粒状滓

報告書抄録

フリガナ	タブチイセキ
書名	田渕遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	一級河川江の川直轄河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	1
編著者名	増田浩太、阿部賢治、幸村康子、上山晶子、渡辺正巳
編集機関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
所在地	〒690-0131　島根県松江市打出町 33 番地　TEL：0852-36-8608　FAX：0852-36-8025 E-mail：maibun@pref.shimane.lg.jp　http：//www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/
発行年月日	2018（平成 30）年 6 月 29 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
たぶちいせき 田渕遺跡	しまねけんごうつしかわひらちょう 島根県江津市川平町 みなみかわのぼり 南川上 153-1 外	32202	D340	34° 59′ 49″	132° 16′ 55″	2017 0523 ～ 2017 1031	950	河川改修

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田渕遺跡	集落	中世	鍛冶炉 土器溜まり 柱穴列	須恵器、土師質土器、土製品、鉄製品、陶磁器、石器	中世の小鍛冶炉と土器溜まりを検出

要約

田渕遺跡は、江の川とその支流である奥谷川に挟まれた段丘上の遺跡である。両河川の度重なる氾濫により非常に厚い堆積層が存在し、近世以降は主として畑作地として利用されていたと考えられる。表土下約 2 ～ 3m では、主に 12 世紀から 13 世紀にかけての遺構や遺物が出土している。遺構は、柵列もしくは塀を構成すると推定される柱穴列や、土師質土器を一括廃棄したと考えられる土器溜まりが発見された。出土遺物には、これらの遺構に伴う土師質土器の坏や皿、中国製陶磁器類、国産の陶磁器類がある。また小型の鉄製品を製作したと考えられる小鍛冶炉が 3 ヶ所確認され、周囲からは羽口片や滓などの関連遺物も出土した。滓には流動滓などの製鉄・精錬関連遺物も見られ、周辺に鉧などの遺跡が存在した可能性がある。

田渕遺跡

一級河川江の川直轄河川改修事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 1

発　行　2018(平成 30) 年 6 月
発行者　島根県教育委員会
編　集　島根県教育庁埋蔵文化財調査センター
〒 690-0131　島根県松江市打出町 33 番地
電話　0852-36-8608
http://www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/
印　刷　松栄印刷有限会社